# 川越高等学校応援部史

熱血の
闘魂高く

第43回日輪の下に（於 川越高校体育館　平成30年2月11日）

第54回演技発表会（平成30年9月2日）

陸上競技大会（平成30年10月4日）

サッカー応援（平成30年10月13日）

駅伝応援（平成30年11月6日）

小江戸川越ハーフマラソン（平成30年11月25日）

110番の日（於 川越駅東口駅前広場　平成31年1月12日）

卒業式（平成31年3月13日）

県道川越北環状線開通式（平成31年3月24日）

丸広百貨店創立70周年 まるひろ文化祭
（於 １階西口店頭　平成31年4月27日）

水泳応援（令和元年6月22日）

野球応援（於 熊谷公園野球場 対熊谷工業高戦 令和元年7月11日）

# 2019

（令和元年）

第54代

（顧問）

坂東正己先生

倉繁章先生

長島一樹先生

団長　千葉 涼介

副団長　川合 響

統制　戸口 敦生

旗手長　前川 俊輔

鼓手長兼総務

吉村 奏太郎

渉外　伊藤 大星

渉外　糟谷 廉太朗

総務　中村 歩

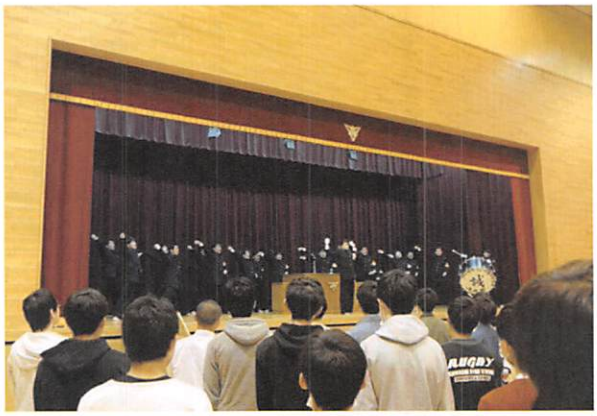
総務兼新人監督

佐々木 心太郎

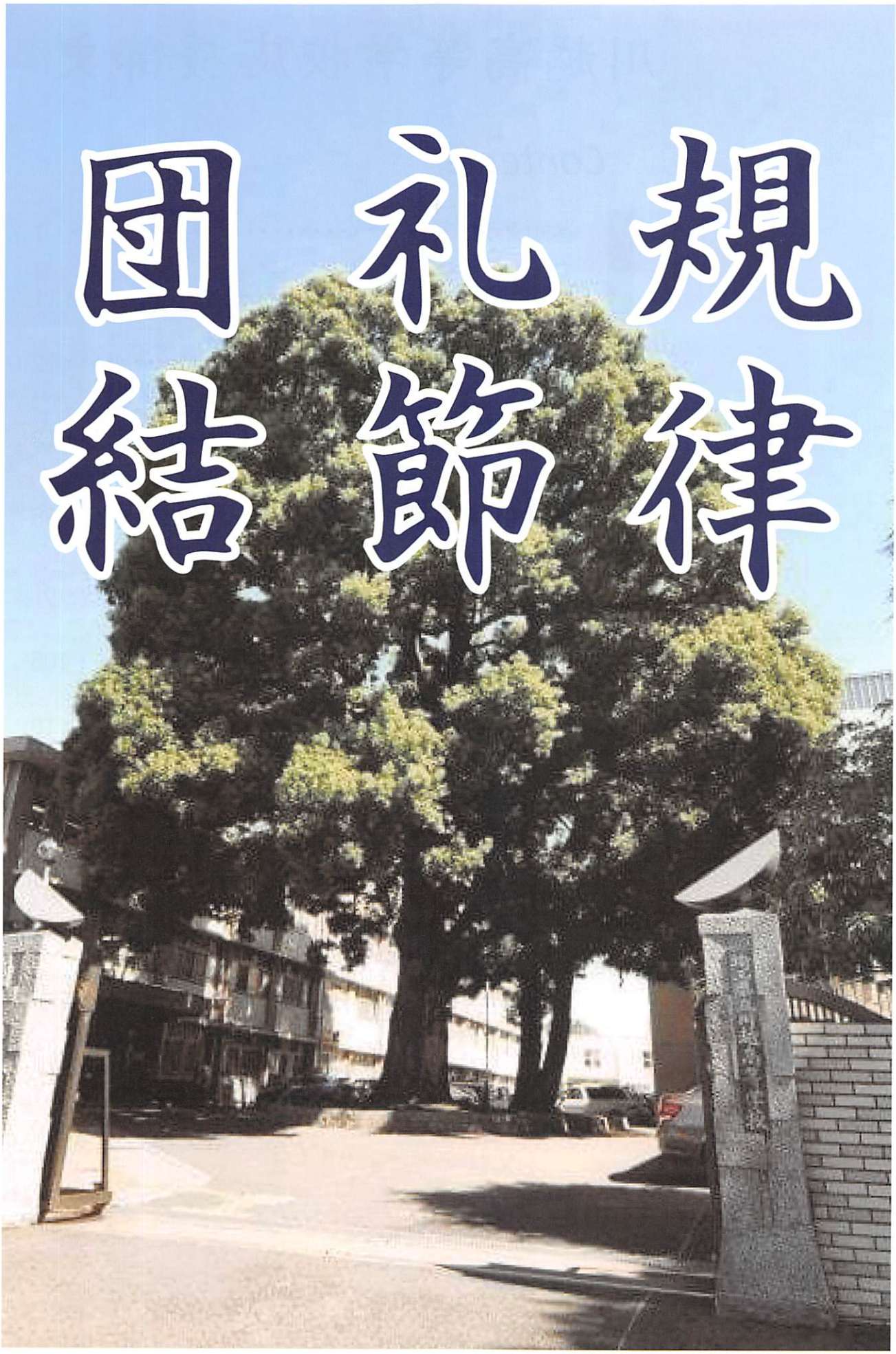
新人監督　松本 真一郎

入学式（平成31年4月5日）

対面式（平成31年4月8日）



終業式（平成31年3月22日）


規律
礼節
団結

# 川越高等学校応援部史

## Contents


巻頭グラビア……1

特別寄稿　顧問　坂東正己先生……11

挨拶　松井哲OB会長……12

**応援部通史**……13

**伝統の系譜**……35

**応援歌物語**……91

川越高等学校の歌……105

年表……118

付録・応援部小史……131

あとがき……132

参考文献……133

＜表紙＞

題字　大室 博光（第29代・平成元年3月卒）

写真　昭和40年夏の野球応援（於 大宮球場　熊谷高校戦）

# 特別寄稿　祝！『川越高等学校応援部史』完成

川越高校応援部顧問　坂東　正己

『川越高等学校応援部史』の発刊、誠におめでとうございます。資料収集・執筆にまさに心血を注いでおられた菅野真二氏の姿を間近で拝見しておりましたので、この『応援部史』の完成は他人事とは思えぬ喜びであります。

期せずして、本校ＯＢのノンフィクションライター神山典士氏が『川越高校物語』をこの『応援部史』と同時期に執筆中でしたが、菅野氏はお忙しい中、神山氏からの取材も受けておられました。その際私は、神山氏より「菅野氏にはノンフィクションの著書がある」という情報を得、早速ご著書『ニッポン野球の青春』（大修館書店）を手に入れ、拝読致しました。妥協を許さぬ、綿密な調査に基づく客観的な記述でありながら、読者を感動させるその手法は、吉村昭氏の歴史小説を彷彿とさせるものでありました。私は、「最後の早慶戦」の場面では涙を抑えることができませんでした。まだお読みでない方は是非お読みいただくことをお薦めいたします。菅野氏は『応援部史』にも、同様の執筆姿勢で臨まれていました。例えば、草創期の、集合写真しか残っておらず、名前が判明しないＯＢ達に関しては、当時の卒業アルバムから一人一人顔を照合して名前を確定していくという地道な作業。また、資料探しに関する神わざ。「これこれのこの資料に、こういう記述や写真があるのではないか？」という菅野氏の指摘で探してみると、確かにある。その過程で驚くべき発見もありました。本校の前身である旧制川越中学には大正十一年には応援部が存在したこと。これは春日部高校にも応援指導部小史の書き換えを迫らねばならぬ事実でした。そして、その事実を裏付ける証拠としての大正十三年の集合写真も出てきました。おそらくこれは埼玉の応援団を撮影した最古の写真と思われます。また、「凱歌」の作詞者、近藤鉄城先生ご本人の原稿が出てきて、「凱歌」の歌詞が間違って継承されていることが判明し、オリジナルの歌詞に修正されるという出来事もありました。

私は実は史跡めぐりを趣味としておりまして、歴史の発掘という作業が大好きであります。この度、有り難い巡り合わせで、このような応援部の歴史の発掘に多少なりともおつきあいさせていただき、実に楽しいひとときを味わわせていただきました。我慢できずにFacebookに情報を漏洩してしまったこともたびたびでした。今回の菅野氏を中心として作成された『応援部史』は、実に正確を期した、「決定版」と呼んで良い、まさに応援部の『正史』というべきものに仕上がっていると太鼓判を押せるものです。

私も何だかんだで顧問をさせていただいて十年になりました。菅野氏にいただいた部史の草稿に基づいて数えてみましたら、私が赴任してから川越高校応援部員として卒業したか、現役として活躍している部員の数はもう少しで三桁に達しようとしていました。この光輝と伝統の川越高校応援部で、その歴史の一端に関わらせていただいて大変光栄に存じます。これからも永久に続いていく応援部の未来に栄光のあらんことを！

# 挨拶　新しい時代を先駆ける応援部へ

川越高校応援部ＯＢ会会長　松井　哲（高校第二十八回、第十六代）

応援部の歴史に関しては、諸先輩から語り継がれておりましたが、残念ながら伝聞の域を出ておらず、ＯＢ総会等の場で「散逸している資料を整理し、正しい歴史をまとめる必要があるのではないか」との意見が出たことをきっかけに、約二年前から部史発行に向けた取り組みを開始しました。

そして、高校創立百二十周年、夏の甲子園において野球応援リーダーを行って六十年を迎える記念すべき令和元年、ここに川越高校応援部史を発行することができました。

ＯＢ諸氏への聞き取り、高校や県の図書館等での資料集めを行う過程で数多くのことが明らかになりました。

中でも、驚くべきことは、大正十一年に有志による応援団が誕生していたということです。当時隆盛を誇った旧制川越中学野球部の県大会応援のために組織され、その後の卒業アルバムや校友会誌に「応援団」或いは「応援部」の写真や記事が掲載されております。当時から学校内において応援部の存在が大きなものであったことを伺い知ることができます。

昭和六年の卒業アルバムを最後に応援部の写真掲載はなくなり、活動自体も不明となりましたが、昭和二十六年に応援歌が作成されたことを受け再び応援活動が盛んになり、昭和三十年に応援部のルーツとなる生徒会所属の応援団が誕生しました。昭和三十四年、野球部の夏の甲子園出場を機に活動も活発化、それまで他部と掛け持ちであった部員も次第に応援部のみの所属となり、昭和三十八年、生徒会から独立し現在に繋がる応援部が誕生しました。

爾来、「規律、礼節、団結」の精神のもと伝統を受け継いで参りました。この間、部存続の危機を迎えたこともありましたが、時の部員の頑張り、顧問の先生のご支援、ＯＢ諸氏の尽力により、六十年という長きにわたり、大団旗を掲げ、校歌・応援歌を高らかに歌い続けることができました。

現在では、部員数・応援テクニックでは県下一を誇るといっても過言ではなく、野球のみならず水泳・ラグビー・サッカー・駅伝など各部の応援にも活動の域を広げ、くすのき祭演技発表会は毎年体育館が満杯になるほどの人気となっています。

今後も川越高校応援部独自のスタイルで、新しい時代を先駆ける応援部として更なる発展を遂げることを祈念するとともに、ＯＢ会として物心両面からの支援を続けて参りたいと思います。

最後に、部史作成において資料収集・執筆に精力的に力を注いでくれた菅野真二氏（高校第三十六回、第二十四代）の労をねぎらうとともに、種々ご協力頂いたＯＢ諸氏、川越高校、川越高校同窓会事務局、現応援部顧問坂東正己先生に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

# 応援部通史

甲子園出場を決めて歓喜の応援席（西関東大会　昭和34年7月30日）

# 前史・川中応援団のあけぼの（大正十一年～）

## 応援団の誕生

本校に初めて応援団が誕生したのは、旧制川越中学校時代の大正十一（一九二二）年である。

当時、我が国にまだプロ野球はなく、野球界の中心にいたのは慶應義塾大学と早稲田大学であった。その早慶と明治大学による三大学リーグ戦が大正三年に発足すると、三校の対立が人気を呼び、人々を野球へ野球へと導いていった。そして大正六年に法政が、同十年に立教が加盟して五大学リーグ戦に発展すると、その注目度は更に高まり、野球の大衆化が一層促進されていった。

こうして国内の野球人気が高まる中、川中野球部は大正十一年に夏の全国中等学校野球大会関東地区大会（以下、「関東大会」）と秋の浦和高等学校(注1)主催県下中等学校野球大会（以下、「県大会」）の二大会に初めて出場して、大いに気を吐いた。

関東大会の開催地は茨城県の竜ケ崎中学校であったが、試合当日に野山忠幹校長から「奮励一番しっかり頼む」との激励電報が届くほど校内の注目度は高かった。そして、続く県大会に出場する野球部を応援するために、有志による応援団が誕生したのだった。有志のほとんどが運動部に所属しており、団旗を振ったのは、四年生(注2)の柔道部員・清水良作だったという。

応援団誕生の年に団旗を振った
清水 良作

この応援団は翌年以降も存続し、大正十三年には生徒から歌詞を募集して野球応援歌が三つできた。いずれも七五調の血気盛んな文語詩で、曲はどこかの寮歌の節を拝借して歌った。

野球応援歌

（その一）

1. 初雁城址の春秋を
臥薪嘗胆技を練り
光栄かたく心に誓ひ
勇み立ちたるわが選手

2. 勝敗わかるる晴の場所
熱球猛打も何のそ
ナインの意気を示すは今ぞ
振へ野球の健男児

（その二）

1. 猛球士をかんでとび
熱球高く雲に入る
行方追へども力なく
敵陣乱るるそのひまに
一塁二塁奪ひつつ
進む味方の頼もしや

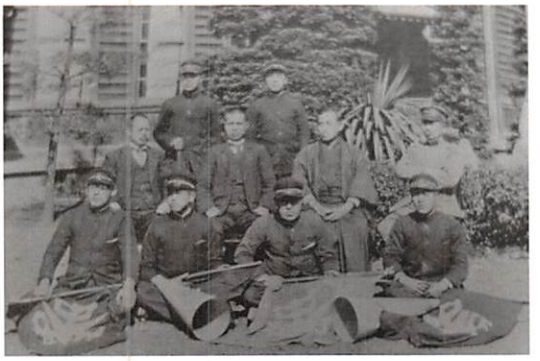
2. 空蒼茫と夕されば
戦いつかをさまりて
記録入日にあざやかに
栄ある勝を語るとき
紫匂ふ応援旗
かざす我等の心地よや

（その三）

1. 大空高く気は澄みて
争覇の戦開かれぬ
血汐は胸にあふれつつ
壮なるかなわが選手

2. 運命決する此の一挙
力の限りたたかひて
最後の勝利を手に収め
かちどきあげん諸共に

その二は五年生の渡辺和の作詞を飯田湖春先生が補筆したものである。



大正13年度「応援団幹部」(注3)

この年の剣道部主将・北村博学氏が新聞部発行の川越高校新聞（昭和三十四年九月二十五日付）に書いた応援団の回顧録の一部を引用する。

「我が二十三回(注4)が上級生となった頃には故峯岸久治氏の名団長振りが出て来た。彼の達筆な大檄文が模造紙一ぱいにかかれ校舎の壁板に貼られたような時は通用門には上級生が見張っていて放課後の野球練習の応援にまた応援の拍手の練習や応援歌の練習に参加しなければならない。応援団は剣道部や柔道部を始め各運動部の猛者共が団員になったり、又は協力して統制ある応援をするようになった。『元気で拍手』もこの頃から始り、校章入りの紫に染めた応援団旗も又この頃出来た。」

大正14年度応援団長

寺田 市郎

## 野球部、県大会で初優勝

大正十五（一九二六）年秋、野球部は第五回浦和高校主催の県大会に出場し、ついに初優勝を遂げた。

一回戦で埼玉師範、二回戦で埼玉商業を破り、迎えた十月三日、浦和中学との決勝戦。十対九で辛くも逃げ切り、優勝が決まった瞬間、応援団一行の歓声がどっとあがり、続いて「空蒼茫と・・」の勝利の歌が響き渡った。浦和高校の球場につめかけた多くの生徒が青空の下で肩を組み合い、手を取り合って応援し、川中生としての一体感を味わった。

その年の十二月二十五日に大正天皇が崩御され、昭和元年はわずか一週間で終わった。そして迎えた昭和二年。野球部は第六回浦和高校主催の県大会において、再び決勝に進出した。対戦相手は時の埼玉中学野球の雄と謳われた熊谷中学であったが、見事七対六で熊中を下し、前年に引き続いて優勝を遂げた。

応援団は野球以外の応援は行わず、野球応援もこの県大会の試合のみであったため、熊中を破っての連覇達成にその士気は大いに高まった。

翌昭和三年度の応援団は、熱血児と名高い金子良雄団長の下、次の十三名の幹部を以て組織された。柔道部の猛者たちが大勢いたという。

副団長　並木桀（※）、山口修一、高橋武治

※正しくは山（やまへん）に桀

幹　部　山田正一、齋藤明雄、中野秀雄、宇津木秀寿、峰岸義一、尾崎幸平、荒幡吉五郎、大附幸定、内海六三（四年生）、新井三郎（四年生）

応援部長　高野泰四郎先生（数学）

金子団長と副団長の三名は前年度の応援団でも五年生とともに活動した経験を持っていた。

県大会では、「八幡大菩薩」と大書した幟を押し立てて、全校生徒が試合会場の浦和高校まで徒歩で応援に駆けつけた。熊谷中学との試合では、試合開始前、両校の応援団長、副団長がホームベースをはさんで固い握手を交わし、「勝敗は時の運、正々堂々と戦おう」と誓い合った。紫と赤の応援旗がはためく中、両校応援歌の応酬後、試合開始となった。

大正14年度「応援部」

この年の応援団は校風の高揚を唯一の目的としていたため、県大会だけではなく、本校における試合はもちろん、飯能、入間川、東京長崎の立教グラウンドでの試合、前橋における関東大会の試合にも馳せ参じて応援を行った。そして試合が近づくと、放課後全校生徒を校庭に集合させ、出欠をとって応援の練習を行った。

学友会(注5)「会報第二十四号」（昭和四年二月版）に柔道部員の並木副

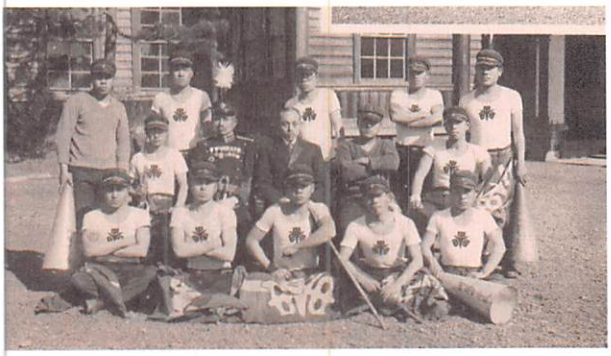
大正15年度「応援部員」

昭和2年度「応援団」

（後列左より）並木榮、松津喜作、岸八郎、高野泰四郎先生、松岡末吉教頭、小松中尉（注6）、高橋武治、戸田恒（前列左より）金子良雄、小口弁良、弓削田進、小松彰、山口修一

団長が書いた「応援団回顧の記」の一部を引用する。

「二学期に入るや九月一ヶ年間の花たる浦高主催県下の中等学校野球大会は数旬の後となったのである。この時幹部の計画は、先づ応援歌の新しいのを選び、二十日間の日子を徹底的練習に費やさんとするのであった。前にも述べた通り浦高の大会は単に野球のみならず総べての意味に於いて学校と学校との対抗なのである。勿論野球は勝たねばならぬ、けれどもそれ以上に応援団の活動は大切な事である。応援団員の内に一人でも学校の品位を落す様な行為行動があればそれは実に学校全体へ、延いては野球競技に於ける感情にまで及ぼすものである。何れの場合に於ても左様であるが殊に浦高におけるのは一層各自の自重をまたねばならない。袋の中の小麦粉に少しでも混合物があるとその価値全体が劣って見える如く、品位あるそして正々堂々たる応援団には、一人でも其の中に異分子の居らぬと云ふ事が大切である。かくある為には幹部の努力の大なるを要するのである、幹部の主なる責任は此處にある、是れはよく注意し貫はねばならぬ。」



昭和3年度「応援部」

## 野球人気と市民応援団の出現

昭和四（一九二九）年になると、川中野球部を応援しようという市民らが大勢現れ、自然と市民応援団なるものが出来上がった。

明治三十九（一九〇六）年に中止されていた早慶戦が大正十四年に十九年ぶりに復活すると、国民を「早」か「慶」かに二分して、正に「世は早慶戦天国」とでも言うべき社会現象まで引き起こした。また早慶戦の復活とともに、五大学リーグ戦に東京帝国大学（現・東京大学）が加盟すると、この六大学リーグ戦が大衆的人気の頂点に立ち、老若男女を問わず、あらゆる日本人がますます野球に魅了されていった。そして、昭和二年秋から開始された六大学リーグ戦のラジオ放送が、全国的な野球熱の高まりに一層拍車をかけた。日本野球史上、この昭和初頭は「野球黄金時代」「野球狂時代」と称され、外来スポーツのベースボールは、もう完全に我が国の国民スポーツとなっていた。

もちろん川越市内でも、ここ数年で野球ファンは驚異的に急増し、その結果、市民による川中応援団が出現したのだった。夏の関東大会が近づくと、蓮馨寺境内に毎晩二、三千人もの市民が集まって応援の練習が行われていた。前川中応援団長の金子良雄らの指導により、三三七拍子や一二三拍子、校歌や応援歌の練習が其処で一時間以上続けられていた。お年寄りも若い人も子供たちも皆心を一つにして川中野球部の勝利のために大声で、そして手を真っ赤にして練習した。時には練習が二時間に及ぶこともあったが、痛さをこらえながら頑張って練習する神経痛の老婆までいたという。

後に川中の市民応援団といえば、桐生や前橋など関東各地でもその存在が知られるようになり、筋金入りの応援団と言われるまでになった。

昭和3年度応援団長

金子 良雄

## 選抜大会出場の快挙

昭和五（一九三〇）年、本校は夏の関東大会では優勝候補と目されていたが、準決勝で高崎商業に敗れてしまい、甲子園出場はかなわなかっ

た。しかし、その他の試合で勝ちまくり、この年は四十二戦で三十六勝五敗一引分という野球部史上最高の好成績を収めた。前年が五十三戦で二十七勝二十四敗二引分であったことを考えると、大躍進と言える。しかも各地の大会に出場して、三本の優勝旗を獲得した。

川中野球部はこの成績が高く評価されて、第八回全国中等学校選抜野球大会に関東代表として推薦されることとなった。ついに夢の甲子園出場である。しかも、埼玉県からは初めての出場であり、この快挙に部員、学校はもちろん川越全市が歓喜に沸いた。

縣から初めて檜舞台へ
選ばれた川越中學
大敵を屠つて
かち得た此榮譽！
近く猛練習開始
選抜野球に
出場するまで

川中野球部の選抜大会出場を報じる新聞
（東京日日新聞・埼玉版　昭和6年2月17日付）

大会に向けて連日猛練習が行われ、出発まで雪が三度降ったが、その度に全校生徒が野球部のためにグラウンドの雪かきをした。

本校は参加十九校のうち、最も遠距離からの出場校ということで、野本定主将が開会式で選手宣誓を行った。初戦は四月三日、対戦相手は同じく初出場の中京商業（現・中京大学附属中京高等学校）であったが、本校はヒットわずか二本と振るわず、エラーを八つも重ねて〇対十一と完封負けを喫してしまった。中京商業は初出場ながら強豪の呼び声高く、優勝候補とされていたチームだった。

この試合で応援団や在校生、市民応援団、後援会等が応援を行ったという記録は学内に見当たらない。当時の新聞や野球雑誌でも本校の応援に関する事は何も書かれていない。学友会「会報第二十七号」（昭和六年度）に野球部が書いた「甲子園遠征記」という記事があるが、そこには先生方、後援会、卒業生、市民有志、県や市の関係者による見送りと出迎えを駅で受けたことが書かれているだけで、やはり応援については何も書かれていない。

昭和四年夏の甲子園大会に初出場した茨城県立水戸中学校（現・水戸第一高等学校）は、出場のための費用が不足していた模様で、同校の百年史によれば、「出場のための費用の支出は、野球部員の父兄を主とする後援会の募金によるところ大きかったと、伝えられる。応援団の派遣はもとより、生徒たちの行くことはまずなく、わずかにラジオ放送によって知るのみであった」という。

本校も雪かきのエピソードは遺されているというのに、応援の記録がないということは、甲子園まではやはり「遠距離」で、費用の問題等から野球部だけの「遠征」となったのだろうか。恐らく試合当日は応援団一行が甲子園に乗り込むこともなく、組織だった応援は行われていないものと思われる。

昭和6年度「応援団幹部」

大正十一年から続く川中応援団は、甲子園出場を機に大いなる飛躍を遂げることもなかった。逆にこの昭和六年度の卒業アルバムに写真が掲載されているのを最後に、現時点ではそれ以降の存在が確認できていない。自然消滅したのか。あるいは何らかの事情により解散を命じられて廃部になったのだろうか。

そして、本校に再び応援団が登場するのは昭和三十（一九五五）年。この応援団こそ、現在の川越高等学校応援部のルーツなのである。

（注1）大正十年に設立された官立旧制高等学校で、現在の県立浦和高等学校とは異なる。昭和二十四年、新制埼玉大学発足に伴い包括されて、翌二十五年に閉校。

（注2）当時の旧制中学は五年制

（注3）各写真のキャプションにおける「応援団幹部」「応援部」等の名称は会報や卒業アルバムに記載されているものをそのまま引用した。

（注4）大正十四年三月卒業生のこと。

（注5）本校在籍の生徒を以て会員とする点では現在の生徒会の前身と言えるかもしれないが、会長は校長、副会長以下の役員は会長の委嘱によって本校職員がこれにあたった。

（注6）当時教科の一つだった軍事教練を指導した陸軍中尉・小松國三郎先生

# 川越高等学校応援部の歴史（昭和三十年～）

## 応援団長の出現

昭和二十（一九四五）年八月十五日、戦争は終わった。そして敗戦から二ヶ月あまりしか経っていない十月二十八日に、戦後の野球第一戦として六大学ＯＢによる紅白試合が行われた。東京都心はまだ一面焼け野原であったにもかかわらず、神宮球場には野球に飢えていたファンが殺到した。戦時中、軍部や文部省（現・文部科学省）は野球を敵国スポーツとして強く弾圧を続けていたが、日本人の心から野球を奪い取ることはできなかった。

川中野球部も昭和二十年の秋には、軟式ボールで活動を再開し、翌二十一年の春に行われた戦後初の県大会に出場した。この時の試合では応援団による組織的な応援は行われず、観戦に訪れた生徒らが個々に声援を飛ばしていただけで、中には持参した小さな校旗を振って応援する者もいた。

そしてこの年の夏の大会では、大会中に卒業生から「昔古城の」という応援歌の歌詞カードが配られて全員で歌った。

昔、古城の楠の木に、
頬（ほ）くれないの若人が
勝利（のぞみ）の明日語らいつ、
仰ぐ希望に力あり
ああ初雁の健児等が、
欣求（ごんぐ）不断の精進に
覇業の栄（はえ）と忍従の、
臥竜（がりょう）に飾る五十年。

城址の月と雁（かりがね）の、
澄める自然に生い立ちし、
我が精鋭の行くところ、
勝利の旗こそ翻れ（※）
君等が血潮に勇みなば、
我等に血あり涙あり
友よ男子（おのこ）の意気あらば、
勝利ひらかで止むべきや。

（※）ここの歌詞は、「正気の歌こそ蘇れ」の説もあり

格調高いこの詞は、昭和二十年三月に本校を卒業した詩人・新井利一氏が昭和二十一年に作詞したものである。詞は川越における戦後の文学運動の中で作られ、どこかの旧制高校の寮歌のメロディを転用して歌った。

昭和二十三年の学制改革に伴い、新制川越高等学校がスタートした。依然として学内に応援団は存在しなかったが、球場の応援学生たちをまとめ上げるリーダーが出現するようになった。

昭和二十五年のリーダーは三年生の大川解であった。彼は陸上競技部の棒高跳び選手であったが、皆に推されて応援団長を引き受けることになった。夏の大会が近づくと、大川団長は大号令で全校生徒を集めて応援の練習を繰り返し、学内の応援ムードを高めることに努めた。また多くの生徒が試合場の県営大宮球場へ駆けつけることができるように、国鉄（現・ＪＲ東日本）と交渉して川越駅～大宮駅間の運賃を団体扱いで半額に割り引いてもらった。

試合中、大川団長は攻守にかかわらず休むことなく、校歌、応援歌、三三七拍子のリードを精力的に続けた。その一挙一動は激しく、声は球場狭しと響き渡っていた。ブラスバンドのない応援であったが、彼のリードで川高応援団の意気を示す、全校あげての堂々たる応援を展開していた。そしてこの年歌われた応援歌も「昔古城の」であった。

応援をリードする大川団長
（熊谷高戦　於 大宮球場　昭和25年7月）

## オリジナル応援歌の制定

川中時代から続く半世紀もの長い歴史の中で、替え歌の野球応援歌や水泳部の歌、庭球優勝応援歌など

はあったものの、公式に制定されたオリジナル応援歌はなく、専ら校歌があらゆる場面で歌われていた。そのため、昭和二十三（一九四八）年の新制高校発足以降、全員で歌える応援歌を求める声が高まっていた。そこで昭和二十六年になると、ついに生徒会の提案によって詞・曲ともにオリジナルの応援歌を作ることが決定し、歌詞は全校に公募されることとなった。

川越高校新聞（昭和二十六年六月三日付）に掲載されている募集要項は次の通り。

応援歌募集

要項　歌詩は自由であるが、なるべく歌いやすいもの三節位

応募資格　本校職員生徒

審査　特別に設けられた審査委員会で審査する

〆切　六月三十日

賞金　二千円（計）

発表　七月上旬とし、作曲は牧野先生に依頼する

牧野統（おさむ）先生は、この春新しく着任された音楽部顧問の先生で、音楽学校作曲科を卒業後、札幌の高校に奉職されていたが、東京芸術大学の下總皖一教授に師事して作曲勉強のために関東へ来られた。

五月十八日に募集が始まり、十四作品の応募があった。九名の審査委員（荒井実校長、本橋信治教頭、佐々木信治、那須大輔、平正夫、牧野統、近藤鉄城の各教諭と生徒会長の高山俊雄、副会長の青木雄二郎）によって五作品に絞られ、その中から次の三作品が選ばれて七月五日に発表された。

一等　該当作なし

二等　「奮え友よ」

山本　明（3D生徒）

三等　「生かせ伝統」

田中　正雄（教諭）

三等　「川越高校応援歌」

近藤　鉄城（教諭）

二等の賞金は七百円、三等の賞金はそれぞれ四百円ずつであった。「値段の風俗史」（朝日新聞社）によれば、当時のうな重の値段が三百円、宝くじが五十円であった。

この三作品は正式に採用されることとなり、予定通り牧野先生が曲をつけた。三等の「川越高校応援歌」は作曲後、「とどろく凱歌」の曲名になった。

川越高校新聞には「一九五一年七月　久しく望まれていた応援歌の作成は応募作品に牧野先生の作曲で完成、発表会が開かれた。おりから高校野球の大会を控えて全校異常な高まりを見せた事は特筆すべきであろう。」と書かれている。

牧野統先生

「奮え友よ」は第一応援歌として、「とどろく凱歌」は「凱歌」として、今日まで歌い継がれている。ここには「生かせ伝統」の歌詞を記す。

一　希望輝く　グランドに
今こそ競う　若人ら
みどりの空へ　眉あげて
誓う　ほまれの
誓うほまれの　優勝旗

二　白いラインが　目に映り
胸が高鳴る　腕も鳴る
歓呼の友へ　手を振って
尽くす　ベストの
尽くすベストの　新記録

三　伝統誇る　川高の
意気と熱とを　見せるとき
流れる汗に　頬染めて
歌う　勝利の
歌う勝利の　応援歌

## 応援団の発足

昭和二十九（一九五四）年夏、川高野球部は、十八年ぶりに県大会で優勝を遂げた。戦後初めての優勝となり、その輝かしい戦績は次の通りである。

川越　十対〇　川越農
川越　十五対一　春日部
川越　二対〇　不動岡
川越　二対〇　熊谷
（決勝戦）
川越　二対一　浦和商

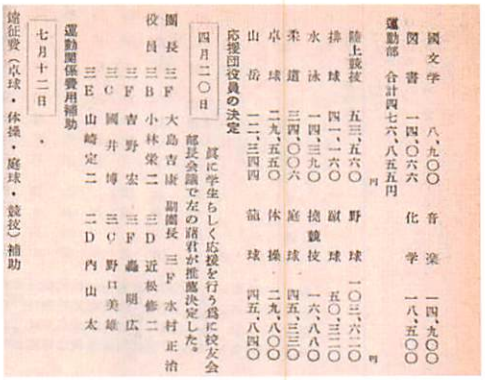
この後の南関東大会準決勝で千葉商に一対四で敗れてしまい、念願の甲子園出場は叶わなかったが、この県下優勝は学内を大いに盛り上げ、「来年こそは甲子園へ！」の機運が高まった。

そして翌三十年春、この学内の盛り上がりを背景として、真に学生らしい応援を行うために、ついに応援団が発足した。四月二十日、三年生

の大嶋吉康を団長とする計十名のメンバーが校友会部長会議（各クラブの部長による会議）で推薦決定された。

団長　大嶋　吉康
副団長　水村　正治（JRC副部長）
役員　小林　栄二（生物部副部長）
　　近松　修二
　　吉野　宏（音楽部部長）
　　轟　明広
　　國井　博
　　野口　美雄
　　山崎　定二
　　内山　太（二年生）

※所属クラブ判明者のみクラブ名を記載



國文学　八、九〇〇　音楽　一四、九〇〇
図書　一四、〇六六　化学　一八、五〇〇
運動部　合計四七、八五五円

陸上競技　五三、五六〇円　野球　一〇三、六二〇円
排球　四一、一六〇　蹴球　五〇、三二〇
水泳　一四、三九〇　撓競技　一六、八八〇
柔道　三四、〇〇六　庭球　四五、三三〇
卓球　二九、五五〇　体操　二九、八〇〇
山岳　二二、三四四　籠球　四五、八四〇

応援団役員の決定

四月二〇日　部長会議で左の諸君が推薦決定した。真に学生らしく応援を行う為に校友会

顧問　長　三F　大島吉康　副顧長　三F　水村正治
役員　三B　小林栄二　三D　近松修二
　　三F　吉野宏　三F　轟明広
　　三C　國井博　三C　野口美雄
　　三E　山崎定二　二D　内山太

運動関係費用補助

七月十二日

遠征費（卓球・体操・庭球・競技）補助

「応援団役員の決定」記事が掲載されている生徒会報第7号(昭和30年度)

この応援団は運動部や文化部のクラブとは異なり、新聞部などと同じく生徒会総務に属して、メンバーは応援団役員と呼ばれた。活動内容は対外試合の際に生徒に応援のやり方を指導することなどだった。

応援団は春の西部地区大会から活動を開始しており、川越高校新聞（昭和三十年八月六日付）にその様子が書かれている。川越工との西部地区決勝戦の記事には「両校応援合戦華やかのうちに試合は開始され」とあり、夏の県大会決勝戦の記事には「武蔵野の象徴色、紫の校旗ひるがえる三塁側スタンドは本校。対するはブルーの校旗。一塁側は鴻巣高スタンド。両校応援団の校歌で試合が開始された。」とある。

応援団を発足させて必勝を期した夏の県大会は、決勝戦まで勝ち進んだものの、その決勝戦で鴻巣高に一対四で敗れてしまい、優勝を逃した。

準優勝校として出場した南関東大会でも千葉一高相手に一対四で惜敗し、またしても甲子園出場の夢は叶わなかった。この試合には約三百人もの応援団が早朝から詰めかけて応援を行ったという。

応援団長の大嶋は自身の卒業式で、生徒会や運動部・文化部で活躍した生徒らとともに「応援団」として生徒会功労賞の表彰を受けている。

翌三十一年、昨年同様に学生らしい立派な応援をしようと、応援団役員の推薦が行われた。この年は協議委員会で推薦を行い、校友会部長会議で決定するという形が取られた。昨年の発足時に唯一の二年生メンバーだった内山太が団長となり、次の計六名に決定した。メンバーは団員と呼ばれるように変わった。

団長　内山　太
団員　根津　進（文芸部）
　　鈴木　忠男
　　石井　利雄
　　中島　次男
　　（二年生・音楽部副部長）
　　本木　淳一（二年生・音楽部）

※所属クラブ判明者のみクラブ名を記載

この応援団のシンボルとして応援団旗を製作したが、生徒全員から一人十円を徴収し、その費用にあてた。

応援団は発足二年目のこの昭和三十一年度から卒業アルバムに写真が掲載されるようになった。昭和六年度を最後に卒業アルバムから姿を消していたため、実に二十五年ぶりの復活ということになる。昭和三十一年度は文化部のページに、書道部、美術部、音楽部、弁論部、新聞部と一緒に「応援団」の名称で掲載されている。

昭和31年製作の初代応援団旗

だが、あくまで生徒会総務に属していて運動部や文化部のクラブとは異なる団体であった。川越高校新聞が毎年四月発行号で掲載している新入生のためのクラブ紹介記事の中で、応援団は紹介されていない。実際メンバーも何かしらのクラブに所属しており、いわゆる〝掛け持ち〟をしていた。

昭和三十三年度の卒業アルバムから、「凱歌」の作詞者で生徒会担当の近藤先生が、応援団の顧問として写っている。近藤先生は昭和三十三

年から三十九年まで七年間、初代顧問を務めた。

## 甲子園出場と部の躍進

本校の創立六十周年にあたる昭和三十四（一九五九）年、川高野球部はついに夏の甲子園に初出場することとなった。昭和六年春の選抜大会以来二十八年ぶり二回目の甲子園である。

応援部（※）は発足五年目で憧れの甲子園での応援という栄誉を担うこととなった。この年は柔道部の鈴木実が団長となっていた。

（※）昭和三十三年度以降の卒業アルバムでは「応援団」ではなく「応援部」と記載されているので、本部史でも昭和三十三年度以降は「応援部」とする。

昭和34年度団長
鈴木 実

吉田富保投手を擁する川高野球部は、県予選では第一シード校となり、優勝候補筆頭の下馬評通り、怒涛の快進撃を続けた。

一回戦　シード
二回戦　川越　十対〇　春日部
三回戦　川越　二対〇　大宮工
準々決勝
　　川越　二対〇　川越商
準決勝　川越　二対〇　川越工

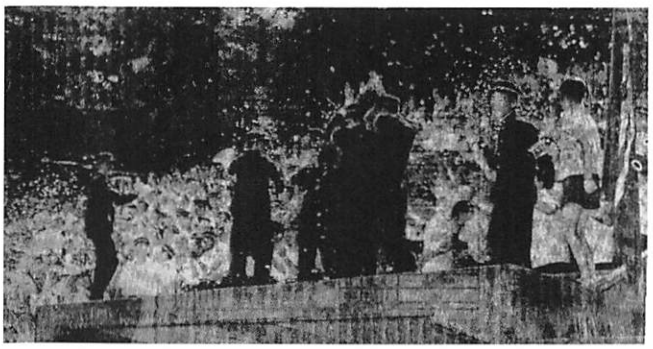
そして、決勝戦でも鴻巣高を一対〇で下して見事優勝を決めた。産経新聞・埼玉版によると、この決勝戦では「両校とも全生徒をくり出し熱心に母校チームの選手の一挙手一投足に拍手声援を送っていたが、一般のファンも笛を吹き鳴らしてはなやかな応援合戦を展開、好試合に花を添えた。」という。

エース吉田投手は五試合を一人で投げ抜き、いずれも完封で奪三振計四十六個。何と連続四十三イニング無失点という大会新記録を作った。

特に三回戦の大宮工戦では、五回に四球を一つ出したのみのノーヒットノーラン。しかもこの四球のランナーが二盗を失敗したため、打者二十七人、九十五球、残塁なしの準完全試合を達成した。

この年から埼玉の優勝校は西関東大会の名の下に、山梨県の優勝校と甲子園出場をかけて対戦することとなっていたため、次の対戦相手は甲府工であった。

甲府市の県営球場に渡辺正紀校長はじめ、応援部と生徒、市民ファンらで乗り込んだ本校の応援団一行は、「必勝　川越」の幟を立てて気勢を上げた。埼玉県下でもこの年からブラスバンドによる応援が認められるようになっていたが、残念ながら本校にはまだブラスバンドがなかった。そのため、甲府工が「軍艦マーチ」の演奏で盛り上がっていたのに対し、本校は大太鼓や鐘、ラッパを鳴らしての応援であった。



県大会優勝の瞬間、紙吹雪の中で喜び合う応援席
（「埼玉新聞」昭和34年8月1日付）

試合は本校が二対一と快勝し、第四十一回全国高等学校野球選手権大会への出場を決めた。

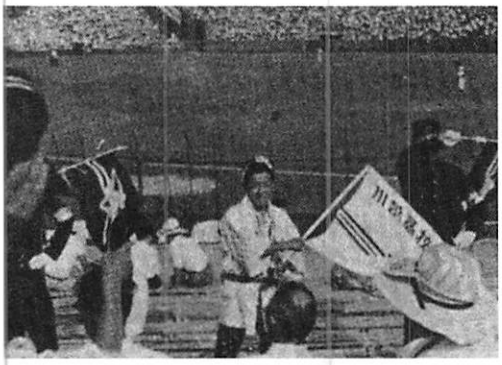
甲子園での初戦は中九州代表、熊本の鎮西高であった。職員、応援部、生徒、一般市民ら約五百人の応援団一行は夜行列車で甲子園に乗り込んだ。そして在阪の埼玉県人会など県関係者約五十人もこれに加わった。

試合は本校が一回表に二点を先取すると、全員躍り上がって拍手の嵐状態となり、リーダーが「まだ八回ありますから、しまいには手が痛くなるから加減して下さい！」と叫ぶほどの盛り上がりを見せていた。また、この二点の先制で大いに気を良くした本校の応援団は、肥後熊本藩初代藩主、加藤清正の虎退治の逸話を揶揄して、「さあ！トラはシッポをまいて逃げた。フレー、フレー！」と大はしゃぎしていたと朝日新聞・埼玉版が報じていた。

代表二十九チーム中、本校と宇都宮工高の二校のみブラスバンドがなく、県予選や西関東大会同様に太鼓、笛、ラッパ等の鳴り物応援を行った。現在も第三応援歌などの演技の後に「川高恒例、三三七拍子！」と言って三三七拍子を行っているが、この甲子園でも三三七拍子の拍手応援を行った。

また応援リーダーは鈴木団長ら応援部メンバーだけでなく、卒業生も行っていた。前年度の団長だった宇津木忠征は真っ赤な着物を着て、タスキがけで応援をリードし、また二年前の団長でこの時明治大学二年生、大学でも応援団に入っていた森田稔郎も、見事な指揮ぶりで気勢を上げていた。

この応援部による応援とは別に、後援会の応援団長こと、地元理髪店主の石井菊太郎氏（四十八歳）も水玉模様の半纏を羽織り、景気よく笛を吹きならして盛り上げていた。だが、応援部による応援の妨げになるような勝手な応援をしていると、応援部員から注意をされることもあったという。



甲子園での石井菊太郎氏の応援ぶり
（高知商戦　昭和34年8月15日）

産経新聞　埼玉版

川越高、鎮西に快勝

投打に実力発揮

初戦のヒーロー吉田、内沼

全国高校野球

本校の甲子園初勝利を報じる新聞
（「産経新聞・埼玉版」昭和34年8月12日付）

またこの試合には、渡辺校長、県体協会長、県教育長、市長、市会議長、商議所会頭らお歴々も応援に駆けつけて声援を送っていた。

試合は本校が三対一で快勝し、勝利の瞬間、三塁側アルプススタンドにはワァッという歓声とともに五色のテープが舞った。「紫匂う武蔵野の・・・」我が母校の誉れある校歌がついに甲子園中に響き渡った。テレビとラジオでも全国に初めて校歌が流された。選手も応援団一行もセンターポールに高々と揚がった校旗をふり仰ぎ、勝利の感激に浸った。

そして二回戦の相手は高知商であった。吉田投手は八回まで無失点に押さえていたが、九回ついに力尽き、九回表に一点を失って〇対一で惜敗した。しかし、優勝候補の高知商相手に大善戦であり、その健闘ぶりは各方面から称えられた。

野球部の甲子園出場は、本校の創立六十周年に花を添える快挙であったばかりでなく、応援部にとっても、学内にその存在感を示して躍進する一大契機となった。

## 対熊高交歓会始まる

昭和三十五（一九六〇）年、熊谷高校からの申し込みにより交歓会が行われることとなった。これは年一回、両校の学校あげての公式行事として、運動部による交流試合を行ったり、文化部はお互いの活動の発表や話し合い等を行うというものであった。第一回は九月十二日、本校を会場に開かれたが、当日は雨のため、野球、テニス、陸上が中止となり、サッカー、バスケットボール、バレーボール、卓球、水泳、剣道、柔道、弓道の試合が行われ、試合成績は四対四の引き分けだった。

この対熊高交歓会（交歓定期戦）は、昭和四十四年の第十回まで開催された。応援部は開会式での校歌斉唱とエール交換における指揮や野球その他の試合における応援を行った。両校の応援部は、この交歓会を盛り上げる上で不可欠な存在であった。

第1回対熊高交歓会　両校応援部によるエール交換
（昭和35年9月12日）

## 応援部、クラブとなる

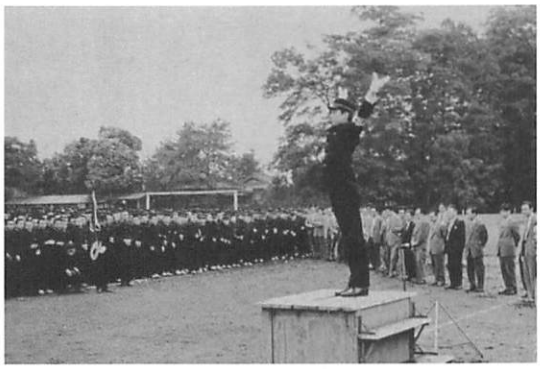
応援部のメンバーは、発足した年とその翌年は校友会部長会議で決定されていたことが生徒会報に記載されているが、昭和三十二（一九五七）年以降は会報にその記載がない。メンバーの決定にいつから校友会部長会議が関与しなくなったのかは定かではないが、昭和三十四年に入学した岡本元は志木中時代に野球部の先輩であった鈴木団長に声をかけられて、柔道部と応援部に入ったという。

応援部はあくまで生徒会の所属団体であり、クラブではなかったため、この頃は新入生に対して大々的に募集や勧誘を行うことはなく、このように部員が個人的に知っている新入生に声をかけて応援部へ導いていたようだ。

年間を通じて応援部としての日々の活動はなく、野球の応援を唯一の活動としていた。そのため大会が近づくと、放課後に全校生徒を集めて一週間から十日程度応援の練習を行っていた。明治大学の応援団員になっていた昭和三十二年度の森田稔郎や日本大学の応援団員になっていた昭和三十五年度の大山暉夫ら卒業生が応援練習の指導に来ることもあったため、大学の応援手法やリーダーテクニックが導入されて、本校の応援の形が構築されていった。

また昭和三十六年には、大山の影響もあって、先輩に対して「押忍（オス）」の挨拶が使われ出し、翌三十七年以降、演技の前と後に行う挨拶としても定着していった。

そして昭和三十八年春、応援部は生徒会総務から独立し、文化部のクラブの一つとなった。生徒会報と川越高校新聞では毎年、運動部と文化部の新部長と新副部長の名前を報じる記事を掲載していたが、これまでそこに応援部の名前はなかった。だが、クラブ化した昭和三十八年より掲載されるようになり、この年は部長（※1）・高橋好次郎、副部長として氏原智と二年生の渡辺賢の名前が出ていた。


第3回対熊高交歓会（昭和37年5月25日）

また応援部はこれまで運動部や文化部の各部とは異なり、部としての予算はなかった。生徒会の本部費の中の総務費の一つとして「応援団費」が予算計上されており、野球応援などに伴って発生する遠征費は、その都度生徒会へ請求していた。因みに昭和三十六年度の応援団費は八千円であり、これは弁論部と同額で、ＪＲＣの二千円、映画部の七千四百円に次ぐ低予算であった。（野球部は十五万円）昭和三十八年度からは部としての予算がついたため、生徒会へ請求する必要はなくなった。

生徒会会則第九章第三十一、第三十二条によると、部会は会員の個性の伸長を計り、友愛と協同の精神を養い、責任と忍耐とを身につけるためにこれをおき、この目的を達成するために、文化部二十三、運動部十三のクラブを設け、会員は希望する一ないし二のクラブに必ず属さなければならないとされている。応援部のメンバーはこれまで他のクラブと掛け持ちをしていたが、これは応援部が生徒会総務に属していたから特別に許可されていたのではなく、生徒会会則上、「一ないし二のクラブ」として問題ないことであった。

応援部では、クラブ化したことを契機に掛け持ちをする部員が減って行き（※2）、昭和四十年には完全にいなくなっていた。

（※1）昭和三十八年度のクラブ化を契機に、それまでの「団長」「副団長」の呼称をやめて、他のクラブ同様に部内でも「部長」「副部長」の呼称を使用するようになった。昭和五十一年度に「団長」「副団長」の呼称を使用すると、以降もそれが使われ続けて今日に至っている。そのため、本部史でも昭和三十八年度から五十年度までは「部長」「副部長」とする。

（※2）昭和三十九年度（第五代）の豊田辰夫部長は国文学部、相曽利章副部長は写真部にも所属していた。

## 部のモットー（三原則）の制定

昭和四十（一九六五）年になると、文化部が二つに分かれ、本校のクラブは、運動部、文化部、総務部の三部体制となった。応援部は新聞部、図書部、放送部、吹奏楽部、ＪＲＣとともに、総務部に属することとなった。

また、これまで応援部としての活動や、その基本となる考え方の作成が部の課題とされていたが、昭和四十年に団則、部のモットーとして「礼儀・節度・団結」の三原則を制定した。これは二年後の昭和四十二年に「規律・礼節・団結」へ変更され、今日まで受け継がれている。

この年の川越高校新聞（昭和四十年三月二十二日付）に掲載された新入生向けのクラブ紹介記事で、応援部は自分たちを次のように書いている。

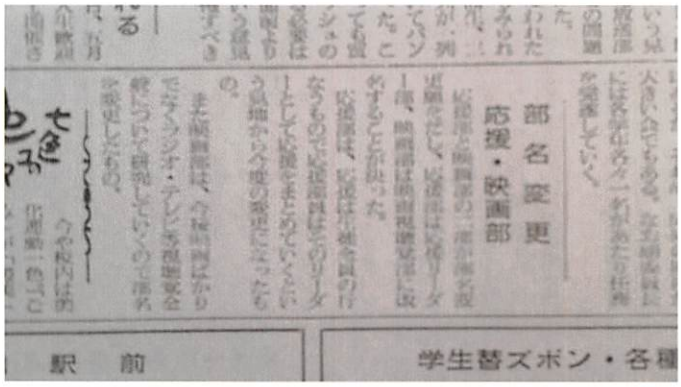
「我々川高応援部は、古い歴史と伝統に輝き、今日見るような応援部に成長してきた。昨年は、西部地区各

校で催された応援部リーダー公開において、随一のテクニックで会場をわかせた。また我校運動部の応援活動のリーダーとして、毎日練習に励んでいる。新入生諸君、君達は色々な希望に燃えて入学して来ることだろう。我々応援部は、礼儀、節度、団結を三大原則として、諸君の心身と共に諸君の希望をより一層大きく育てることに役に立つだろうと信じている。」

そして、この次の号の同新聞（昭和四十年七月一日付）では応援部の部名変更に関する記事が掲載された。

「応援部が部名変更願を出し、応援リーダー部に改名することが決まった。応援は生徒全員の行うもので、応援部員はそのリーダーとして応援をまとめていくという見地から今度の変更になったもの。」

しかし、その後も川越高校新聞や卒業アルバムでは「応援部」のままであり、「応援リーダー部」に改名した事実は確認できていない。翌四十一年の川越高校新聞（三月十八日付）における新入生向けのクラブ紹介記事でも総務部の「応援部」として紹介されている。


部名変更
応援・映画部
駅前
学生替ズボン・各種

応援部の部名変更について書かれた川越高校新聞の記事

## 応援技術の向上に向けて

昭和四十（一九六五）年八月、心身を鍛え、応援技術を磨くために、飯能市の竹寺において初合宿が行われた。

当時の二年生とその春の卒業生に住職のご子息がいた関係のご厚意により合宿地を引き受けて頂いた。

この合宿では、顧問の松本成二先生が依頼し、本校の卒業生であった、早稲田大学応援部二年生の粟生田弘明氏から個人的に、発声やエール、拍手等の指導を受けた。

粟生田氏には前年にも指導を受けたが、あくまで基本的な事項に関する指導であり、早稲田大学のリーダーテクニックの型を指導してもらっていたわけではない。

部員は応援技術の更なる向上をめざし、昭和四十一年には、専修大学や中央大学の応援団員になっていた本校の卒業生からも指導を受ける機会を得た。

指先を弾く練習は昭和三十七年頃から始められていたが、昭和四十二年頃からそれを「くにく」と呼ぶようになった。「くにく」の意味も、どのような字を書くかも、当時から部員の間では知られていなかった。誰も知らないまま呼んでいたということは、恐らく大学応援団員の指導を通じて使われるようになった呼称だと思われる。また「くにく」は「苦肉」や「苦憎」等の漢字を思い浮かべがちであるが、筋力トレーニング、発声練習、カットバセ等の練習メニューに対して、応援技術（リーダーテクニック）の基礎練習を指し、「テクニック」の略称なのではないだろうか。

部員は自ら色々な大学の応援を見て回ったが、自分たちは男子校であるということから、すでにバトントワラーが登場していた東京六大学よりも東都系が適しているだろうと考えた。そこで東都の各大学の応援団を見て研究を重ね、川高としてのリーダーテクニックや応援手法が完成されていった。

一九九〇年代に入り、野球応援が音楽を主体とする応援曲応援手法へと移行していくと、そのスピード化に合わせるように、部員はリーダーテクニックを東京六大学を模倣したものに改良していった。だが、一九八〇年代まで行われていた野球応援は明らかに東都系であった。二名のリーダーが交互に指揮をする手法や、「ハイ、ソーレ、カットバセーかー

2名のリーダーが交互に指揮をする野球応援手法
（昭和53年7月）

わーこー」のかけ声から始められるカットバセのリーダーテクニックの型（太鼓の音と共に上体を徐々に下方へ傾けて行き、両手をグルグルと回転させた後、落としを行う）は中央大学の型に非常に酷似していた。

## 練習場所と合宿所

草創期の練習場所は、講堂（※1）裏（現在の体育館の食堂あたり）の空き地で、すぐそばにある浅間神社や御嶽神社に向かって声を出していた。

昭和三十七（一九六二）年十一月に本校初の鉄筋コンクリート校舎、三階建ての理科棟が完成すると、その屋上で練習するようになった。この理科棟は昭和四十年に増築されて四階建になったが、その工事期間（二月着工、九月竣工）は屋上が使用できなかったため、体育館（現在と場所が異なる）脇を練習場所とし、お堀に向かって発声練習等を行っていた。

以降、老朽化で取り壊される平成十四（二〇〇二）年まで四十年近く、この理科棟の屋上で厳しい練習が行われた。発声、くにく、拍手、腕振り、突き、すり足、落とし等の基礎練習が長時間続き、応援歌や拍手のリーダーの型、口上の口調についても、上級生やOBから徹底した細かな指導があり、伝統が受け継がれていった。

平成十四年からは管理棟の屋上に練習場所を移し、今も変わらぬ練習が行われている。多くの学校があらゆる事態を想定し、屋上への立ち入りを禁止にしていることを考えると、屋上での練習が許可されているのは驚くべきことかもしれない。本校の屋上には研鑽を積む部員たちの姿があり、その熱血の声は正に闘魂高く初雁の森に響き渡っている。

そして、この通常の練習とは別に五十年以上続けられているのが、合宿である。昭和四十年に初めて行われた夏の合宿は、翌四十一年も七月下旬、竹寺にて三泊四日で行われ、以後恒例となった。昭和四十二年から四十五年までの四年間は校内で実施され、寝泊まりは教室、風呂は市役所近くの銭湯、銭湯の先の食堂で食事をした。

昭和四十六年と四十七年はともに七月下旬、再び竹寺にて二泊三日で行われた。昭和四十六年当時一年生だった金澤和春の日記によれば、七月二十六日、午前九時に飯能駅に集合し、バスで四十分かけて竹寺へ向かったという。また翌日の一日のスケジュールは、次の通りであった。

午前五時半　起床
午前六時　正座
午前六時半～七時半　練習
午前九時半～十一時半　練習
午後一時半～四時半　練習
午後十時　消灯

第1回夏合宿（於 竹寺 昭和40年8月）

昭和四十八年と四十九年は部員不足のため合宿は行われなかったが、昭和五十年に復活し、三月に完成したばかりの生徒ホールに宿泊した。翌五十一年も生徒ホール、昭和五十二年は第一次合宿を竹寺で、第二次合宿を生徒ホールに宿泊して行った。

生徒ホールを利用しての合宿は、平成七年まで二十年続き、その後の三年間（第三十六代から三十八代まで）は、風呂のみ生徒ホールを使用して教室に寝泊まりする形や、宿泊せずに「通い練習」を行う形をとったりした。そして平成十一年、第三十九代の時に、完成した新体育館二階の合宿所（宿泊室）に宿泊する合宿を初めて行い、以降、この合宿所を拠点に設備面で大変充実した、快適な合宿を行っていた。（※2）

しかし、設備面での生活環境は良くなったものの、屋上の練習環境は年々劣悪になっていた。近年、夏合宿の時期の屋上は殺人的な暑さとなり、光化学スモッグの発生率も高く、故障者の続出を引き起こしていた。また、この過酷な夏合宿が来年も行われることを悲観して退部する者も多かった。この惨状を憂えた顧問の坂東正己先生らは、熱中症対策も考慮し、練習に適した環境を求めて校外合宿へ変更することを決めた。

そして平成二十六年夏、陸上部の監督が推薦してくれた新潟県越後湯沢の「SAKAEYA」で合宿を行った。昭和五十二年の竹寺合宿以来、三十七年ぶりの校外合宿であった。この施設は様々なスポーツ団体や学校のサークル・部が夏のスポーツ合宿地として利用しており、トラック付きの運動場や体育館も保有している。以後、現在まで毎年、この「S

AKAEYA」に宿泊して合宿が行われている。

（※1）講堂は昭和五年に現在の体育館の場所に建てられた。旧体育館の建設にあたり昭和四十四年に解体されるまでの約四十年間、そのゴシック風の瀟洒でモダンなたたずまいは川中・川高生の誇りであった。

（※2）平成二十四年は合宿を予定していた期間に校内の水道が全面的に使用できなくなる事態となり、急遽「通い練習」に変更された。

## 拍手の制作

昭和四十（一九六五）年秋、早稲田大学に「コンバットマーチ」が登場し、翌年この曲に対抗して、慶應義塾大学が「ダッシュKEIO」を誕生させた。これらが高校野球の甲子園大会で使用されるようになると、応援曲というものが全国に広がり始め、昭和五十年代には音楽を主体とする応援曲応援手法が顔を覗かせるようになった。

それまでの野球応援といえば、どこの学校でも応援歌や拍手、カットバセ等のかけ声を駆使したものであった。もちろん本校においても、昭和三十年の応援団発足以降、その手法で応援を行っており、拍手は三三七拍子をメインに、四つの拍子（一拍子、二拍子、三拍子、四拍子）も行っていた。応援部は、毎年四月に新入生に対して校歌と応援歌の指導を行っていたが、昭和三十年代後半には、これらと一緒に拍手の型等の指導も行っていた。

また、実際の応援とは別に、自校における発表会や他校へ出向いてのリーダー公開を行っていたが、演目としては、校歌、応援歌「奮え友よ」、三三七拍子の拍手と四つの拍子の拍手しかなかった。（※）

そのため、昭和四十年、井口敏部長はもっと演技の充実を図ろうと、自ら「乾杯の拍手」を制作し、また当時の二年生に対して、新しい拍手を制作するようにと提案した。その結果、長勇が「撃滅の拍手」を、水内政幸が「紫紺の拍手」を、石井輝夫が「打倒の拍手」と「川高勝つ」を空手の型などをベースにして考案し、井口部長と二年生で試行錯誤しながら検討を重ね、これら三つの拍手と「川高勝つ」を完成させた。これを機に、四つの拍子で構成した従来の拍手を「川高拍手」と呼ぶようになった。

翌四十一年には「水月一拍子」を制作（制作経緯、考案者不詳）し、「川高勝つ」も含め、この七つの演技を「川高七大拍手」と呼んだ。更に六年後の昭和四十七年には、本橋孝之が「炎の拍手」を制作し、これで本校は他校に類を見ない七拍手を所有するに至った。

しかし、これらの拍手を実際の応援で使用することはなく、あくまで自主研鑽や発表会用のものであった。

（※）昭和二十六年に「奮え友よ」とともに制作されていた「とどろく凱歌」は、昭和四十年から歌うようになった。曲名は「凱歌」とされた。

考案者の長勇による
「撃滅の拍手」

## 演技発表会の開催

昭和四十（一九六五）年九月十九日、文化祭（※）の日に演技発表会を川越市民会館にて開催した。昭和三十八年と三十九年の文化祭で行った他校招待の応援公開をやめ、内容を充実させて川高応援部単独の演技発表会として開催したところ、市民会館満員の大盛況となった。これを第一回とし、以降、演技発表会は現在まで毎年開催されている。

会場は昭和四十八年の第九回までは市民会館、以降はほぼ毎年本校体育館にて開催。（体育館改修工事の関係で、平成八年の第三十二回は川越市民会館、平成九年の第三十三回は川越第一小学校の体育館、平成十年の第三十四回は再び市民会館で行った。）

（※）「くすの木祭」の名称は昭和四十四年開催の第二十二回から使用。川越高校新聞では昭和五十六年までは「くすの木祭」、翌年から「くすのき祭」の表記に変わったが、昭和五十六年のパンフレットの表紙は「くすのき祭」となっている。また、昭和五十七年、五十八年の入場門には「くすの木祭」の看板が掲げられていた。本部史では「くすのき祭」で統一する。

第1回演技発表会
（於 川越市民会館 昭和40年9月19日）

## 応援団協議会の発足

昭和三十九（一九六四）年から四十一年にかけては、川越工業、川越商業、川越農業、豊岡等、西部地区の他校応援団とも交流があり、各校の文化祭に招かれて、「応援リーダー公開」として本校の演技を披露していた。また、昭和四十年十一月には、松山高校応援団との交歓会としてサッカーの試合も行った。

そして昭和四十一年六月、以前から話が持ち上がっていた応援部の連絡機関「川越松山地区応援団協議会」が発足した。これは、本校、川越工業、川越商業、松山高の四校間の親睦と情報交換を目的としたものであった。（後に川越農業も参加）具体的には各校招待演技発表、レクリエーション、協議会（会合）の実施であり、十一月にはレク活動としてサッカー大会を開催した。

昭和五十年二月二十日発行の「応援団協議会会報」創刊号によると、昭和四十九年度の本部校（当番校）であった本校において、昭和五十年二月一日に協議会が開催され、川越商業への本部校の引継ぎ、新入生歓迎会（種目・ソフトボール）、「会報」の創刊について話し合われたという。（松山高欠席。川越農業は昭和四十九年四月に脱退）しかし、この年にソフトボール大会は行われず、翌年度以降に協議会などが開催された記録も記憶もないことから、昭和五十年度に自然消滅してしまったと思われる。

応援団協議会会報

協議会開かる

「応援団協議会会報」創刊号（昭和50年2月20日付）

## 部員ゼロの代を乗り越えて

昭和四十七（一九七二）年十二月二十三日付の川越高校新聞に時期外れの記事が掲載された。応援部の部員募集を呼びかける記事である。「部員募集　応援部」と題するその記事は次の長文であった。

「諸君、クラブ活動が人間形成に大きなパーセンテージを占めることを、どのように考えるか。この良し悪しに、人格を左右する大きな要素が含まれていることを。だから、諸君は、これについて考えるべきであり、私は一言いいたい。応援部は『規律』『礼節』『団結』の三原則を基に、和のあるクラブ形成に努めてきた。その結果、先輩諸氏により不動のものとなった輝かしい伝統を誇持している正しい意義を持つクラブとなっている。そのクラブ、つまり応援部を一般概念に基づく屈曲した見方をしているのではないだろうか。諸君、応援部は『古人の跡を求めず、古人の求めたるを求む』ということである。現在を強く正しく生きることである。自由の裏には責任、義務をもち、友愛、譲歩の精神をもつクラブである。『規律』『礼節』『団結』こそ人格向上に絶対必要なものであり、健全な人間をつくるクラブである。より健全な、より行動的な、より知的な、より慈悲深い人間を形成していくクラブである。現存クラブについて疑問をもっているもの、学業とクラブ活動の両立はいかにと思っているものは、今すぐ応援部に来たまえ。君たちを待つ我々は喜んで迎え入れる。そして前記のことを証明していこうではないか。」

この年の一年生が全員辞めてしまい、三年生引退後は二年生七名だけになっていた。部の運営、応援活動、リーダーテクニックや伝統の継承などを憂いての部員募集の呼びかけであったが、結局入部希望者は現れず、この学年（昭和五十年三月卒業）の部員はゼロのままとなってしまった。

そのため、翌昭和四十八年の新入生に大きな期待をかけ、勧誘活動を頑張って行ったところ、三名の新入部員獲得に成功した。部員ゼロの学年を一代で止めることができたのは、正に三年生の努力の賜物であった。だが、そのうち一名がくすのき祭後に退部してしまったため、三年生引退後は一年生の二人だけとなり、新井克哉が部長、松井哲が副部長として部を運営していくこととなった。

そして昭和四十九年四月は、部長と副部長の二名で新入部員募集を行い、二年生の関谷和彦が入部、一年生も三名入部し、一、二年生合計六名となった。この昭和四十八年と四十九年はあまりに部員が少ないため夏合宿は行わなかったが、翌五十年に一年生が六名入部したことで総勢十二名となり、夏合宿を復活させた。

## 「部長」から「団長」へ

昭和五十（一九七五）年十月、「週刊漫画アクション」で衝撃的な漫画の連載が始まった。どおくまんの描くギャグ漫画『嗚呼!!花の応援団』である。この漫画は大阪の大学応援団を舞台に展開する、暴力、下ネタなど過激な内容の多いものであったが、一躍人気となり、翌五十一年八月には映画化されて一大ヒット作となった。世の中の応援団は何かしらこの漫画の影響を受けることとなり、川高応援部も例外ではなかった。

その一例として、昭和五十一年度は「部長・副部長」を「団長・副団長」と呼ぶようになった。この年の演技発表会パンフレットは「第十二回応援部発表会」と、名称こそ「応援部」として、「われわれ応援部は・・」と書いていたが、「団長　大川博史」「副団長　梶野洋司」と書いていた。以降、「団長・副団長・団員」が定着し(※)、自分たちのことを「応援部」と称したり、「応援団」と称したりするようになっていった。

これ以前にも、昭和三十九年に作成した部員バッヂが「応援部」ではなく「応援団」とされていたり、昭和四十年製作の大団旗にも「川越高校応援団」と染め抜かれていて「応援団」と称することがあったが、校内における部の正式名称はあくまで「応援部」である。

（※）翌年の第十三回発表会パンフレットでは再び「部長・副部長」の呼称に戻ったが、十四回以降は「団長・副団長」が今日まで続いている。

一世を風靡した「嗚呼!!花の応援団」

## 代呼称の使用始まる

昭和五十二（一九七七）年、応援部ではこの年から各学年を「第○代」という呼称で呼ぶようになった。

新井康之団長ら三年生は、応援部の成り立ちなど歴史の詳細はわからなかったものの、「野球部が甲子園に出場した際に応援部が存在していたと聞いていたこと」「甲子園に出場してから十八年が経過していたこと」をふまえ、自分たちの代を『第十八代』と呼ぶようにした。川越高校新聞のクラブ紹介記事においても、「我が応援部は今年で第十八代を迎え」と書いている。これが始まりとなり、後輩たちも自らを『第十九代』、『第二十代』と継承していき、今日に至っている。

昭和四十一年の川越高校新聞の応援部紹介記事に「紫の大団旗を掲げて四十有余年の歴史と伝統に輝く応援部」、翌四十二年には「紫紺の団旗を掲げて四十余年の歴史と伝統に発展の一途をたどっている」と書いているので、この当時の部員は応援団が誕生したのは大正末期であったという認識を有していたと思われる。それから十数年を経てその歴史認識が伝承されずに薄れてしまい、「甲子園で応援するために有志が集い、応援団が誕生した」という定説が生まれてしまったのだろうか。

また、平成三年一月にOB会が発足した際、代呼称の問題が持ち上がったが、昭和三十六年度（三十七年三月卒業）の内河好博会長以下で検討した結果、「有志による応援活動が生徒会のクラブ活動として認められた高校第十三回（昭和三十六年三月卒業）生を第一代とする」(※)ことが決定された。代呼称の使用が始まってすでに十四年が経過し、第三十二代まで来てしまっていたが、幸い昭和五十二年における決定内容と同じであったため、混乱はなかった。

三年生の部員がいなかった年はこれまで七回あるが、昭和四十九年度は「第十五代」の代呼称を付与して「十五代は部員ゼロ」としている。それ以降の三年生不在年に代呼称は付与していない。

| | |
|---|---|
| ① 昭和49年度 | (1974) |
| ② 平成　3年度 | (1991) |
| ③ 平成13年度 | (2001) |
| ④ 平成15年度 | (2003) |
| ⑤ 平成20年度 | (2008) |
| ⑥ 平成21年度 | (2009) |
| ⑦ 平成23年度 | (2011) |

3年生不在の年

（※）この時点における歴史認識は、この度の調査活動で判明した創設期の史実とは異なるものであった。

## 第一回「日輪の下に」開催

昭和五十二（一九七七）年、東京六大学応援団連盟主催で毎年行われているステージ「六旗の下に」の埼玉県高校生版をやろうという誘いが春日部高校応援指導部よりあった。同部は旧制中学校のいわゆるナンバースクールである、浦和高、熊谷高、

本校に誘いの声をかけた。初会合は春日部高で行われ、本校からは新井団長と村上（旧姓西島）敏之副団長が出席した。春日部高と浦和高はすでに代が変わり、幹部は二年生であったが、熊谷高と本校はまだ引退前の三年生が出席した。

連盟を結成するというのではなく、四校の親善と発展を目的とし、互いの演技を発表し合う合同発表会を行おうという主旨であった。そして各校持ち帰って部内で検討した結果、三校とも異論はなく開催が決定した。

会の名称は、春日部高の上野賢了副団長が考えた「日輪の下に」に決まった。同氏はその名称の由来について、第四十二回「日輪の下に」（平成二十九年二月十二日）のパンフレットに掲載の回顧録において次のように述べている。

「日輪＝太陽ということで、我々応援団の活動のメインは炎天下での応援なのでその活動を舞台に移して見てもらうという意味が一番大きかったと思います。埼玉県のマークも太陽だということもありました。また、応援団は、選手に常に光を当てて元気を与える太陽のような存在ですし、その一方でいつもは縁の下で支えている応援団が日の当たる場所で演技をするという意味もあってちょうどいいと思いました。」

第一回日輪の下に
開催日
昭和五十二年九月十一日（日）
午後一時三十分開演
開催場所　春日部高校体育館

都合が悪くなったということで、熊谷高が直前に不参加を表明し、三校による発表会となってしまった。リハーサルは一切行わず、いわゆる「ぶっつけ本番」で行われた。校歌の楽譜は事前に春日部高へ送付し、三校の団旗入場の際に同高のブラスバンドが演奏を行ってくれた。本校と浦和高はブラスバンドなしで演技を行った。

時の春日部高・中村享団長の記憶によると、観客は各校ＯＢと顧問の先生、春日部女子高の生徒二、三名で、合計二十名ぐらいだったという。

当日配布された全ページ手書きのパンフレットには、本校の演目として、校歌、第一応援歌、川高拍手、紫紺の拍手、水月一拍子が書かれている。本校はこの一週間後の九月十七日（土）と十八日（日）の両日にくすのき祭での演技発表会が控えていた。

第１回「日輪の下に」パンフレット

二年後の昭和五十四年に不動岡高校が加盟し、昭和五十六年二月に行われた第六回のパンフレットには、主催「五校応援団連盟『日輪の下に』実行委員会」と、「連盟」の文字が記載されている。そして昭和六十年に松山高校が加盟して、現在の六校体制となった。

四校が集まり協力して発表会を行っていたという状況が、現在は「六校応援団連盟」という名称の組織となり、他校であっても同学年は同期としての絆が深くなっている。また埼玉県からの要請を受け、六校が一つとなって全国高等学校総合体育大会（インターハイ）の開会式などの県体育関係行事、更には正月明けの県庁仕事始め行事などにも馳せ参じて演技を披露している。

## 第三の役職「統制」登場

統制という役職は、現在では練習メニューの作成と練習の統括を担っており、団長、副団長に次ぐ要職となっているが、昭和五十二（一九七七）年まで「統制」は鼓手の別称であった。鼓手は太鼓で拍手やエールなど全体の拍子を合わせるというテンポ設定の重要な役割を担っており、その意味で統制とも呼ばれていた。

鼓手は旗手同様に毎年一名が選ばれ、必ずしも三年生というわけではなく、二年生や一年生が務める年もあった。部には団長と副団長の腕章の他に「統制」と書かれた腕章があり、鼓手はそれを着用していた。また演技発表会のパンフレットにも、団長や副団長と並んで「鼓手」として名前が書かれていた。

昭和四十八年度（第十四代）の鼓手は三年生の半田孝が務め、翌四十九年度は第十五代の三年生が不在であったため、一年生の大川博史が務め、大川は翌五十年度（第十六代）でも務めた。以降昭和五十一～五十三年度までは二年生の村上敏之、二年生の山内一浩、一年生の加藤雅之が鼓手であった。昭和五十四年度に加藤が二年生になっても鼓手を務めたのを最後に、以降はその年の鼓手

が一名に限定されず、複数の部員が交代で太鼓を叩くようになり、鼓手という名称も自然消滅した。

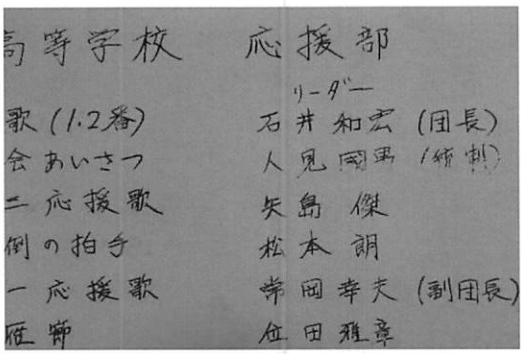
昭和五十二年八月、第十八代の新井団長は、自分たちの引退を控えて次年度の団長と副団長を決めるにあたり、一つの配慮をした。第十九代は三人であったため、一人だけ役職がないということを好ましく思わず、第三の役職を新設すべきだと考えたのだ。

新井団長は東京六大学の各校応援団の職制を参考にして検討した結果、大学に存在するリーダー長のような「応援の統括」を任務とする役職はどうかと考えた。これを同期の部員に提案したところ賛同を得られたので、第十九代の役職は、団長、副団長、更に腕章がすでに存在していた統制の三つとすることを決めた。そして神山正人を団長、山内一浩を副団長、岡崎博次を統制に指名した。岡崎に対して、統制の任務や役割に関する具体的な指示は特に行わなかった。

そして第十九代の引退にあたり、次年度の団長は石井和宏、副団長は常岡幸夫が指名された。統制の指名はなかったが、この第二十代も三人であったため、石井団長らは前年度のスタイルを踏襲して、もう一人の三年生、人見國男を統制とすることにした。

第十九代の時の演技発表会パンフレットでは、統制の役職は書かれず、「三年　岡崎博次」とされていたが、昭和五十三年十一月二十三日に行われた第三回「日輪の下に」のパンフレットには「人見國男（統制）」と書かれていた。

石井団長は自らの引退にあたり、次年度の役職を自分たちで決めるように指示したため、第二十一代の六名はお互いの投票で役職を決めることにした。その役職の中に統制を入れていたので、投票の結果、団長は位田雅章、副団長は松本朗、そして矢嶋傑が統制に決定し、矢嶋は第三代統制とされた。続く第二十二代と二十三代は、先代の指名により廣田直人が第四代統制、竹尾淳が第五代統制となった。


高等学校　応援部
リーダー
歌（1.2番）　石井和宏（団長）
会あいさつ　人見國男（統制）
二応援歌　矢島傑
例の拍手　松本朗
一応援歌　常岡幸夫（副団長）
旌　位田雅章

第3回「日輪の下に」のパンフレットで
統制の役職が初めて記載された

こうして統制は部内における第三の役職として定着していったものの、その役割は明確にされていなかった。第二応援歌や団歌の指揮を務めるということが、統制の担当として唯一受け継がれていた観があった。

第二十四代は人数が十名と多かったこともあり、菅野真二が統制部長、中野広行と小出和則の両名が統制に指名された。三名とも第六代である。やはり統制の役割や統制部長と統制二名との違いなどは先代から何ら申し送りされなかったが、三名ともそれらを明確にする必要性は特に感じていなかった。そしてこの年に第四応援歌「凌雲の志」が誕生したため、演技発表会では、その制作に携わった菅野が「凌雲の志」、小出が第二応援歌、中野が団歌を担当した。「凌雲の志」の指揮を統制が務めることは次年度以降も受け継がれ（例外の代も有）、今日まで続いている。

年月を経て部内の要職となっていく統制であるが、毎年存在しているわけではない。三年生が一人や二人の代はもちろん存在しないが、三人や四人いても統制が設けられなかった代がある。第三十八代（平成十年度）は三人いたが、団長の他は渉外と旗手長兼総務とされ、副団長も統制も設けられなかった。また第四十一代（平成十四年度）は四人いたにもかかわらず、団長、副団長、旗手長兼渉外、総務とされ、統制は設けられなかった。第四十二代（平成十六年度）は三人で団長、副団長、旗手長兼渉外であった。

統制の系譜は別表の通り。※は三年生が一人か二人の代、または三人以上いたが統制が設けられなかった代。

| 年度 | 部員代 | 統制代 |
|---|---|---|
| 昭和53(1978)～平成2(1990) | 19代～31代 | 初代～13代 |
| 平成3(1991) | (3年生不在) | |
| 平成4(1992)～7(1995) | 32代～35代 | 14代～17代 |
| 平成8(1996)～11(1999) | 36代～39代 | ※ |
| 平成12(2000) | 40代 | 18代 |
| 平成13(2001) | (3年生不在) | |
| 平成14(2002) | 41代 | ※ |
| 平成15(2003) | (3年生不在) | |
| 平成16(2004) | 42代 | ※ |
| 平成17(2005) | 43代 | 19代 |
| 平成18(2006)～19(2007) | 44代～45代 | ※ |
| 平成20(2008)～21(2009) | (3年生不在) | |
| 平成22(2010) | 46代 | ※ |
| 平成23(2011) | (3年生不在) | |
| 平成24(2012)～26(2014) | 47代～49代 | 20代～22代 |
| 平成27(2015) | 50代 | ※ |
| 平成28(2016)～30(2018) | 51代～53代 | 23代～25代 |

統制の系譜（初代～25代）

## 部存続の危機からの復興

あるスポーツに打ち込み、根性と努力でやり遂げようとする熱血の精神性を意味する「スポ根」という言葉がいつしか生まれた。九〇年代に入ると漫画やアニメ、ドラマにおいて、このスポ根ものが忌み嫌われ、嘲笑されるようになった。この時代の風潮を背景に若者たちが厳しい世界を敬遠するようになり、厳しい世界の代名詞とも言える応援団の門を叩く者は当然のように激減した。

川高応援部においても決して例外ではない。平成三十年間の歴史の中で、三年生がいなかった年は六回、たった一人だった年は五回もある。中でも平成十八（二〇〇六）年～二十一年の四年間は部の存続が危ぶまれた、正に危機的状況にあった。この四年間の演技発表会における学年別人数は別表の通りである。

平成十九、二十年度の二年間は部員わずか二人で発表会を行い、二十一年度は二年生の清水俊介が、若手OBのサポートを受けながらたった一人で指揮を務めた。清水は団長ではなく、「二年団員」として、校歌、第一・第二応援歌、凌雲の志、野球応援（応援曲五曲メドレー）を一人でやり遂げた。清水がいなければ川高応援部のDNAは受け継がれなかったことになる。

| | | 3年生 | 2年生 | 1年生 |
|---|---|---|---|---|
| 平成17年度 | 第41回 | 4 | 2 | 2 |
| 平成18年度 | 第42回 | 2 | 1 | 1 |
| 平成19年度 | 第43回 | 1 | 1 | 0 |
| 平成20年度 | 第44回 | 0 | 1 | 1 |
| 平成21年度 | 第45回 | 0 | 1 | 0 |
| 平成22年度 | 第46回 | 1 | 0 | 11 |

部員激減期の演技発表会における
年度ごとの学年別人数

平成三十年十月二十五日付の川越高校新聞に「応援部存続」という見出しで「２０００年代後半、応援部は部員の減少という深刻な問題に瀕していた。」と書かれ、清水俊介のインタビュー記事が掲載されている。清水の談話の概要は次の通り。

「私が入学した年は応援部に先輩の部員がいなかったため、校歌・応援歌指導にはその前年に卒業された応援部OBで、第四十五代団長を務めた先輩が来て下さっていた。その姿を見てかっこいいと思ったから入部した。だが、先輩が誰もいないのだから、演技の指導を直接受ける機会が少なかった。野球部の試合の応援を行う時にOBの先輩方に来て頂き、指導をして頂いていたが、普段の練習の時に指導を受けられなかったので、とても大変だった。ノウハウが分からず、入部してからしばらくは手探りの状態が続いていたと思う。自分の他に一学年上の先輩が入部したが、途中で退部してしまったので結果的に部員は自分一人になってしまった。誰か一人ぐらいは同学年で入部する人がいるだろうと思っていたが、入部したのが自分一人だけだったのは意外だった。もっと部員がいればいいなとは思ったが、悲観的ではなく一人でも続けていけるだろうと前向きに捉えていた。自分の一学年下は誰も入部せず、二学年下に十一名が入部した。」

清水が団長となった平成二十二年度以降は、顧問の坂東先生の精力的な勧誘活動が実を結んで入部者が増加。ここ数年は毎年各学年の部員数も十人以上と多くなり、一時期の危機を脱することができた。

2009
平成21
# 應援部存続
2000年代後半、應援部は部員の減少という深刻な問題に瀕していた。今回顧問には「本校OBの応援部第45代団長を務めた清水俊介さんに話を聞いた。【記者】
川越高校に入学した理由　部員の思い出
当時の清水さん
部員が一人だったことについて思ったから
機関部に入部した理由
2017 2016 2012 2011 2009 2008 2004 2003 2002
28 27 24 23 21 18 16 15 14

第46代団長・清水俊介へのインタビュー記事
川越高校新聞（平成30年10月25日付）

今や応援部は学内において圧倒的な存在感を放っている。スポーツの応援は野球だけではなく、ラグビー、サッカー、水泳、陸上部の駅伝にも駆けつけ、関東大会以上の大会へ出場する場合は、その壮行会で応援歌やエールの指揮を務める。また、入学式、新入生歓迎会、新入生校歌・応援歌指導、離任式、球技大会、陸上競技大会、くすのき祭、センター試験出陣式、卒業式、川高初雁の森植樹祭等、もはや学内行事に応援部は欠かせない存在となっている。くすのき祭の後夜祭では、川高生の前で新団長の発表も行われている。

更に学外からの要請を受けて、アトレ川越イベント、アトレ学園祭、一一〇番の日、蓮馨寺イベント、勝瀬中学「フェスタ勝中」、老人ホーム等における演技披露、小江戸川越ハーフマラソンの応援も行っている。

## 大団旗六度目の新調成る

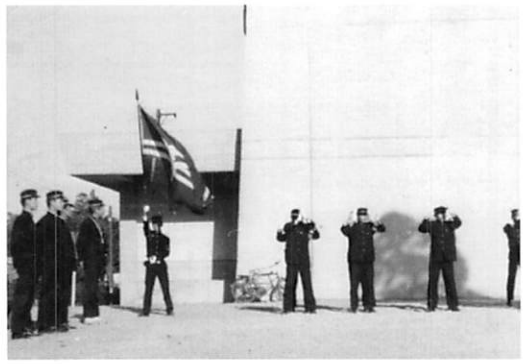
応援団のシンボルである団旗が初めて製作されたのは、応援団が発足した翌年の昭和三十一（一九五六）年。

それから九年後の昭和四十年に、生徒会予備費を使って、当時県内三番目の大きさと言われた大団旗を製作した。顧問の松本先生から三月の卒業式で使用するので、卒業式までに製作するよう厳命された。そして卒業式当日に完成してぎりぎり間に合ったが、団旗の「川越高校応援団」の部分を折り曲げて、演台の後に校旗として張り付けるという形での使用であった。

その後もＯＢらの支援・協力により、昭和五十六年、平成五年、平成十六年と三度大団旗を新調した。そして現在の大団旗は平成二十六年に製作したもので、六代目となる。四代目以降は約十年おきに製作されているが、六度の製作年は別表の通り。

| | | |
|---|---|---|
| ① | 昭和31年 | (1956) |
| ② | 昭和40年 | (1965) |
| ③ | 昭和56年 | (1981) |
| ④ | 平成 5年 | (1993) |
| ⑤ | 平成16年 | (2004) |
| ⑥ | 平成26年 | (2014) |

大団旗製作年



昭和39年の文化祭前日に行ったパレードでは、「埼玉県立川越高校」と書かれた旗を掲げて練り歩いた

旗手は現在、一年生の希望者の中から旗手長が選抜して決めているが、かつては比較的体格の良い一年生が指名され、一年ないしは二年間、旗手となっていた。下級生が少ないなどの事情によっては三年生が旗手を務めた代もある。旗手は演技発表会や「日輪の下に」などのステージはもとより、野球を始めとするスポーツ応援中に団旗を持ち続ける。とりわけ夏の野球応援での任務が過酷であることは言うまでもない。団旗の掲揚は、「我々が応援しているぞ。川高勝て！」の意気を示し、応援席の本陣がここにあることを示すシンボルとして、正になくてはならないものである。

第二十八代（昭和六十二年度）の役職として旗手長が新設されると、それ以降、三年生が〇～二名の代以外は必ず旗手長が設けられた。三年生が三名いても統制は存在せず、団長、副団長、旗手長という代が二度あった。今や旗手長はそれほどの要職とされている。

他の高校や大学の応援団でもよく見られるが、ステージのプログラムとして行われる団旗紹介の際に、旗手が自身の〝怪力〟ぶりをアピールするパフォーマンスが本校でも行われている。これは昭和五十七年の演技発表会で当時一年生旗手だった大澤一隆が、団旗紹介における旗礼の際に、両手で握りしめたポールを振り回しながら旗を揚げて以降、今日まで続いている。大澤は翌年の発表会でも旗手を務め、今度は片手でポールを振り回して旗を揚げた。これらはいずれも先輩に指示されて行ったことであるが、この怪力パフォーマンスは今では旗手長の重要な使命となり、最大最高の見せ場となっている。また近年、演技発表会の全プログラムが終了して幕が下ろされる時、完全に閉まる少し前に、幕と舞台の間のわずかな隙間に旗を滑り込ませ、幕の内側へ入れるというパフォーマンスも行っている。

予餞会のステージで旗手を務める
平井俊行（昭和56年3月7日）

## 応援部、新時代へ

昭和五十（一九七五）年から、本校も全国の高校同様に「ダッシュＫＥＩＯ」を野球応援で行うようになった。（名称は「ＫＯパンチ」）昭和五十七年からは「コンバットマーチ」も行うようになり、何かアレンジし

たわけではなかったが、「川高コンバットマーチ」と呼んで行っていた。

昭和六十三年に川高初のオリジナル応援曲「ファイティングマーチ」が誕生し、以降、野球応援は従来の太鼓とかけ声、拍手というスタイルから応援曲をメインとするスタイルへと変わっていった。

平成七年に早稲田大学応援部の指導を受け、同大学で使用している「大進撃」「スパークリングマーチ」等の使用許可をもらうと、実際の野球応援でも、演技発表会や「日輪の下に」等における「野球応援」の演目でも、この早稲田の曲をメインで行うようになった。そして、いつしかこれが川高伝統の応援ラインナップとなってしまった観すらあった。

「我々は埼玉の名門、歴史ある伝統校であり、私学早大の附属校や系属校ではない」という自負を強く持つ第二十四代のOB菅野真二（昭和五十九年三月卒業）は、長らく続くこの状況を憂え、平成二十九年八月、ついに意を決して「伝統校としての誇りを持ち、モノマネ応援から脱却して、川高独自のオリジナル応援の確立をめざそう」と部員たちに訴えかけた。

この時二年生であった第五十三代のメンバーは、菅野のこの提唱以前から自分たちの代で何か新しいものを作りたいという意向を持っていた。そこで、三年生引退後すぐに話し合いを行い、新応援歌と新応援曲を作ることにした。その取り組みの結果、応援曲として菅野から「Winner川高」「BLAZING」の二曲を、吹奏楽部顧問の長島一樹先生から「ライトニングマーチ」の提供を受け、「ファイティングマーチ」とともに、この四曲で新応援曲メドレーを作り上げることにした。翌年二月に本校で開催される「日輪の下に」での披露をめざし、リーダーテクニック、かけ声、応援学生が行う踊りなどの検討を重ねた。また「日輪の下に」に駆けつけてくれる運動部の面々にも説明と指導を行った。平成三十年二月十一日、本校体育館で行われた「第四十三回 日輪の下に」において、ついに全曲オリジナルの「川高応援メドレー」を初披露した。野球部、サッカー部、水泳部、陸上部の部員たちもステージ前で一緒に歌い、他校や満員の大観衆に川高応援部の新時代幕開けをアピールすることができた。

また、七月の野球応援に向けて、オリジナル曲をもう一曲増やすこととし、川高卒業生で川越在住のピアニスト・作曲家、山田隆広氏に作曲を依頼した。このオリジナル応援の確立に向けた取り組みは、朝日新聞やテレビ埼玉の「高校野球ダイジェスト」でも採り上げられて話題となった。そして山田氏から「スパイラル」とファンファーレの提供を受け、五曲となったオリジナル応援曲を駆使して野球応援を大いに盛り上げることに成功した。

自分が入部した時に行われていたことを伝統と受け止め、それらが錦の御旗の如く輝きを放つ応援部の世界において、この新応援曲メドレーへの転換は、正に勇気ある偉業と言えよう。もちろん顧問の坂東先生のご理解とご支援があったからこそ成し得たものであることは言うまでもない。

応援曲 模倣から脱却
白球今昔物語
地域とともに
川越 伝統の名の下に
英語が通じる街へ
川越でコンテスト

オリジナル応援への取り組みを紹介する新聞
（「朝日新聞」平成30年6月26日付）

また八月には、第五応援歌「雄志の一閃」を誕生させた。新応援歌の制作は「凌雲の志」以来、実に三十五年ぶりのことであり、九月二日の第五十四回演技発表会にて初披露した。全川高生に対する初披露は、十二月二十一日の二学期終業式において行われた。演技発表会の際は応援部のみで行ったが、終業式では初めて吹奏楽部の演奏付きで行い、歌詞と楽譜を印刷した「団報」を全川高生に事前に配布しておいた。この「雄志の一閃」は、作詞・作曲とも川高生によるもので、本校初の学生のみで手がけた応援歌である。

こうして第五十三代の幹部は当初の計画通り、新応援歌と新応援曲の制作を見事成し遂げた。「さすが川高！」と他校も羨むオリジナル応援が確立された暁には、一大功労者である第五十三代の名称は川高応援部史上に燦然と輝くことであろう。

団報
第五応援歌『雄志の一閃』
本日終業式にて披露!!

全川高生に配布した
第五応援歌に関する「団報」

# ＯＢ会の発足とその活動について

**1991～**

**（平成３年発足）**

**OB会**

**＜歴代ＯＢ会長＞**

初　代　内河 好博

二代目　岡田　勲

三代目　松井　哲

**＜ＯＢ数＞３１０名**

昭和30年度～平成30年度
（物故者含む）

平成3(1991)年1月5日、川越高校応援部ＯＢ会が発足し、内河好博（第２代･昭和37年3月卒）が初代会長となった。ＯＢ会では会員間の親睦を図るとともに現役生への演技指導、寄付等の支援を行っている。

平成22年、野球部ＯＢチームが埼玉県代表としてマスターズ甲子園への出場が決まり、第32代島信之、第33代長野真・小林拓実らの声掛けの下、応援部ＯＢ有志による応援団を結成することになった。偶然にも対戦相手は51年前に甲子園で対戦した熊本の鎮西高校となり、11月に甲子園アルプススタンドで応援部・吹奏楽部の両ＯＢによって応援を繰り広げた。この取り組みは埼玉新聞や広報川越でも取り上げられた。

２年後の平成24年11月、野球部ＯＢチームは再びマスターズ甲子園に出場して富山の高岡商業高校と対戦したが、この時もＯＢ会では有志応援団を募り甲子園で吹奏楽部ＯＢと共にエールを送った。

更に平成28年、野球部ＯＢチームは三度目のマスターズ甲子園に出場することとなった。ノーベル物理学賞を受賞した梶田隆章氏の記念講演がこの年の5月22日の同窓会総会で行われたが、梶田氏を囲む懇親会で、第35代関根盛敏が第一応援歌の指揮を、松井哲ＯＢ会長が校歌の指揮をそれぞれ務め、梶田氏及び240人余りの出席者へマスターズ甲子園応援への参加を促した。

そして11月、徳島の鳴門渦潮高校と対戦した野球部ＯＢチームは、9回劇的なサヨナラ勝利を収め、川越高校の誉れの名をば轟かせ、野球部･応援部･吹奏楽部ＯＢ一同、凱歌を音吐朗々と斉唱したのだった。

ＯＢ会も発足から四半世紀が経過し、現在は学生幹事を選出して現役生支援の強化を図る取り組み等も行っている。

ＯＢ会発足「親睦の集い」
（於 福登美／川越市新富町　平成3年1月5日）

三度目のマスターズ甲子園応援（平成28年11月6日）

ノーベル賞･梶田氏記念講演後の懇親会　松井会長の指揮で校歌の大合唱
（於 氷川会館 平成28年5月22日）

# 伝統の系譜

現在も部室に置かれているモットーの三原則が書かれた黒板

# 応援団、発足する！

## 1955

（昭和30年）

・４月、大嶋吉康を団長とする10名（３年生９名、２年生１名）で生徒会総務に属する応援団が発足した。

初代団長
大嶋　吉康

副団長
水村　正治

國井　博

小林　栄二

近松　修二

轟　明広

野口　美雄

山崎　定二

吉野　宏

大嶋吉康
國井　博
小林栄二
近松修二
轟　明広
野口美雄
水村正治
山崎定二
吉野　宏

# シンボルの応援団旗を製作

## 1956

（昭和31年）

・生徒全員から１人10円を徴収して応援団旗を製作した。
・この年より卒業アルバムに掲載されるようになった。

初代応援団旗

昭和31年度団長
内山　太

「応援団」として卒業アルバムに初めて掲載された写真

石井利雄
内山　太
鈴木忠男
根津　進

# 名称は「応援部」へ

1957
・
1958

・昭和33年、生徒会担当の近藤鉄城先生が顧問となり、剣道部の宇津木忠征が団長となった。この年から卒業アルバムにおける名称が「応援部」となった。

昭和32年度団長
森田 稔郎

## (昭和32年)

森田稔郎

※昭和32年度は柔道部の森田稔郎が団長となったが、その他のメンバー不詳。
この年の卒業アルバムに応援団の写真は掲載されていない。

## (昭和33年)

(顧問)
近藤鉄城先生

宇津木忠征
大野和夫
渡辺　昇

「応援部」として卒業アルバムに掲載された写真
後列左より 小松崎和夫（2年）　渡辺昇
前列左より 鈴木実（2年）　近藤鉄城先生 宇津木忠征団長

# 憧れの甲子園で応援！

**1959**

**（昭和34年）**

・野球部が第41回全国高等学校野球選手権大会へ出場。

１回戦：鎮西高戦に３対１で快勝（8月11日）

２回戦：高知商戦に０対１で惜敗（8月15日）

（顧問）

近藤鉄城先生

小川禎三先生

小松崎和夫

鈴木　実

三宅義信

前列左より２人目・鈴木実団長（柔道部）近藤鉄城先生 三宅義信（陸上部）

後列左より３人目・小松崎和夫　※他は2年生

甲子園球場アルプススタンドでの応援

（鎮西高戦　昭和34年8月11日）

高知商戦における応援席

（「毎日新聞・埼玉版」昭和34年8月16日付）

# 熊谷高校との定期戦始まる

**1960**

（昭和35年）

第1代

・熊谷高校からの申し込みにより、9月12日に第１回交歓会（交歓定期戦）が開催された。開会式での校歌斉唱とエール交換の指揮、各競技の応援を行った。

・明治大学応援団員になっていたＯＢの森田稔郎（昭和33年3月卒）から指導を受けた。

（顧問）

近藤鉄城先生

小川禎三先生

内田昌治

大野　昭

大山暉夫

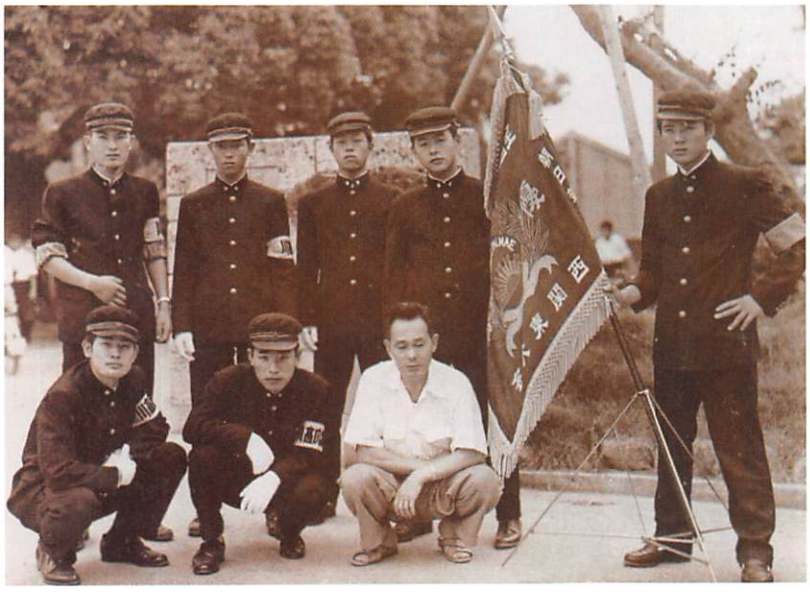
岡田　勲

小輪瀬輝夫

加茂下大学

平田新一

森田賢一



後列左より内田（水泳部）、加茂下（柔道部）、森田（テニス部）、大野、大山団長（陸上部）
前列左より平田（剣道部）、小輪瀬（陸上部）、近藤鉄城先生
※岡田副団長（所属部なし）は撮影当日不在

野球応援

# 泊まり込みで野球応援の練習

**1961**

（昭和36年）

第2代

・夏の野球大会の前に、講堂向かいの合宿所に一週間ほど泊まり込み、応援の練習に励んだ。

・日大応援団員になっていたＯＢの大山暉夫（第1代・昭和36年3月卒）から応援方法や拍手の拍子などの指導を受けた。

後列左より内河団長（陸上部）、今井（山岳部）、高橋紀夫（バレー部）
岡本副団長（柔道部）、阿部（弓道部）、高橋義徳（テニス部）
前列左より宮沢（卓球部）、染谷（山岳部）、近藤鉄城先生、武川（ＪＲＣ）
※新井、大河原、古賀、三上は撮影当日不在（４名とも所属部なし）

（顧問）
近藤鉄城先生
小川禎三先生

阿部俊英
新井　攻
今井征四郎
内河好博
大河原義重
岡本　元
古賀正昭
染谷　明
高橋紀夫
高橋義徳
武川　洋
三上邦弘
宮沢忠昭

我々世代は何と言っても入学時に夏の甲子園初出場という快挙があった事が無類の喜びでありました。何せ一年坊であった為、何がドウしてドウなんだか全く分からない状況でした。

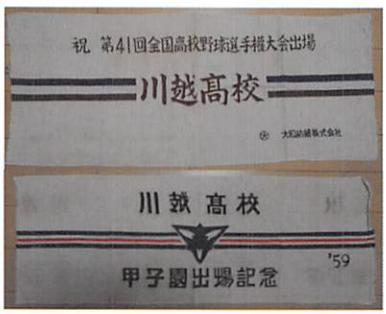
応援部の一年坊は、川越駅頭で「川越高校、甲子園出場　宜しく」のカンパに駆り出された事、それと甲子園に入った瞬間その大きさに圧倒された感覚があります。

一回戦中九州熊本の鎮西高校に勝ち、メインポールに校旗そしてグラウンド一杯に流れる「紫匂う」の校歌。感激の一瞬でした。

二回戦相手の高知商のアルプスから流れる「南国土佐を」のメロディが忘れられません。

その頃には、応援部がそれから何年何十年も継続するなんて夢にも思いませんでした。

（岡本　元）




甲子園出場記念の手拭い
（提供　岡本 元）

# 待望の吹奏楽部が誕生

1962

（昭和37年）

第3代

・（校内の動き）野球部の甲子園出場を機に、結成が目指されていた吹奏楽部が10月3日に誕生した。音楽教育促進のための県費30万円を得て、トランペットやトロンボーンなど18の楽器を購入した。
（部員は16名。顧問は松本成二先生が応援部と兼務）

（顧問）
近藤鉄城先生
松本成二先生

天沼　隆
今井武司
桑原優人
山岸岩雄
山口現郎

後列左より山岸副団長、桑原団長（演劇部）、今井（陸上部）
前列左より松本成二先生、近藤鉄城先生

第３回対熊高交歓会　野球応援
（於 初雁球場　昭和37年5月25日）

# 応援部、クラブとなる！

**1963**

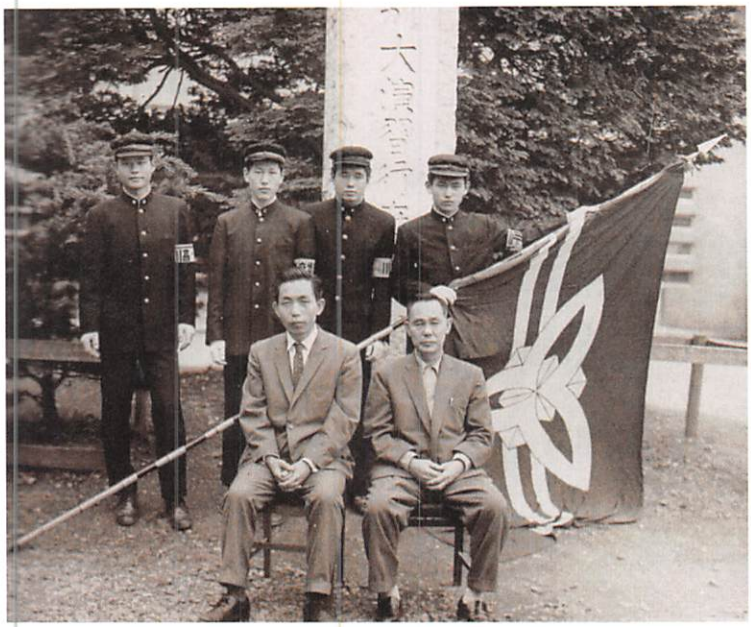
**（昭和38年）**

**第4代**

・春、応援部は生徒会総務から独立し、文化部のクラブの一つとなった。
　これに伴い、従来の「団長・副団長」の呼称を「部長・副部長」へ改めた。
・前年11月に完成した理科棟の屋上で練習を行うようになった。

（顧問）
近藤鉄城先生
松本成二先生

伊藤　稔
氏原　智
高橋好次郎
堀江快治
山口慎吾



理科教室完成する

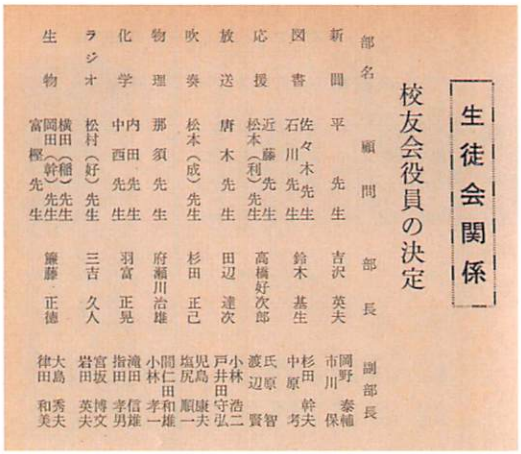
モダンな設計

理科教室六・普通教室六

川越高校新聞

大陽堂

理科棟の完成を伝える川越高校新聞（昭和37年11月6日付）
本校初の鉄筋コンクリート三階建て。
平成14年まで40年近く、この屋上で練習が行われた。



生徒会関係

校友会役員の決定

| 部名 | 顧問 | 部長 | 副部長 |
|---|---|---|---|
| 新聞 | 平先生 | 吉沢英夫 | 岡野泰市<br>川補保 |
| 図書 | 佐々木先生<br>石川先生 | 鈴木基生 | 杉田幹夫<br>中原考 |
| 応援 | 近藤先生<br>松本（利）先生 | 高橋好次郎 | 氏原智<br>渡辺賢 |
| 放送 | 唐木先生 | 田辺達次 | 小林浩<br>戸井田守弘二 |
| 吹奏 | 松本（成）先生 | 杉田正己 | 塩尻順<br>児島康一夫 |
| 物理 | 那須先生 | 府瀬川治雄 | 小林孝一<br>開仁田和雄 |
| 化学 | 内田先生<br>中西先生 | 羽富正晃 | 滝田信雄<br>指田孝男 |
| ラジオ | 松村（好）先生 | 三吉久人 | 宮坂博文<br>岩田英夫 |
| 生物 | 横田（稔）先生<br>岡田先生<br>樫先生 | 籐藤正徳 | 大島秀夫<br>田和美 |

クラブとなり、他部同様に新部長・副部長名が
掲載されるようになった
（昭和38年度 生徒会報 第15号）

# 部員バッヂ誕生！

**1964**

（昭和39年）

第5代

（顧問）
近藤鉄城先生
松本成二先生

相曽利章
笠松謙光
坂間　正
里見典男
高篠芳夫
豊田辰夫
村田佳衛
山口憲朗
渡辺　賢

・部員バッヂを作成した（２年生の井口敏によるデザイン）
・長袖Ｔシャツのユニフォームを作成した。
・ＯＢの内河好博（第2代・昭和37年3月卒）より和太鼓が寄贈された。
・川高卒業生で早稲田大学応援部１年生の粟生田弘明氏より発声、エール、拍手等の基本的事項に関する指導を受けた。
・9月、この年発足した定時制の応援団と合同演技を行った。
・文化祭前日の10月2日、本川越駅から川越市民会館（この年の5月に開館）まで吹奏楽部と一緒にパレードを行った。
・文化祭において部の発表会を市民会館で実施した。

部員バッヂ

文化祭前日に行ったパレード

第５回対熊高交歓会　野球応援（昭和39年6月5日）
初雁球場のスタンドに「ＫＨＳ」の人文字を作った

野球応援の指揮をする相曽副部長
１年生はユニフォームを着用した

# 第１回演技発表会を開催

**1965**

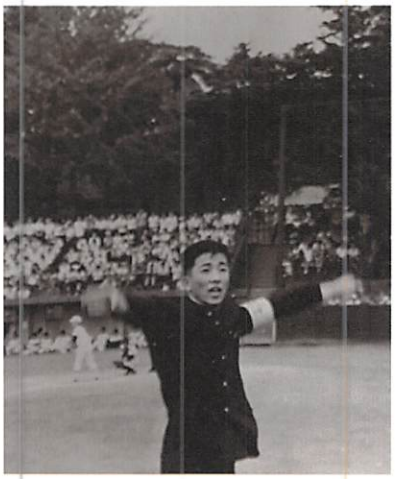
（昭和40年）

第6代

（顧問）
松本成二先生
高木宏先生

新井賢司
井口　敏
梶田正義
西留清比古
村田伊佐夫

・文化部所属のクラブから総務部所属のクラブになった。
・県内３番目の大きさの団旗を製作し、昭和40年3月の卒業式で初使用。
・「礼儀・節度・団結」の団則を制定した。
・腕章のデザインを変更し、色も紫紺からオレンジ色にした。
・昭和26年に制作されていた「とどろく凱歌」を歌うようになった。（曲名を「凱歌」とした）
・飯能市の竹寺にて初合宿を実施した。この合宿において、早稲田大学応援部の粟生田弘明氏より指導を受けた。
・乾杯の拍手、撃滅の拍手、紫紺の拍手、打倒の拍手、「川高勝つ」、「川高節」を制作し、文化祭において第１回の演技発表会を市民会館で開催。
・剣道部や学徒総合体育大会におけるバレー部、バスケット部の試合を応援した。


野球応援の指揮をする井口部長

着用していても
目立たなかった
紫紺からオレンジ色
になった新腕章

第１回夏合宿
右端に立っているのが、指導を受けた早大応援部の粟生田氏

野球応援

# 応援団協議会、発足

**1966**

（昭和41年）

**第7代**

・昭和40年11月、松山高校応援団との交歓会（サッカー試合）を実施。
・6月、川越松山地区応援団協議会が発足した。
・6月、対熊高交歓会の野球試合で初雁球場に鮮やかな「川高」の人文字を作成した。
・水月一拍子を制作した。
・本校卒業生の専修大学応援団員と中央大学応援団員から指導を受けた。

（顧問）
松本成二先生
高木宏先生

石井輝夫
長　　勇
小山　豊
長島経男
水内政幸

左：長勇による「撃滅の拍手」右：石井輝夫による「打倒の拍手」（豊岡高校文化祭にて）

第７回対熊高交歓会　野球応援　（於 初雁球場　昭和41年6月15日）

# 「規律・礼節・団結」へ！

1967

（昭和42年）

第8代

・昭和41年10月8日に２階建て新部室棟が完成（１階：９室、２階：10室）
応援部は２階の１室を使用できることとなり、それまでの教室棟の２階へ上がる階段下の空き場所（物置小屋）から引っ越しをした。
・昭和41年11月、川越松山地区応援団協議会のサッカー大会が行われた。
・昭和41年11月、駅伝の県予選の応援を実施した。
・従来の団則「礼儀・節度・団結」を「規律・礼節・団結」へ変更した。
・5月、学徒総合体育大会で陸上競技を応援した。
・野球部が夏の大会で準々決勝へ進出し、ベスト8となった。
（川越工に２対８で敗れた）

（顧問）
松本成二先生
高木宏先生

会川文雄
大貫　清
小山恵二
関口広行
田中真多
長島芳夫
永田康夫
増田有史
町田喜一
諸井正純
吉田　仁

第３回演技発表会
（於 川越市民会館　昭和42年9月24日）

# 修理のため和太鼓を浅草へ

**1968**

（昭和43年）

第9代

・昭和42年10月、川越工業高の文化祭で演技発表を行なった。

・5月、川越松山地区応援団協議会の新入生歓迎ソフトボール大会へ参加した。

・和太鼓の張替え修理を実施。２年生７名が電車で浅草まで運搬した。

（顧問）

松本成二先生

高木宏先生

石井信行

市川重福

小沢正光

高橋謙二

真野育康

宮崎正夫

第９回対熊高交歓会　野球応援　（於 初雁球場　昭和43年6月6日）

# 熊高から第二応援歌を頂く

**1969**

（昭和44年）

第10代

（顧問）
高木宏先生
安野昇先生

浅見　仁
金子　肇
曽根　保
長島　亨
酡島武義
村野　豊
宮崎次男

・対熊高交歓会の終了に伴い、本校の「撃滅の拍手」と熊高の第二応援歌を交換した。本校でも第二応援歌と呼ぶことになった。
・「初雁節」を制作するとともに、唱歌「花咲爺」の替え歌を応援歌として採り入れ、演技発表会で披露した。（両曲の制作・導入は２年生の発案による）
・（校内の動き）文化祭が「くすのき祭」と改称された。

第22回体育祭　騎馬戦中の応援
（昭和44年10月9日）

第５回演技発表会で披露された第二応援歌（於 川越市民会館　昭和44年9月21日）

# 他校の文化祭で演技を披露

**1970**

（昭和45年）

第11代

・昭和44年10月に川越商業高と川越工業高の文化祭で、11月に川越農業高の文化祭で演技発表を行なった。

・（校内の動き）5月、創立70周年記念事業の新体育館兼講堂が完成。

（顧問）

高木宏先生

安野昇先生

岡部秀雄

沖田　実

鴨井千浩

木村　進

倉島泰穂

森田義幸

旧講堂跡に建てられた新体育館兼講堂
昭和49年の第10回から23年間、
ここが演技発表会の会場であった

総務部

生徒会との掛橋

校内の連体を

「川越高校新聞」新入生歓迎号
（昭和45年4月8日付）に掲載された
応援部の紹介記事
「とかく応援団は古くからの悪いイメージがあるが
それは新しいセンスによって打破された」とある

# 予餞会で初めて演技を発表

**1971**

（昭和46年）

第12代

・2月10日、川越市民会館で行われた予餞会において初めて演技を発表した。

・川越女子高と合同で行われた新入生歓迎会でも初めて演技を発表した。（会は4月24日と5月1日の両日に川越市民会館で行われ、演技発表は第一日目で実施）

日頃の鍛錬の賜物である演技を、たった一度の演技発表会だけではなく、積極的に発表していこうという考えの下、予餞会と新入生歓迎会を発表の場として追加した。

・１、２年生に対して「初雁節」の２番の歌詞を作成するよう指示した結果、２年生の本橋孝之の作品が一部修正の上で採用された。

・７月、昭和41年以来、５年ぶりに竹寺で２泊３日の夏合宿を行った。

（顧問）

高木宏先生

大久原秀雄先生

小室貴史

佐藤真寿夫

中島信義

野村三喜男

原　英雄

宮崎年之

第７回演技発表会（於 川越市民会館　昭和46年10月3日）

# 炎の拍手誕生！

**1972**

（昭和47年）

第13代

（顧問）
高木宏先生
大久原秀雄先生

青野　博
浅海靖男
内沼利泰
大久保正之
村里晃男
本橋孝之

・この年の１年生部員が全員退部してしまい、いなくなってしまった。
・７つ目の拍手「炎の拍手」を制作した。
・（校内の動き）昭和44年に第10回をもって終了した交歓会を復活させたいという提案が熊高生徒会からあったが、熊高側の生徒総会で否決されて復活しなかった。

3年生になってからだと思います。他校へ出かけ他校の拍手を見学したのですが、その中に「炎の拍手」の原型がありました。他校がどこか記憶にありません。何でもやりたがりであった私が「新しい拍手」づくりに夢中になってしまったのだと思います。拍手の数より団員が多かったのか、周囲が引き留めたにもかかわらず勝手に進めたのか思い出せません。多分私が勝手に進めたのだと思います。

もとより新しいものを創作する能力などありませんから、結局、完成とは言えない状況で文化祭の発表会を迎え、結果、後々の担当の方々にご苦労を押し付けることになってしまいました。

ということで、新しい拍手として許してくれた当時の皆様、引き継いで改良して頂いた皆様にお詫びを申し上げるばかりです。

また、「初雁節」の二番の歌詞は私が作ったものです。2年生の時に3年生から新しい歌詞作成の宿題が出ました。次の部活の時、1、2年生がそれぞれ発表し（屋上で一人ずつ歌い）、結果として私の文句が修正の上、選ばれたことになります。最終句を「ひときわ冴える月の色」と先輩のお一人に修正してもらい引き締めて頂いたことを覚えております。

（本橋　孝之）

野球応援（於 熊谷球場）

第８回演技発表会（於 川越市民会館　昭和47年10月8日）

# 新入部員獲得に成功

**1973**

（昭和48年）

第14代

・昭和47年9月の３年生引退後、２年生７名が最上級生となったが、１年生がゼロであったため、12月の川越高校新聞に部員募集の記事を掲載。結局、入部者は現れず、２年生なしの状態であったが、３年生の努力により新入部員３人の獲得に成功した。

・部員不足のため、夏合宿を行わなかった。

（顧問）

高木宏先生

大久原秀雄先生

新井武利

金澤和春

斉藤幸男

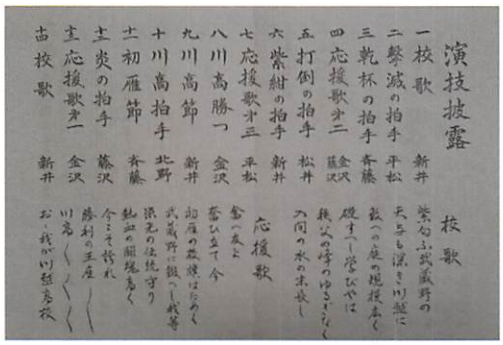
長島信之

半田　孝

平松宏之

藤澤俊行

対面式（昭和48年9月9日）



演技披露

一 校歌　新井

二 撃滅の拍手　平松

三 乾杯の拍手　斉藤

四 応援歌才二　金沢　藤沢

五 打倒の拍手　松井

六 紫紺の拍手　新井

七 応援歌才三　平松

八 川高勝つ　金沢

九 川高節　新井

十 川高拍手　北野

十一 初雁節　斉藤

十二 炎の拍手　篠沢

十三 応援歌才一　金沢

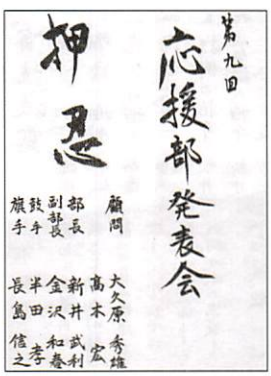
十四 校歌　新井

校歌

紫匂ふ武蔵野の
天与も深き川越に
数への歴の根授本く
優すし学びやは
我父の学のゆさとうく
八間の水の末枝し

応援歌

雲一番上
蓄ひ立て今
初雁の花線はなのく
武蔵野に銀つ一枝等
源光の伝統守り
紅血の開発為く
今ぞ誇れ
勝利の王座〜〜
川高〜〜〜〜〜
おゝ我が川越高校



第九回
応援部発表会
押忍

顧問　大久原秀雄　高木宏
部長　新井武利
副部長　金沢和春
鼓手　半田孝
旗手　長島信之

第9回演技発表会
パンフレット

# 腕章に二本線を入れる

**1975**

（昭和50年）

第16代※

（顧問）
高木宏先生
大久原秀雄先生

新井克哉
関谷和彦
松井　哲

・昭和48年9月、１学年上が不在のため１年生で部長・副部長となった。
・昭和49年9月、くすのき祭で第10回演技発表会を開催。この年から演技発表会は体育館で実施されるようになった。

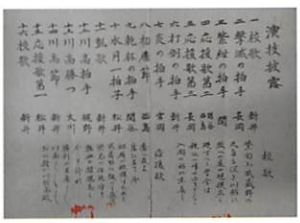
（以下、昭和50年）

・腕章を二本線入りのデザインへ変更し、今日まで受け継がれている。
・「凱歌」と「水月一拍子」を３年ぶりに復活させた。
・夏の野球応援で「ＫＯパンチ」（ダッシュＫＥＩＯ）の使用を開始した。
・野球応援のここぞという場面で学生注目を行うようになった。
・夏の埼玉大会（野球応援）で和太鼓が禁止された。
・中止していた夏合宿を３年ぶりに実施（生徒ホールに初めて宿泊）

上：昭和49年度までの腕章
下：二本線入りの新腕章

上：松井副部長による「勝つぞ！」
下：第二応援歌のリーダーを務める 関谷和彦
（野球応援・上尾高校戦）

3年生不在だった2年時の演技発表会
全部員6名のため、団旗を揚げられず後ろに張り付け
新井部長もバックを務めた。（昭和49年9月16日）



第11回演技発表会次第
（昭和50年9月15日）

※第15代は部員数ゼロのため欠番
顧問は高木宏先生と大久原秀雄先生

# 「部長」から「団長」へ

**1976**

（昭和51年）

第17代

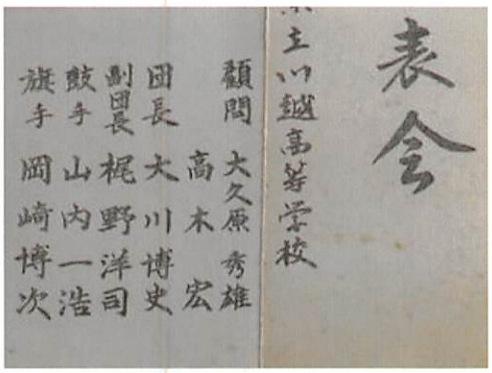
（顧問）
高木宏先生
大久原秀雄先生

大川博史
梶野洋司

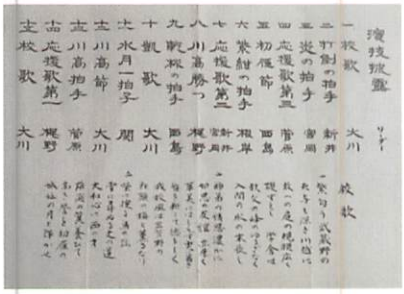
・従来の「部長」「副部長」を「団長」「副団長」と呼ぶようになり、演技発表会のパンフレットにもその呼称を記載した。

・バレー部が春の全国大会へ出場したため、応援を実施した。
（１回戦は駒沢体育館、２回戦は東京都体育館）
１回戦の日は生徒総会の開催予定日であったが、多くの生徒が応援に駆けつけたため、生徒総会が定数に満たず、順延された。

・前年夏の野球応援で和太鼓の使用が禁止されたことや、体育館での応援に和太鼓は相応しくないことなどから、バレーボールの応援に向けて洋太鼓を購入した。


表会
主川越高等学校
顧問　大久原秀雄
　　高木宏
団長　大川博史
副団長　梶野洋司
鼓手　山内一浩
旗手　岡崎博次

初めて「団長」「副団長」の呼称が記載された
第12回演技発表会パンフレット


演技披露

演技発表会における
梶野副団長の「川高勝つ」

# 「団歌」誕生！

**1977**

（昭和52年）

**第18代**

・昭和51年10月、関孝史が作詞して「団歌」が誕生がした。
・「団歌」と「凱歌」の口上を関孝史が作成した。
・３年生が自分たちの学年を第18代と定め、この年から「第○代」の代呼称を使用するようになった。
・洋太鼓に書道部の牛窪先生より「誠」の字を揮毫頂いた。
・第１次夏合宿を飯能市の竹寺で、第２次夏合宿を生徒ホールに宿泊して実施。
・浦和高、熊谷高、春日部高との合同発表会「日輪の下に」を初めて開催。
・演技発表会で新井団長が初めて羽織袴を着用して「川高節」を演じた。
・新聞部との共催で「初雁杯争奪文化部対抗ソフトボール大会」を開催。

（顧問）
高木宏先生
石田弘夫先生

新井康之
菅原信一郎
関　孝史
根岸　優
宮岡広明
村上敏之
（旧姓 西島）

野球応援（於 初雁球場　越ケ谷高戦）
左から新井団長、村上副団長、菅原

羽織袴姿で初めて
「川高節」を演じる新井団長

朝礼での村上副団長による
応援歌「奮え友よ」

発表会における「川高勝つ」

# 第三の役職「統制」を新設

**1978**

（昭和53年）

第19代

・前年度・第18代の意向により統制の役職が新設され、岡崎博次が初代統制に指名された。

・２月、第二回「日輪の下に」を本校体育館にて開催した。

（顧問）

石田弘夫先生

梅沢正寿先生

岡崎博次

神山正人

山内一浩

リーダー左側が山内副団長（野球応援）

次期団長が内定していた神山正人（左）と
春日部高校応援指導部の中村亨団長（右）
（第30回くすのき祭にて　昭和52年9月）
この1週間前に第1回「日輪の下に」が行われていた

# 部員バッヂ、新デザインへ

**1979**

（昭和54年）

第20代

・前年度新設された統制の役職を継承し、人見國男が第二代統制となった。

・部員バッヂを常岡幸夫が考案した新デザインへ変更し、今日まで受け継がれている。

・「日輪の下に」へ不動岡高が新たに参加して五校体制となった。

（顧問）

石田弘夫先生

梅沢正寿先生

石井和宏

常岡幸夫

人見國男

対面式　（昭和54年4月10日）

新部員バッヂ

# 「川高節」の羽織袴、再び登場

**1980**

（昭和55年）

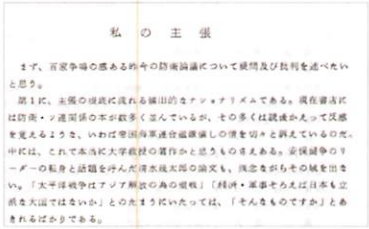
第21代

（顧問）
石田弘夫先生
梅沢正寿先生

位田雅章
加藤雅之
齋藤　浩
佐久間俊一
松本　朗
矢嶋　傑

・野球部が夏の大会で、準々決勝へ進出した昭和42年以来、13年ぶりに４回戦へ進出したが、川口工に２－４で敗れた。
・第16回演技発表会で位田団長が３年ぶりに羽織袴で「川高節」を演じた。以降、羽織袴を着用する団長がしばしば現れるようになった。
・演技発表会のパンフレットにおいて、第３代統制・矢嶋傑による「私の主張」が３ページ以上にわたって掲載された。以降、各代の統制による小コラム的な「私の主張」が演技発表会のパンフレットに掲載されるようになり、平成17年度の第41回（第19代統制・川村薫）まで続いた。

第16回演技発表会
パンフレット



私の主張

まず、百家争鳴の感ある昨今の防衛論議について疑問及び批判を述べたいと思う。

第１に、主張の根底に流れる軍国的なナショナリズムである。現在書店には防衛・ソ連関係の本が数多くならんでいるが、その多くは読後かえって反感を覚えるような、いわば帝国海軍連合艦隊礼讃の情を切々と訴えているのだ。中には、これで本当に大学教授の著作かと思うものさえある。安保闘争のリーダーの私自身と話題を沖ノ大清水敬太郎の論文も、残念ながらその域を出ない。「太平洋戦争はアジア解放の為の聖戦」「経済・軍事そろえば日本も立派な大国ではないか」とのたまうにいたっては、「そんなものですか」とあきれるばかりである。

矢嶋統制による渾身の「私の主張」
応援部とは関係なく、昨今の
防衛論議に関する内容であった。

１年時の野球応援「カットバセ」
右から位田、松本、（退部者）、常岡（２年）、矢嶋、人見（２年）

矢嶋統制による
とどろく凱歌

右：松本副団長
左：相田（２年）

# 大団旗、16年ぶりに新調

**1981**

（昭和56年）

第22代

（顧問）
石田弘夫先生
梅沢正寿先生

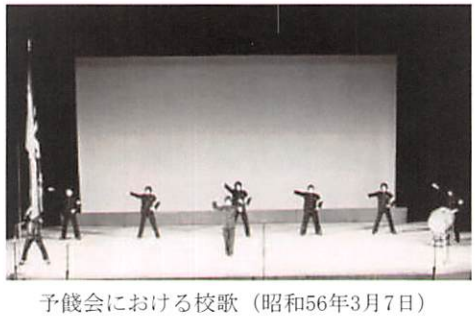
相田浩伸
野村照久
廣田直人

・廣田統制の発案により、予餞会の幕間で下級生が余興（演芸）を行った。以後、幕間の余興は慣例化し、今日まで続いている。

・昭和40年に製作した大団旗の老朽化に伴い、ＯＢの寄付金などにより大団旗を新調した。これまでの大団旗よりも一回り大きく、フラッグのサイズは縦２．７ｍ、横４．５ｍ、ポールの長さは６．０７ｍであった。

ご寄付下さったＯＢをお招きして行った新団旗のお披露目会
時の鐘の下にある「鐘撞堂下　田中屋」の焼き団子でおもてなしをした

前列左より　廣田統制、相田団長、野村副団長



予餞会における校歌（昭和56年3月7日）

相田団長による校歌（日輪の下に）

# トレーナー姿で野球応援

**1982**

（昭和57年）

第23代

（顧問）
石田弘夫先生
梅沢正寿先生

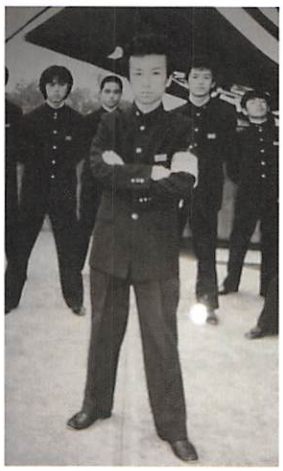
竹尾　淳
平井俊行
武藤信二
山尾和輝

・2月14日、第７回「日輪の下に」を本校体育館にて開催した。
・野球応援で従来の「ＫＯパンチ」（ダッシュＫＥＩＯ）に加えて、「コンバットマーチ」の使用も開始した。
・「川越高校応援団」トレーナーを作成し、１・２年生はトレーナー姿で夏の野球応援を行った。
・新部室棟の建設と同時に応援部が入っている旧部室棟の内外装を一新。
・くすのき祭２日目が台風で順延となったため、演技発表会も翌日の月曜日に行った。

前列左より 竹尾統制、平井団長、石田先生、梅沢先生、山尾副団長、武藤

応援団トレーナー
（写真は昭和58年夏の野球応援）

体育祭
平井団長（左）と山尾副団長



武藤信二

演技発表会　竹尾統制

# 応援歌「凌雲の志」誕生！

**1983**

（昭和58年）

**第24代**

・小出統制と中野統制の両名が、第二応援歌のリーダーテクニックを大幅に改良し、今日まで受け継がれている。
・前年に続き、１・２年生はトレーナーを着用して野球応援を実施。
・甲子園出場を決めた所沢商業高校の依頼を受けて、応援指導を実施。
・菅野統制部長作詞、音楽部顧問の小高秀一先生作曲により、第四応援歌「凌雲の志」を制作した。
・拍手の音を引き出すために、バックの白手着用をやめた。

（顧問）
石田弘夫先生
梅沢正寿先生

相田敏正
内沼一男
神田　隆
小出和則
斎藤秀樹
酒井雅史
島田　茂
菅野真二
中野広行
森下和哉

神田団長の指揮の下、校歌斉唱（野球応援）

第19回演技発表会
パンフレット

所沢商業高へ出向き、野球部の控え選手と
チアガールで構成された応援団に指導を行った
（左から、小出統制、島田副団長、菅野統制部長）

# 超大型洋太鼓を購入

**1984**

（昭和59年）

第25代

・２年生の時に、「川高應援團」の袢纏を作成した。
・宮島秀夫校長の英断により、他校に負けない超大型の洋太鼓を購入。
・校章入りの大型ヤカン（通称「初雁ヤカン」）を作成した。

（顧問）
石田弘夫先生
梅沢正寿先生

伊藤博之
大澤一隆
斉藤勇介
鈴木紀行
遠山晋一
細沼　修
前野純一
村木　隆

対面式（昭和59年4月10日）

「川高應援團」の袢纏姿の大澤団長

野球応援

初雁ヤカン

# 佐藤団長、羽織袴を部へ寄贈

**1985**

（昭和60年）

第26代

（顧問）
梅沢正寿先生
丸山哲夫先生

飯野　聡
佐藤武史
鈴木周史
堤　憲章
平野祐明
宮脇廣久
吉田洋泰

・五校応援団連盟に松山高校が加盟し、現在の六校体制となった。
・高校陸上部のインターハイ埼玉県予選の開会式が上尾運動公園陸上競技場で行われ、出場する高校生へエールを送り激励した。
・初雁球場で行われた夏の全国高等学校野球選手権埼玉大会において、川越初雁高校野球部の友情応援を行った。
・校章を入れた「川越高校応援団」トレーナーを新たに作成し、夏の野球応援で１年生が着用した。
・佐藤団長が自費で仕立てた羽織袴を引退時に部へ寄贈した。以降、今日までこの羽織袴が歴代の団長に受け継がれている。

第21回演技発表会
パンフレット

野球応援（於　初雁球場）

第21回演技発表会における佐藤団長の「川高節」
（於　川越高校体育館　昭和60年9月8日）
この羽織袴が今日まで受け継がれている

# 水泳大会激励応援を実施

1986

（昭和61年）

第27代

・９月、水泳大会で激励応援を初めて実施した。

・(校内の動き)くすのき祭に水泳部のシンクロナイズドスイミングが初登場。

（顧問）

梅沢正寿先生

丸山哲夫先生

関森　渉

福沢正勝

関森副団長

福沢団長

第22回演技発表会
パンフレット

# 渉外など５つの役職を新設

**1987**

（昭和62年）

**第28代**

・前年度･第27代の意向により、新幹部11名全員に役職をつけることとなり、渉外、旗手長、鼓手長、総務、新人監督の５つの役職が新設された。大河戸浩が初代渉外、平沼一則が初代旗手長、内田俊彦が初代鼓手長、宮川満が初代総務、杢保孝則が初代新人監督に指名された。（他の６名は団長、副団長、統制部長、統制３名）

・２月８日、第12回「日輪の下に」を本校体育館にて開催した。

（顧問）

梅沢正寿先生

丸山哲夫先生

五十嵐勝

岩本憲治

内田俊彦

大河戸浩

久保　健

鈴﨑卓哉

高橋　純

田村英紀

平沼一則

宮川　満

杢保孝則

野球応援

岩本団長による校歌（日輪の下に）

第23回演技発表会直前（昭和62年9月13日）

１年生の野球応援ではトレーナーを着用
（昭和60年7月）

# ファイティングマーチ誕生！

・次年度の第30代の節目を記念して、川高初のオリジナル応援曲「ファイティングマーチ」を制作した。

**1988**

（昭和63年）

**第29代**

（顧問）
梅沢正寿先生
丸山哲夫先生

赤塚晴大
池田　智
石丸敬人
海野和也
大室博光

対面式（昭和63年4月9日）

左から池田・大室・海野・赤塚・石丸（昭和63年7月）

２９代の５名は比較的家も近く結束力が強かった。休みの日は５人で麻雀をしたり、映画を観たり、余興の練習をしたり。汗臭い青春でした。

第13回「日輪の下に」各校幹部
（昭和63年2月14日）

右：ファティングマーチの制作に尽力した赤塚晴大（左は石丸敬人）

# ファイティングマーチ初実施

1989

（平成元年）

第30代

・前年度制作した「ファイティングマーチ」を初めて野球応援で実施。

・在籍３年間、夏の野球大会はすべて初戦で敗退した（川高史上初）

（顧問）

梅沢正寿先生

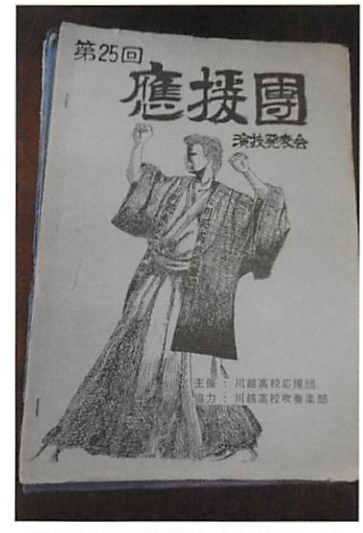
丸山哲夫先生

田中英治

松本和宏

１回戦での野球応援風景（於 初雁球場）

高校野球夏の埼玉予選開会式前の１コマ（於 西武球場）




第25回演技発表会パンフレット

# 女性の先生が顧問に

**1990**

（平成２年）

**第31代**

・「日輪の下に」では、先輩方の応援を頂きながら演技発表を実施。

・顧問の梅沢先生が定年。津田塾を卒業したばかりの若い女性の川田先生が新たに顧問になり、「美女と野獣集団」というサプライズが全校集会で話題に。

・下の代がいなかったため、引退時には１年生に次を託した。

（顧問）

丸山哲夫先生

川田万里子先生

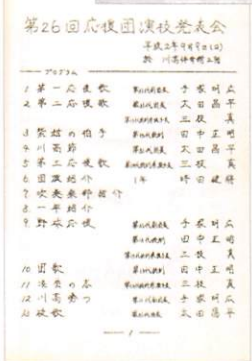
太田昌平

三枝　真

田中正昭

手塚明広

第26回演技発表会
パンフレット



人員難に苦労しつつも、知恵を絞って世代を繋げた代だった。

少数精鋭で挑んだ野球応援では、初雁球場での手塚副団長の名物学注やウェーブ等は今でも心に残っている。

# 17年ぶりの２年生幹部の代

**1992**

（平成４年）

第32代※

（顧問）
加藤光昭先生
石井啓之先生

青野直樹
島　信之
時田健將
山下　誠

・平成2年9月、１学年上が不在のため、入部５ヶ月で幹部となった。（第16代以来、17年ぶり）上級生不在で練習方法に悩む。
・平成4年夏、吹奏楽部の都合が合わず、川越女子高校吹奏楽部有志の協力により、野球応援を行った。

２年生の青野団長による川高節
夏合宿での体育館練習（平成3年8月25日）

３学年揃っての練習風景（平成4年　３年時）

※平成３（1991）年度は３年生不在
顧問は加藤光昭先生と石井啓之先生

# 大団旗、12年ぶりに新調

**1993**

（平成５年）

第33代

・2月14日、第18回「日輪の下に」を本校体育館にて開催した。

・昭和56年に製作した大団旗の老朽化に伴い、新たに大団旗を製作。フラッグは大きくなり縦３．２ｍ、横４．８ｍ、ポールの長さは変わらず、６．０７ｍ、竿頭を含めると６．５２ｍであった。

・（学校関連の動き）3月31日、川高生にとって不可欠の存在であった正門前の仙台屋が引っ越しのため閉店し、32年の歴史に幕を閉じた。

（顧問）

春日敬行先生

西野博先生

新井秀和

久津輪哲朗

小林拓実

長野　真

山中康弘

第29回演技発表会
パンフレット

くすのきの下に集合した六校応援団連盟幹部
第18回「日輪の下に」（平成5年2月14日）

# 発表会パンフをデジタル化

**1994**

（平成６年）

**第34代**

・野球部が夏の大会で４回戦へ進出したが、前年の甲子園準優勝投手の土肥義弘投手（後に西武ライオンズ入団）を擁する春日部共栄高校に敗れた。

・演技発表会のパンフレットを手書きからデジタル化に変更した。

（顧問）

春日敬行先生

西野博先生

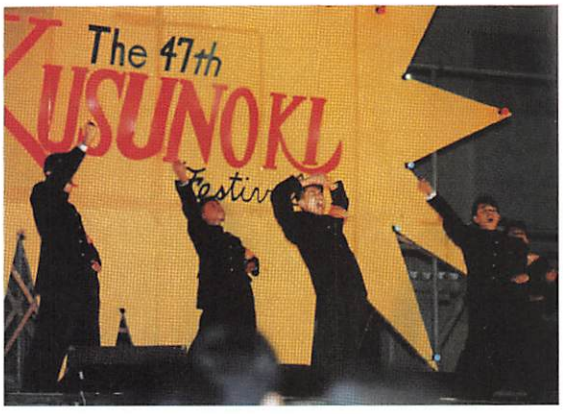
安達貴博

小川総一郎

秦健太郎

対面式（平成6年4月11日）

デジタル化された演技発表会パンフレット
写真掲載が可能となった




第47回くすのき祭の後夜祭における校歌
（平成6年9月11日）

第30回演技発表会における校歌（平成6年9月11日）

# 8年ぶりに総務が復活

**1995**

（平成７年）

第35代

（顧問）
春日敬行先生
杉崎一彦先生

小島　拓
篠田和邦
白川貴一
関根盛敏
東　健太

・第28代の初代以来、幹部役職として８年ぶりに総務が復活し、篠田和邦が指名された。
・早稲田大学応援部より「大進撃」「スパークリングマーチ」の使用許可を頂き、従来の「コンバットマーチ」とともに野球応援のメイン曲として使用を開始した。
・旧体育館で演技発表会を行った最後の年となった。
（新体育館建設の関係で、翌年は旧体育館が使用できなかった）

野球応援
（於　初雁球場　平成7年7月16日）

第31回演技発表会における校歌（平成7年9月10日）

陸上競技大会　東団長（平成7年10月5日）

# 応援部史上初の１人幹部

**1996**

（平成８年）

**第36代**

・村田晃が１人のまま幹部となり、第36代団長に就任した。
（３年生不在の年は２度あったが、１人は応援部史上初めて）

・夏の野球応援では早大本庄高校と対戦。両校とも早稲田大学の応援曲で応援を行った。試合は２対５で敗戦。

・改修工事に向けて体育館が使用できず、演技発表会を川越市民会館で実施。

（顧問）
杉崎一彦先生
福島佳克先生

村田　晃

第三十六代（一年部員）

加藤充徳
（川越市立野田中）
鼻の穴がでかい彼は川高の北島三郎として知られている。

村田　晃
（都幾川村立都幾川中）
おでこの広い彼は電車の中でアルシンドに声をかけられた。

全体写真

1年生の時は途中まで２人だった
（第30回演技発表会パンフレットより）

川越高校新聞　1996年10月

騎馬戦、文系が連勝

陸上競技大会の騎馬戦で
文系の大将を務めた村田団長
（「川越高校新聞」平成8年10月31日付）

くすのき祭

# 小学校の体育館で発表会を開催

**1997**

（平成９年）

**第37代**

・くすのき祭において部員の減少や体育館の改修工事という逆境の中、ＯＢ諸兄のご尽力により川越第一小学校体育館にて意地の演技発表会を開催。

（顧問）

杉崎一彦先生

福島佳克先生

伊藤雅一

田辺仁裕

第33回演技発表会における校歌（於 川越第一小学校）

くすのき祭

最終戦の試合後に野球部と

# 同期３名だけでのスタート

**1998**

（平成10年）

**第38代**

・平成9年9月、第38代幹部となった時点では下級生ゼロ。節目の第50回くすのき祭における演技発表会を見た1年生が１人入部した。

・平成10年、この年も体育館改修工事中のため、演技発表会は川越市民会館で実施した。

（顧問）

杉崎一彦先生

福島佳克先生

乙部　祥

杉山一志

松井　桂

応援部としての当時を思い出すと、幹部として出発した当初は下級生がおらず、3人と顧問の先生2人の計5名での活動でした。下級生がおらず来年の勧誘は覚悟をもってやらなければならないと思う中、「文化祭を見てやりたくなりました」と石川が入部してくれたことにとても勇気づけられたことが最初に思い出されます。翌年の新入生勧誘の際にも、1人また1人と入部を決めてくれる度に、「よし、このメンバー全員で活動して行くぞ」と気持ちが高まって行きました。

当時は幹部である自分たちが中心となって学校や生徒を応援しているつもりでしたが、改めて振り返ると自分達を支えてくれる下級生や先生方、ひいてはさらにそのメンバーを支えてくれた方々あってこそできた活動だったなぁと改めて感じます。

応援部員が応援されてどうする、という応援部員の矜持は今後も忘れてはならないと思いますが、支えてくれる方々がいることも忘れてはならないと改めて思わせてくれる振り返りでした。

（杉山　一志）

第51回くすのき祭

愛されろ応援団

くすのき祭を振り返って

川越高校新聞（平成10年11月20日付）に掲載された松井団長のインタビュー記事

「伝統は守りつつも、もっと活動の幅を広げ、学校に、生徒に、先生に愛される応援団になってほしい」と次の代への期待を述べている。
演技発表会は一般のお客様も多く、立見も出て大盛況だったと報じられている。

# 合宿・発表会を新体育館で実施

**1999**

（平成11年）

第39代

（顧問）
杉崎一彦先生
福島佳克先生

石川康平

・夏合宿を初めて新体育館２階の合宿所に宿泊して行った。
・演技発表会も初めて新体育館で実施した。
・くすのき祭で水泳部のシンクロの前に余興で演技発表会の告知を実施。
　その恩返しの意味もあり、水泳部の応援を初めて行った。
・創立百周年記念ＣＤの作成にあたり、応援歌のレコーディングに参加。

私は1年生の秋に野球部から転部というイレギュラーな形で応援部に参加させて頂きました。当時は1年生がゼロ。2名いらした3年生が引退され、一時的な休部から復活されたばかりの2年生3名の先輩とともに新たに部を立て直す時期だったのかと思います。1年生の最も辛い時期を団員として経験してこなかった私を温かくも厳しくご指導下さった2年生、先生、OBの先輩方のおかげでその後があったことに今改めて感謝申し上げます。

3年生の時に川越高校創立100周年記念CDが作成されることになり、口上も入れて応援歌のレコーディングがありました。ちょうど当時発声に悩みを抱えていて声がガラガラだったため、恥ずかしい声が音源として残ってしまった記憶があります。

また、初めて水泳部の応援を実施しました。くすのき祭のシンクロの前に余興で演技発表会の告知をやらせてもらえていたことや、部長その他私が個人的に仲の良かったメンバーがいたこともあり、何かしらの恩返しがしたいとの思いがあったのです。大会運営上のルールもあり現場で手探りしながらの応援でしたが、水泳部のメンバーに感謝してもらえたことがとても嬉しかったです。

（石川　康平）

幹部になって初めての演技発表会「日輪の下に」

ＯＢ先輩にバックでヘルプ参加して頂くことが多かったこの年代。１年生７名の入部のおかげで現役のみでステージを迎えることができた。

野球応援で、２年生７名・１年生１名（右側）が「自主的」に丸坊主に。
拒否した１名も最後は同級生の説得に負けました。

# 百周年記念式典で演技を発表

2000

（平成12年）

第40代

・第35代以来、５年ぶりに統制の役職が復活した。

・平成11年10月23日、創立百周年記念式典のアトラクションとして演技発表。

・創立百周年を記念して開催された春日部高校との野球対抗戦を応援した。試合は5対11で敗れる（於　大宮球場　平成11年11月13日）

・第25回「日輪の下に」を本校体育館にて開催した。

（顧問）

杉崎一彦先生

福島佳克先生

荒井　甫

木住野修平

木下真介

嶋田　勲

平　和浩

中野寛之

松村億人

「日輪の下に」での各校応援歌メドレーで指揮をする木住野副団長

創立百周年記念式典（平成11年10月23日）

野球応援
（於　熊谷公園野球場　対寄居高戦）

# 練習場所が理科棟から管理棟へ

# 2002

（平成14年）

第41代※

（顧問）
杉崎一彦先生
福島佳克先生

伊藤文人
及川　悟
迫　寛之
吉田健人

**平成13年（２年幹部時）**

・全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会ベスト８をかけた試合でサッカー応援を実施した。

・陸上競技部が関東大会に進出。茨城県ひたちなか市で開催された関東高校駅伝にて駅伝応援を実施した。

**平成14年（３年幹部時）**

・応援部の練習場所であった理科棟が老朽化による取り壊しのため練習場所を管理棟の屋上に変更した。

・早稲田大学応援部より「ダイナマイトマーチ」と「Ｆ１」（ファンファーレ１）の使用許可を頂き、野球応援での使用を開始した。

・野球応援のマーチ増加を受け、演技発表会における野球応援のプログラムを変更・拡大して披露した。

取り壊される理科棟に思い出を綴る

演技発表会にて
得点時の第一応援歌を再現

水泳応援

野球応援

※平成13(2001)年度は３年生不在
顧問は杉崎一彦先生と福島佳克先生

# 6年ぶりに全学年の部員が揃う

# 2004

（平成16年）

第42代※

・第38代以来、６年ぶりに１～３年生、全学年が揃った。

・平成５年に製作した大団旗の老朽化に伴い、新たに大団旗を製作。フラッグは大きくなり縦３．６ｍ、横５．４ｍ、ポールの長さは変わらず、６．０７ｍ、竿頭を含めたサイズも同じ６．５２ｍであった。

（顧問）

福島佳克先生

水野浩樹先生

大芝健太郎

秦　康之

松本　健

第29回「日輪の下に」

球技大会

※平成15(2003)年度は３年生不在
顧問は杉崎一彦先生と福島佳克先生

# 国民体育大会の選手団を激励

**2005**

（平成17年）

**第43代**

・３年生不在、２年生幹部のもとに入った世代。
当初は太田、川村、藤澤の３名であったが、秋に増田が加わり４名となった。
・第40代以来、５年ぶりに統制の役職が復活した。
・平成16年10月、第59回国民体育大会で本校を訪問した選手団を激励。
・2月13日、第30回「日輪の下に」を本校体育館にて開催した。

（顧問）
水野浩樹先生
内田憲弘先生

太田龍之介
川村　薫
藤澤良太
増田圭介

球技大会開会式にて　多数の下級生と共に
（平成16年6月）

駅伝応援にて　43代の４人が揃った初の応援（平成15年11月）

# 野球部が夏の大会でベスト16！

**2006**

（平成18年）

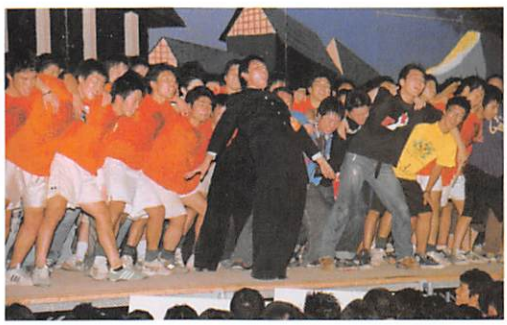
**第44代**

・野球部が夏の大会で５回戦へ進出し、ベスト16となった。
　（準々決勝へ進出した昭和42年以来、39年ぶりの好成績）
・水泳応援と駅伝応援を実施した。

（顧問）
水野浩樹先生
内田憲弘先生

木下裕介
清水亮祐

第42回演技発表会
団旗入場（旗手は木下団長）



くすのき祭

水泳応援

野球応援

# わずか２人で演技発表会を実施

2007

（平成19年）

第45代

・宮崎団長と２年生１人（後に退部）で演技発表会を実施した。

（顧問）

水野浩樹先生

内田憲弘先生

宮崎崇仁

野球応援

水泳応援

たった１人の下級生（２年生 後に退部）との練習

# ２年時に１人で発表会を実施

**2010**

（平成22年）

第46代※

（顧問）
内田憲弘先生
坂東正己先生

清水俊介

平成20年（１年時）

・２年生１人（後に退部）と１年生の清水俊介だけで演技発表会を実施。

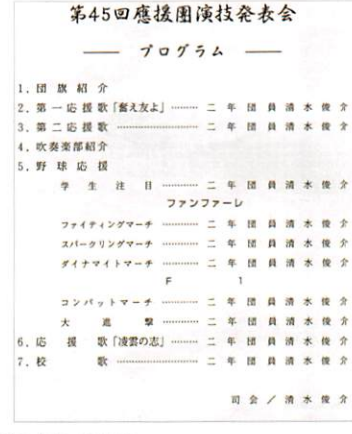
平成21年（２年時）

・清水がたった１人で「２年団員」として演技発表会を実施した。

平成22年（幹部時）

・１人幹部の清水団長の演技を見て、11人の１年生が入部した。

下級生時代から１人で
伝統を受け継いだ
第46代団長・清水俊介



第45回應援團演技発表会

―― プログラム ――

1．団旗紹介
2．第一応援歌「奮え友よ」…… 二年団員清水俊介
3．第二応援歌 …… 二年団員清水俊介
4．吹奏楽部紹介
5．野球応援
学生注目 …… 二年団員清水俊介
ファンファーレ
ファイティングマーチ …… 二年団員清水俊介
スパークリングマーチ …… 二年団員清水俊介
ダイナマイトマーチ …… 二年団員清水俊介
F 1
コンバットマーチ …… 二年団員清水俊介
大進撃 …… 二年団員清水俊介
6．応援歌「凌雲の志」…… 二年団員清水俊介
7．校歌 …… 二年団員清水俊介

司会／清水俊介

第45回演技発表会（平成21年9月6日）
２年生の清水俊介が全演目の司会とリーダーを１人で務めた

川高唯一の
応援部員として
球技大会に臨む
（平成21年・２年時）

※平成20（2008）年度は３年生不在
顧問は水野浩樹先生と内田憲弘先生

※平成21（2009）年度は３年生不在
顧問は内田憲弘先生と峰岸弘之先生

# 24年ぶりに鼓手長が復活

**2012**

（平成24年）

第47代※

（顧問）
坂東正己先生
柳澤有一郎先生

浅海裕一郎
小澤一彰
齋藤章成
坂本悠輔
竹田広樹
山口凌士
吉村紀輝

・平成22年9月、第28代の初代以来、24年ぶりに第47代（当時2年生）の幹部役職として鼓手長が復活し、齋藤章成が指名された。
・第43代以来、６年ぶりに統制の役職が復活した。
・平成24年2月12日、第37回「日輪の下に」を本校体育館にて開催した。
・在籍３年間、夏の野球大会はすべて初戦で敗退した。
（第30代以来、23年ぶり川高史上２度目）

第47回演技発表会（平成23年9月4日）
３年生不在のため、第47代の２年生幹部らがリーダーを務めた

球技大会

※平成23（2011）年度は３年生不在
顧問は坂東正己先生と権田拓弥先生

# 夏の野球大会で全校応援を実現

**2013**

（平成25年）

**第48代**

・夏の全国高校野球選手権大会、初雁球場における第２回戦（朝霞西戦）で全校応援を実施。生徒会に働きかけて連携し、顧問の坂東先生のご支援を受けて実現にこぎつけた。この取り組みの大成功を機に野球応援に駆け付ける川高生が激増した。

・フジテレビ「夏☆１グランプリ　天下一部闘会　高校生キングオブパフォーマー決定戦！！」に出演し、「キングオブ部活動～高校生たちの熱い夏～」として放送された。

（顧問）
坂東正己先生
柳澤有一郎先生
石川智之先生

飯島祐佳
岡田隼弥
岡部飛登志
川合雅樹
川原吉広
小村拓未
澤田龍一
星野航佑
渡辺啓介

陸上競技大会

入学式

フジテレビ「天下一部闘会」に出演
（平成25年9月1日放送）

# 野球応援に「間接コール」導入

**2014**

（平成26年）

第49代

・昭和31年製作の初代団旗から数えて六代目となる大団旗を新調した。フラッグ、ポールともに平成16年製作のものと同一サイズ（フラッグ：縦３．６ｍ、横５．４ｍ、ポール：６．０７ｍ、竿頭を含めて６．５２ｍ）とした。
・野球応援用マーチに「間接コール」を導入した。
・昭和52年の竹寺合宿以来、37年ぶりに夏合宿を校外（新潟県）で実施。
・蔵づくりの街並みで演技披露を行った。

（顧問）
坂東正己先生
柳澤有一郎先生
石川智之先生

阿部康太郎
伊東甲斐
尾崎拓人
恒川直輝
藤田絢哉
松本優一
六川航平

節目となる第50回演技発表会　野球応援メドレー

くすのき祭

野球応援（於 熊谷公園野球場）

# 小江戸川越マラソンを応援

**2015**

（平成27年）

**第50代**

（顧問）
坂東正己先生
柳澤有一郎先生
倉繁章先生

船山大睦

・平成26年9月、「川高初雁の森」第３回植樹祭に参加し、校歌と第一応援歌の指揮を務めた。以降、今日まで毎年参加を続けている。
・平成26年11月、小江戸川越マラソン（川越市民マラソン）に応援参加。
・夏の全国高校野球選手権大会、初雁球場における第２回戦（川越東戦）で２年ぶりに全校応援を実施。１塁側から外野席まで全校生徒1,100人とＯＢ、保護者が埋め尽くした。
・第51代幹部の役職を決定するにあたり、51代の人数が多かったため、新人監督を設けることとした。

８月に行った新潟での合宿。最終日に山の上から行ったエール

部活動引退直後、川高生による胴上げ

2015.7.14 朝日

川越対決に観客5000人

川越応援部、大声援仕切る

スタンド

地元対決となった川越－川越東戦は、前日の日曜よりも1千人ほど多い、約5千人の観客が詰めかけた。このうち、8割ほどが球場近くの川越の大応援団。一塁側から外野席まで全校生徒約1100人とOB、保護者が埋めつくし、大声援を送り続けた。

この「人海」を仕切ったのは32人の応援部。グラウンドを背に、黒い詰め襟の学生服姿で、時折にぎりりと並び、声援や制服りを掛け、名物にも「まだ負けてないぞ！」「それっ、ウオー！」と鼓舞した。試合後、第50代応援団長の船山昌睦さん（3年）は「仲間を勝たせることができず、我々も悔しさでいっぱいです」と話した。＝川越初雁

外野席を埋めた川越の大応援団。一塁側（右上）までびっしり＝川越初雁

全校応援を報じる新聞
「仲間を勝たせることができず、我々も悔しさでいっぱいです」という船山団長のコメントが掲載されている（「朝日新聞」平成27年7月14日付）

# 29年ぶりに新人監督が復活

**2016**

（平成28年）

**第51代**

・第28代の初代以来、幹部役職として29年ぶりに新人監督が復活し、岡田祐太と神林直希の２名が指名された。
・アトレ川越にて演技披露。　・「アトレの学園祭」にて演技披露。
・富士見市立勝瀬中学校にて技披露「フェスタ勝中」。
・小江戸川越マラソン応援。　・「110番の日」にて演技披露。
・中高生部活応援マガジン「ヒーローインタビュー」掲載。
・「寺フェス川越in蓮馨寺」にて演技披露。
・静岡県高等学校応援団フェスティバルに六校応援団連盟として出演。
・インターハイ結団式にて六校応援団連盟として演技披露。

（顧問）
坂東正己先生
柳澤有一郎先生
倉繁章先生

秋元信輝
阿部拓馬
大野　剛
岡田祐太
岡安拓実
神山登輝
神林直希
北原大知
鈴木哲太
原　充治
丸山龍太
宮田直紀

部員総数は引退（平成28年9月）の時点で43人、下級生は31人であった

「寺フェス川越in蓮馨寺」に出演、演技披露

球技大会

湯沢での夏合宿　「川高勝つ」の練習風景

野球応援（於 初雁球場）

# 応援部史上最大の幹部17名

**2017**

（平成29年）

第52代

・歴代最大規模の人数 幹部17人。

・5月18日、ＮＨＫのＥテレ「＃ジューダイ ガチ部活 応援部 今なぜ硬派!?」へ出演した。

・7月17日、テレビ埼玉の「高校野球ダイジェスト」へ出演した。

・夏の全国高校野球選手権埼玉大会ベスト32（11年ぶりに４回戦へ進出）

・ラグビー応援。全国高等学校ラグビーフットボール大会埼玉予選西部地区優勝。

・ここ数年、校歌の最後の部分をためて変則的に歌うようになっていた歌い方を楽譜通りに戻した。

（顧問）
坂東正己先生
倉繁章先生
伊藤英治先生

新井優希
安藤稜隼
岡安幹太
岸田慎司
小島俊介
笹本和志
佐藤　克
清水康太郎
白木沢純平
内藤夏月
中野新太朗
平生志遠
松本航太
目黒翔太
矢部優生
矢野颯大
山田晋平

野球応援　紫に染まるスタンド席
（於 上尾市民球場 平成29年7月17日）

ＮＨＫ「＃ジューダイ」特集の様子
（平成29年5月18日放送）

史上最大規模の応援団 高校野球埼玉大会開会式にて

# 川高応援メドレー誕生！

## 2018

（平成30年）

第53代

（顧問）
坂東正己先生
倉繁章先生
小貫央嗣先生

麻生武希
大友憲幸
黒田悠馬
郡山結人
木場陽一朗
小松将大
佐藤拓弥
島岡真夢
島崎優太
田端琉斗
茶山楓太
宮本怜里
山田将太

・ＯＢの菅野真二（第24代・昭和59年3月卒）制作の「Ｗｉｎｎｅｒ川高」と「ＢＬＡＺＩＮＧ」、吹奏楽部ＯＢで吹奏楽部顧問の長島一樹先生により制作された「ライトニングマーチ」、軽音楽部ＯＢで音楽家の山田隆広氏により制作された「スパイラル」とファンファーレ、そして従来の「ファイティングマーチ」、これらオリジナル応援曲のみで構成した「川高応援メドレー」を誕生させた。
・2月11日、第43回「日輪の下に」を本校体育館にて開催した。
・35年ぶりの新応援歌として、第五応援歌「雄志の一閃」を制作した。

テレビ埼玉の「高校野球ダイジェスト」でオリジナル応援への取り組みが特集された（平成30年7月13日放送）

第54回演技発表会で新応援歌の第五応援歌を初披露した（於 川越高校体育館 平成30年9月2日）

野球応援（於 大宮球場 平成30年7月14日）

# 応援歌物語

選手健闘を祈って応援歌！（於 上尾市民球場　平成30年7月8日）

## 川越高校の校歌・応援歌・応援曲等一覧

| No | 曲名 | 制作年 | 作詞者 | 作曲者 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 校歌 | 明治42年<br>(1909) | 古谷　喜十郎<br>(本校教諭) | 内田　粂太郎<br>(くめたろう) | |
| 2 | 野球応援歌(その1) | 大正13年<br>(1924) | (不詳) | (不詳) | ※現在は歌い継がれていない。 |
| 3 | 野球応援歌(その2) | 大正13年<br>(1924) | 渡辺　和<br>(川越中学5年生) | (不詳) | 渡辺氏の詞を飯田湖春先生が補筆。<br>※現在は歌い継がれていない。 |
| 4 | 野球応援歌(その3) | 大正13年<br>(1924) | (不詳) | (不詳) | ※現在は歌い継がれていない。 |
| 5 | 昔古城の | 昭和21年<br>(1946) | 新井　利一<br>(昭和20年3月卒) | (不詳) | 新井氏は作詞当時は第一高等学校(現・東京大学教養学部)の学生。<br>※現在は歌い継がれていない。 |
| 6 | 奮え友よ | 昭和26年<br>(1951) | 山本　明<br>(川越高校3年生) | 牧野　統<br>(本校教諭) | |
| 7 | 生かせ伝統 | 昭和26年<br>(1951) | 田中　正雄<br>(本校教諭) | 牧野　統<br>(本校教諭) | ※現在は歌い継がれていない。 |
| 8 | 凱歌 | 昭和26年<br>(1951) | 近藤　鉄城<br>(本校教諭) | 牧野　統<br>(本校教諭) | 近藤先生は後の応援部初代顧問。 |
| 9 | 川高節 | 昭和40年<br>(1965) | 井口　敏<br>(応援部3年生) | (不詳) | 原曲は「日大予科節」(昭和15年頃制作、作曲者不詳)と思われる。 |
| 10 | 初雁節 | 昭和44年<br>(1969) | 本橋　孝之<br>(応援部2年生) | (不詳) | 原曲は福岡県民謡「炭坑節」。<br>一番の歌詞は作詞者不詳。本橋は昭和46年の2年時に二番の歌詞を 作詞した。 |
| 11 | 第二応援歌 | 昭和44年<br>(1969) | (不詳) | (不詳) | 制作年の昭和44年は熊谷高校より頂いた年。<br>一橋大学の応援歌「東都の流れ」を曲・詞ともにアレンジしたもの。 |
| 12 | 第三応援歌 | 昭和44年<br>(1969) | (不詳) | 田村　虎蔵 | 原曲は唱歌「花咲爺」。<br>以前から川高生の間で歌われていたが、昭和44年に応援歌として採り入れた。 |
| 13 | 団歌 | 昭和52年<br>(1977) | 関　孝史<br>(応援部3年生) | 永井　建子 | 原曲は軍歌「歩兵の本領」(明治44年制作)で、「歩兵の本領」の原曲は<br>永井建子作曲の軍歌「小楠公」(明治32年制作)。口上も関孝史が作成。 |
| 14 | 凌雲の志<br>(第四応援歌) | 昭和58年<br>(1983) | 菅野　真二<br>(応援部3年生) | 小高　秀一<br>(本校教諭) | 小高先生は音楽部顧問。本校の卒業生(昭和34年3月卒)でもある。 |
| 15 | ファイティングマーチ | 昭和63年<br>(1988) | 第29代部員(3年生) | 吹奏楽部 | 次年度の第30代の節目を記念して制作した川高初のオリジナル応援曲。 |
| 16 | Winner川高 | 平成30年<br>(2018) | 第53代部員(3年生) | 菅野　真二<br>(昭和59年3月卒) | 菅野は第24代応援部OB。菅野作成の詞を第53代部員が大幅に修正。 |
| 17 | BLAZING | 平成30年<br>(2018) | 菅野　真二<br>(昭和59年3月卒) | 菅野　真二<br>(昭和59年3月卒) | 菅野作成の詞を第53代部員が若干修正。 |
| 18 | ライトニングマーチ | 平成30年<br>(2018) | 第53代部員(3年生) | 長島　一樹<br>(本校教諭) | 長島先生は吹奏楽部顧問。本校の卒業生(平成7年3月卒)でもある。 |
| 19 | スパイラル | 平成30年<br>(2018) | 第53代部員(3年生) | 山田　隆広<br>(平成11年3月卒) | 山田氏は川越市在住のピアニスト・作曲家。 |
| 20 | ファンファーレ | 平成30年<br>(2018) | － | 山田　隆広<br>(平成11年3月卒) | |
| 21 | 雄志の一閃<br>(第五応援歌) | 平成30年<br>(2018) | 第53代部員(3年生) | 杉山　大地<br>(平成29年3月卒) | 杉山氏は作曲当時は吹奏楽部3年生。 |

宮本副団長による「奮え友よ」の指揮
(第54回演技発表会　平成30年9月2日)

## 応援歌物語①

### 奮え友よ

川越高校応援歌の校内募集が行われたのは昭和二十六年、私が三年生の時だった。

この募集に応募した動機を思い出してみると、その賞金だったような気がする。軽い山登りや小旅行が好きだったが、太平洋戦争末期の空襲で家を焼かれ、「焼け出され」として川越にきていた我が家の当時の状況では、小遣いも充分になかった。この年の春休みに野辺山に出かけたときも、安宿に泊まるための米を持参し、歩ける所は歩き、トラックに乗せてもらうという、いわばバックパック旅行だった。次の夏休みには八ヶ岳登山をと思っていたが、資金不足の状況で実現できるか心配していたときに、この募集が掲示された。

私自身、詩作に興味があったわけでもなく、また母校応援歌の作詞者として名を残そうなどという気持ちでもなかったことは事実で、きわめて現実的な理由だった。

作詞そのものにあまり苦労した記憶はない。とにかく元気のよい文句の中に、「初雁」「武蔵野」の言葉を入れてということでできあがったのが「奮え友よ」だった。

七月初旬の暑い校庭で入選作品の発表があった。一等該当作品がなく、二等の「奮え友よ」が選ばれて、賞金を頂いた。一番しか作らず、自分自身若干物足りなさは感じているが、牧野統先生には良い曲を作って頂いたと感謝している。この賞金のおかげで、夏休みの八ヶ岳登山が実現できたのがうれしかった。

（百周年記念誌「くすの木」より）

作詞者・山本明氏

（昭和二十七年三月卒）

70年近く歌い継がれている「奮え友よ」
（於 大宮球場 平成30年7月14日）

## 応援歌物語②

### 第二応援歌

昭和三十五年に始まった熊谷高校との交歓会は、四年後の第五回を終えた時点で早くもマンネリ化が叫ばれ出した。また、クラブへの加入が自由とされている熊高側にはクラブ非加入者がいたため、同じクラブどうしの交歓というスタイルの交歓会に全員参加することが不可能となっており、このことも毎年問題視されていた。そして昭和四十三年になると、川越高校新聞が第九回の交歓会を「無意味な年中行事」の大見出しで報じるまでになってしまった。

両校の取り決めにより、翌四十四年六月十一日に熊高で行われた第十回で一応実施の期限が切れることになっていた。そこで、川越高校新聞では、マンネリと批判されてきた交歓会について、川高生五三九人を対象にアンケートを行い、その結果（回収率五十七％）を六月二十八日付の紙面で組んだ「交歓会を考える」という特集記事の中で発表した。それによれば、「今回の交歓会は開いただけの価値があったか」に対しては、四七・七％が「なかった」と回答し、「あった」は二四・三％、「わからない」が二八・〇％であった。また「何となく参加した」と言える生徒が過半数を占めており、多数の生徒にとって無意味な行事であったことが示されていた。

そして、六月十八日にはクラスごとに「今後、交歓会を続けるか廃止するか」についての討議が行われた。その結果を持ち寄って本校全体の討議会が開催されたが、交歓会を「続ける」という意見は全生徒の四二・四％、廃止するという意見は五七・六％であった。この結果を受けて、熊高側と協議した結果、この年の第十回をもって終了することが正式に決定した。

交歓会の終了にあたり、両校応援部の間では互いの演技を交換し合おうということになった。この時三年生であった金子肇によれば、最後の交歓会の日に、熊高の中庭で同校の応援団員と次のような会話を交わしたという。

「これで交流がなくなるのは寂しいよな。」

「何か思い出にならないかな。」

「撃滅の拍手いいな。くれよ。」

「いいよ。そしたら、応援歌をマネ

させろよ。」

熊高の第二応援歌と本校の「撃滅の拍手」の交換は、この時すぐ本決まりとなった。そして第二応援歌の導入に向けて、リーダーテクニックと歌詞は、最後の交歓会で熊高にいる時間の中で三年生から一年生まで全員で必死に覚えた。

「イッキョウって、どんな字を使っているの？」

「便宜的に〃一挙〃にしているが、状況により〃一強〃も使い分けている。」

「詳細は不明だが、本来はヒトツバシの一橋だと思う。先輩の誰かが持ち込んだと思う。」

本校には左手を腰に当て、右手を突き出す演技がなかったため、熊高がやっていた全くそのままのリーダーテクニックを採り入れた。それは、右手の人差し指と中指の二本を真っ直ぐ伸ばしたまま突きを行うという型で、昭和五十年に野球応援でKOパンチ（ダッシュKEIO）の使用を開始した時もこの突きを採用した。昭和五十八年に小出統制と中野統制の両名がリーダーテクニックを大幅に改良した際に、握りこぶしで突く一般的なスタイルへ変更した。

導入時の応援歌は「奮え友よ」だけであったため、本校でもこの応援歌を「第二応援歌」と呼ぶことにした。熊高では現在も使用しているが、歌詞は全く同じでありながら、両校が歌うメロディにはいつしか違いが生じるようになった。

元祖第二応援歌の突き
（昭和57年 指揮は竹尾統制）

そもそもこの応援歌は、一橋大学の応援歌をアレンジしたものであった。熊谷高校卒業後、一橋大学の応援部に入部した応援団OBが、同大学の応援歌「東都の流れ」の歌詞と曲調をアレンジしたものを「第二応援歌」として母校へ提供したという。

「東都の流れ」は大正九年、当時旧制東京商科大学予科であった一橋大学が、ボートレースの応援で使用する端艇部応援歌として制作したオリジナル曲である。作詞は当時一橋大生であった大友春一（大正十二年学部卒）、作曲は行進曲の大家、瀬戸口藤吉。瀬戸口は「守るも攻むるもくろがねの」で始まる「軍艦行進曲（軍艦マーチ）」を明治三十三年に作曲するなど、多くの行進曲を手掛けて「日本行進曲の父」と讃えられている。

「東都の流れ」

東都の流れ千年の
　隅田をまもれ一ツ橋
あゝその高き
　名を惜しむ五尺の男児（おのこ）が
ひとたび立たば
　とどめん力あるべしや
一橋（いっきょう）一橋
　いざふるえ
一橋　一橋
　いざふれふれふれ
一橋　一橋
　いざふるえ
隅田は永遠（とわ）に吾がものぞ
　隅田は永遠に吾がものぞ

「一橋歌集」（一橋大学応援部歌集編纂会 昭和三十四年発行）より

## 応援歌物語③

### 第三応援歌

唱歌「花咲爺」のメロディに乗って「氷川神社の神主が・・」と始まるこの替え歌は、昔から川高生の間で歌われていた愛唱歌であった。昭和四十四年、馴染みのあったこの歌を応援歌として採り入れ、演技発表会で行った。

「花咲爺」の替え歌は本校のみならず、全国津々浦々で広く応援歌として歌われているようだが、そもそもこの替え歌の発祥の地はどこなのだろうか。ひろしま郷土史研究会が昭和五十七年に発行した機関誌「ふるさとひろしま」第四号に「野球応援歌『宮島さん』誕生由来記」というのが書かれている。それによると、明治三十年頃、現在の広島県廿日市市地御前（じごぜん）で、少年たちがハワイの移民帰りの人に野球を教わり、以後この地区では野球が盛んに行われていた。明治四十年頃に他町村との対抗試合で「いつも地御前が勝ち勝ち勝ち勝ち」と歌われるようになって原型ができ、明治四十四

年に「宮島さんの神主が・・」の歌詞が冒頭に付け加えられたらしい。

「宮島さん」とは、日本三景の一つ、厳島神社がある安芸の宮島のことで、廿日市市地御前はその宮島の対岸に位置する。この地区で育った人が高校野球の強豪校、名門・県立広島商業高校に入学して、明治四十五年から同校の野球応援歌として使用し始めたという。

宮島さんの神主が
おみくじ引いて申すには
いつも広商は
勝ち 勝ち 勝ち 勝ち

この替え歌はプロ野球、広島カープの応援歌としても知られているが、カープでは山本浩二が監督に就任し、広商OBの大下剛史と三村敏之がコーチとして入閣した平成元年から使用している。前年夏の甲子園で広商が六度目の優勝を成し遂げたことにあやかり、カープの応援団が地元出身の首脳陣を盛り立てるために採り入れた。

本校の身近な所では熊谷高校も第五応援歌として歌っており、その歌詞は本校とほとんど同じである。また甲子園の常連校、沖縄県の興南高校の場合は、

もしも興南負けたなら
電信柱に花が咲く
暑い沖縄　雪が降る
雪が降る

となるそうだ。

「花咲爺」の歌は明治三十四年に作られ、作曲者の田村虎蔵氏は、他にもあの有名な「金太郎」や「一寸法師」も手がけている。余談であるが、慶應義塾大学応援歌「若き血」の作詞作曲者・堀内敬三氏は、この田村虎蔵氏の弟子である。

第三応援歌後の「川高恒例、三三七拍子」
（城西川越高との親善試合　於　初雁球場　平成29年6月21日）

## 応援歌物語④

### 凌雲の志

すべては一枚のレコードから始まりました。それは、東京六大学各校の校歌と第一応援歌が収録された「六旗の下に」というレコードでした。誰かが部室に持ってきていたのをカセットテープにダビングして、暇さえあれば聴いていました。昭和五十七年、二年生の時のことですが、三年生はすでに引退されていたと思います。私はすぐに各校の歌に魅了され、六大学の応援団に入りたいという思いがどんどん強くなっていきました。そして何より、我が川越高校にも「紺碧の空」や「若き血」のようなテンポが良く、力強い応援歌が欲しいと思うようになったのです。「奮え友よ」は今でこそいい歌だと感じていますが、当時は六大学の応援歌に比べると、テンポも遅く迫力に欠けると思っていました。

スピーディでカッコいい「第四応援歌」。いつしか私はそのことばかりを考えるようになりましたが、欲しいと言っても、簡単に作れるわけではないので、適当な歌詞を適当なメロディで六大学の応援歌風に口ずさむという日々をただ送っているだけでした。いくつか作った自称「第四応援歌」のうち、一つだけ私の歌声でカセットテープに録音されて残っていました。その歌詞は次の通りです。

第四応援歌「猛き闘志」

猛き闘志　今こそ極まる
熱涙溢れて　競う若人
伝統極むる　川高の
意気と熱とを　見せる時
誓う誉れの　優勝旗
おお　川高　川高
誉れある　我ら古豪

どのような経緯でこのような歌詞になったのかは全く覚えておりませんが、この短い歌詞の中に「極まる」が二回も出てきています。しかも二回目の「極まる」はなぜか「極むる」と表現しています。また「誉れ」も二回使っていますが、その意図や趣旨は今となっては私自身も全くわかりません。そしてこの歌詞は、昭和二十六年に「奮え友よ」とともに三等で入選した「生かせ伝統」の歌詞に非常に酷似しています。「生か

せ伝統」はこの度の部史編纂活動で初めてその存在を知りましたから、模倣したとも思えないのですが、実にそっくりです。

この当時、団長は校歌、副団長は「奮え友よ」というのはもちろんですが、統制は第二応援歌や団歌の指揮を務めるという感じがありました。私は統制部長、小出と中野が統制でしたから、両方やってしまうわけにもいかず、どちらを担当しようか迷っていました。私はコロッケや清水アキラに代表されるものまね芸は大好きですが、応援におけるモノマネやパクリは大嫌いでした。ですから、第三応援歌や「初雁節」のような替え歌は好きにはなれませんでしたし、野球応援でダッシュKEIOやコンバットマーチを行うことに、すごく抵抗がありました。川高のような歴史と伝統ある名門校は、川高ならではの川高独自の応援を行うべきだと考えていたのです。

入学間もない私は、統制だった廣田直人先輩の第二応援歌に心を打たれて入部の意志を固めたため、入部当初は「奮え友よ」より第二応援歌の方が好きでした。ですが、第二応援歌は元々一橋大学の応援歌だったと先輩に聞かされてからは、心が急に離れてしまいました。また小出と中野が二人で相談して、第二応援歌のリーダーテクニックを大幅に改良したこともあり、私はこの歌を二人に譲ることにしました。「俺には団歌がある！」団歌のメロディは好きでしたので、正直この思いでいました。そして、団歌をカッコよく演じようと、口上やリーダーテクニックをよく一人で練習していました。

ところが、三年生になったある日、衝撃的な事件が起きました。家のテレビでたまたまついていた「明るい漁村」を何気なく観ていた時のことです。これはNHKのドキュメンタリー番組で「明るい農村」というのもありました。圧倒的に放送回数が多い「明るい農村」の方が有名でしたが、その時ついていたのは「漁村」でした。そして何と、テレビに映し出されていた漁師のオジさんたちが船の上に座り込み、全員で団歌のメロディの歌を歌い出したのです。今にして思えば、それは団歌の原曲の軍歌「歩兵の本領」だったのかもしれません。それまで私は団歌が替え歌だとは夢にも思っていませんでしたので、漁師たちが手拍子しながら歌う姿は、とてつもなくショッキングな光景でした。

「替え歌だったのか・・・」私の団歌への思いが物凄いスピードで薄らいでいき、演技発表会で団歌をやるのがとても嫌になりました。替え歌の指揮を務めて引退するのは絶対に嫌だと心の底から思いました。「第四応援歌だ！」これを作るしかないという熱い思いが強烈に湧き起こってきたのです。

「凌雲の志」を生んだレコード
(昭和50年10月発売 KING RECORDS)

そこで、誰に相談するわけでもなく、勝手に自分一人で盛り上がり、新応援歌の制作に動き出しました。まず作詞を同じクラスにいた文芸部部長の菅沼拓三君に依頼しました。しかし、彼が書く歌詞は「築け、我らが金字塔！」など、読んでいる方が恥ずかしくなるようなものばかりでした。私は何度も書き直しをお願いしましたが、「これはいい！」と思える歌詞が全くできてこなかったので、早慶の応援歌のような歌詞が書けないものかと強くお願いしたところ、単なる早慶や六大学のコピーを書くことはできないと筆談で訴えられ、匙を投げられてしまいました。そのため、やむなく私が自分で作詞することにしました。

そして作詞をするなら、作曲も自分で真剣にやってみようとチャレンジしましたが、どうしてもどこかで聞いたことのある曲調になってしまうため、作曲は断念して音楽の小高秀一先生に依頼しました。小高先生は何ら躊躇することなく、すぐに快諾して下さいました。

作詞は「猛き闘志」のように応援歌風の言葉を単に組み合わせるのではなく、自分の思いをしっかり表現するよう必死に考えました。特に時間をかけて考え続けたのが、一番の出だしの歌詞です。早慶のようにこを歌のタイトルにしようと思っていましたので、かなり悩みました。実は当時の私は、県下一の進学校である浦和高校に負けてなるものかという思いが強く、「川高生は何事においても常に目標を高く置き、それに向かって突き進んでいかなければならない」という勝手な理想を抱いていました。この思いをうまく表現してくれる言葉を探すため、国語辞典や漢和辞典、ことわざ辞典などを毎日読んでいました。そして、やっと

見つけたのが「凌雲の志」（りょううんのこころざし）だったのです。これは「立身出世をめざす志」「高い地位にのぼろうとする志」「雲を凌ぐほどの高い志」「徳を磨き立派な人間になろうとする心」という意味でしたので、正に探し求めていた言葉だと思いました。そして私はこの言葉に触れた時、「その志や心に恥じない、相応しい人間になろうと努力精進する気持ちも合わせて持つことが大事」「その気持ちは人に言いふらすような軽いものであってはならず、己の決意を胸に目標に向かって一途に邁進することが理想」という思いになりました。そして、その思いを込めてできたのが「凌雲の志を秘め競う」という出だしの歌詞でした。しかし、「こころざし」では長くて言いにくいので、「大志を抱け」同様に勝手に「し」と読ませることにしました。

「凌雲の志」はいい言葉ではありますが、応援歌のタイトルとしては適していない気がして、正直自信はありませんでした。

またもう一つこだわったのは、「（陸の）王者・慶應」、「覇者・早稲田」に匹敵する別称を川高に付けることでした。「凌雲の志」を見つけた時と同様に色々と探したのですが、特に斬新なものはありませんでした。結局、六大学の第一応援歌で使われておらず、わかりやすい「勝者」に決めました。慶応は王者を一回、早稲田は覇者を二回、歌の中で使っているので、我々は勝者を三回使うことにしました。そして最後は、「カワコーといっても、川越工業ではありません。あしからず！」の思いを込めて、「川越高校」とフルネームで締めることにしました。

こうして何とか出来上がった歌詞をすぐに小高先生へお持ちしましたが、作曲にはそれほど時間はかからなかったと思います。先生が私の前で自ら歌って披露して下さったのですが、その時の歌声を文字にすると、「りょおぉ～うんのしおぉひめきぃい～そお♪」という感じで、力強いのですが、少しゆったりとした、テンポの遅い印象でした。

「これではまずい！」と思い、応援部としてはとにかく速く歌うようにしました。当時は吹奏楽部に演奏してもらうことなどはめったにありませんでしたので、楽譜を意識する必要はなかったのです。ところが、この新応援歌を全川高生の前で披露することになり、しかも吹奏楽部が演奏してくれるというのです。当日は簡単な打ち合わせ程度で特にリハーサルもしませんでした。その結果、いざお披露目の時は、校歌同様に「moderato（中ぐらいの速さで）」と書かれている楽譜通りに演奏する吹奏楽部と速く歌う我々のテンポが大きくズレてしまい、川高生の失笑を買いました。

また、このお披露目に先立ち、顧問の石田弘夫先生の指示で、新応援歌の歌詞を模造紙に書いて、職員室に貼り出すことになったので、私は出入口の上の目立つ場所に貼りました。後日、石田先生に先生方の反応をお聞きすると、「歌詞が全体的に古めかしい」「今風の言葉をもっと並べた方が良かったのでは」といった声があがり、評価は良くなかったようでした。

さて、周囲の評価はどうであれ、私にとって大事なのは演技発表会です。発表会におけるこの歌のテーマは「スピード」でした。とにかくテンポの良い、力強く迫力ある応援歌であることを示そうと思いました。吹奏楽部が演奏してくれるわけではありませんので、我々だけで思う存分速く歌うことができますが、歌そのものをアップテンポで歌うだけではなく、私は「凌雲の志」のすべてをスピード感溢れるものにしようと目論んだのです。

つまり、司会者に紹介された私は、勢いよくパッと出てパッとやってパッと帰るという演出をしようと考えました。これは、スポ根野球漫画の金字塔「巨人の星」に登場するスター選手、花形満がスポーツカーをぶっ飛ばして野球場にやって来て、特大のホームランをかっ飛ばしたら、疾風の如くまたスポーツカーで去っていくというイメージです。ですから、「巨人の星」でよく見られる、緊迫した燃える真剣勝負の世界観を現出するように「凌雲の志」のリーダーテクニックにも工夫をしました。主人公の星飛雄馬投手がライバル花形満に大リーグボールを投げ込む時のダイナミックなフォームをイメージして、突きに入る時に左足を大きく高く振り上げることにしたのです。

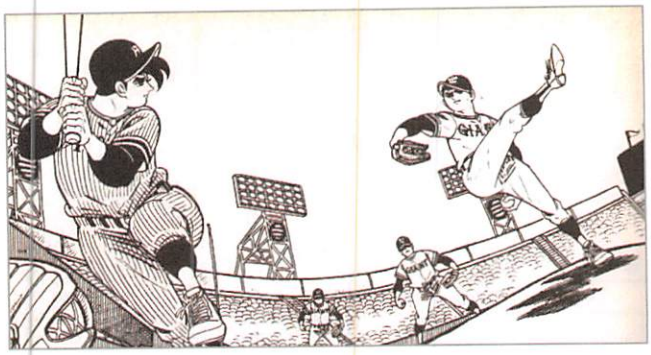
こうして私は自らが制作した歌を、お披露目の時と発表会の時、わずか二回だけ指揮を務めて引退しました。タイトルに自信はないし、歌詞の評価も低い。このような歌を一つ下の後輩が「第四応援歌」として受け継いでくれるとは正直思っていませんでした。私の中では「替え歌をやりたくない一心だった菅野の発表会用の歌」で終わると思っていたのです。

今、川高生や父兄の皆さんが凌雲の志Tシャツを着ているのを見るに

つけ、ただただ驚き、恐縮するばかりです。また「凌雲の志」が卒業アルバムや学年通信のタイトルなどになっていることを知らされた時は、「気は確かか！」というのが率直な感想でした。ですが、「凌雲の志」という言葉が川高生の心に深く刻み込まれているのであれば、これほどうれしいことはありません。三十年以上も歌い継いで下さった後輩の皆さんに心より感謝しております。

第二十四代・菅野　真二

（昭和五十九年三月卒）



「凌雲の志」のリーダーテクニックのモデルとなった星飛雄馬の投球フォーム（「巨人の星」より）

## 応援歌物語⑤

### 雄志の一閃

平成二十八年冬、三年生が引退して幹部となっていた第五十二代のメンバーは、川高生の愛校心をより一層向上させるために、新たに応援歌や応援曲を制作してはどうかと思い立った。そこで十二月に新曲のメロディーや歌詞に使用したい単語やフレーズを広く学内に募集したところ、吹奏楽部を引退していた三年生の杉山大地氏が応援歌のメロディーを作曲して応募してくれた。この曲を使って第五応援歌を作ろうと考えた幹部らは、その後全校生徒を対象に第五応援歌制作に関する説明会を開いたのだが、出席者はわずか一名であった。そのため、応援歌の制作は当初の目的である愛校心の向上にはつながらないと判断し、この時点で取り組みは頓挫してしまった。

そして翌二十九年秋、第五十三代のメンバーが幹部になると、彼らにも新応援歌を作りたいという思いがあったため、その実現に向けて再び動き出した。検討した結果、杉山氏作曲のメロディーを使って応援歌を完成させようということになり、また応援部だけで制作して一方的に披露するのではなく、歌詞を公募して川高全体で作り上げるという形にしたいと考えた。だが、曲自体は出来上がっているため、このメロディーに合致する歌詞を作らなければならない。そこで、完全に作詞を依頼する公募ではなく、応援部側で考えた歌詞を暫定版として全校生徒に提示した上で、歌詞や曲名などに関する意見をもらって完成させるという形にした。

下駄箱のある校舎の玄関口に「新応援歌　公募回収ボックス」なるものを置き、「三十四年ぶりとなる新応援歌の歌詞等の公募を行います」という大見出しの「団報」を掲示しておいた。その内容は次の通り。

「我々は昨年度から新応援歌を作るという事で活動しており、この度、歌詞、メロディー共に製作中です。しかし、我々だけで考えるのではなく、川高生の皆さんの意見も頂き、川越高校全体でこの応援歌を作り上げたいと考えております。そこで、皆さんに公募（歌詞のアイデア、意見、質問等）を行い、皆さんの意見を応援歌に取り入れさせて頂きたいと考えております。」

そして、現在の暫定的な歌詞として次のものを提示した。この歌詞は幹部から出て来た、使用したい単語やフレーズを宮本怜里副団長がうまくまとめて完成させたものである。

第五応援歌（案）

「雄志の一閃（いっせん）」

一、天の才腕輝き
　進み行く道照らす
　宿願は其処にあり
　今こそ果たせ
　川高　川高　川高　掴め
　勝利の光
　誉れ高き我等川高
　川越高校

二、此処に集える麒麟児に
　流れ行く血潮こそ
　母校の猛き矜持
　燃えたる闘志
　川高　川高　川高　刻め
　勝利の轍（わだち）
　誇り高き我等川高
　川越高校

公募の結果、曲名に関する意見がいくつか寄せられたため、曲名案として絞り込んだ「雄志の一閃」と「天の才腕」の二つを提示し、どちらが

良いかを再び全校生徒に呼びかけて投票してもらった。その結果、投票数の多かった「雄志の一閃」に決定した。また歌詞は公募で得た意見を反映して、二番の出だしを「此処に集える麒麟児に」から「くすのきに集える者に」へ変更した。

当初編曲を音楽の教科担当であった國弘雅也先生に依頼する予定でいたが、先生が忙しく、また吹奏楽の専門ではないので難しいということであったため、編曲も作曲者の杉山氏に依頼してみることとなった。杉山氏はこれを快諾してくれ、平成三十年八月、三度の公募を経て川高初の完全に学生の手のみによるオリジナル応援歌が誕生したのであった。

九月二日の演技発表会で披露したが、吹奏楽部の練習が間に合わなかったため、演奏なしで声高らかに歌われた。

こうして初披露を遂げた第五応援歌であったが、実はこの時点では吹奏楽のパーカッションパートの編曲がまだできていなかった。杉山氏からは「自分はパーカッションについてはあまりよくわからないので、応援部と吹奏楽部の現役部員で作って欲しい」と言われていた。そのため、応援部側も時期を探っていたのだが、残念ながら演技発表会までには作成できなかった。しかし、第五十三代幹部であった茶山楓太が、吹奏楽部を引退していたクラスメイトの安藤元暉氏に話を持ち掛けたところ、安藤氏が自分でパーカッションの編曲をすることを快諾してくれ、九月中旬に出来上がった。

「凌雲の志」以来、実に三十五年ぶりの新応援歌は、こうして多くの川高生が携わり協力して作り上げられ、完成したのだった。

新応援歌　公募回収ボックス
（平成29年12月29日撮影）

全川高生に初披露された第五応援歌
（平成30年12月21日　終業式）

## 応援歌物語⑥

### 川高節

「川高節」は昭和十五年に制作されたと言われる「日大予科節」が原曲と思われる。この「日大予科節」は後に「日大節」として広く日大生の間で歌われるようになっただけでなく、近畿大学や明治大学、法政大学など色々な大学が模して、口上や歌詞を自校風にアレンジして歌うようになった。

本校では昭和四十年に井口敏部長が東都の大学応援団の演技発表会を見て知り、やはり口上と歌詞をアレンジして制作した。そして、この年の第一回演技発表会において、自らが指揮を務めて披露した。

現在使用している口上は「川高節」制作当時のものではなく、何度か改良されたものである。

現在、演技発表会における「川高節」は、団長が羽織袴姿で演じるスタイルが定着しているが、初めて羽織袴を着用したのは昭和五十二年度の第十八代・新井康之団長であった。祖母が成人式用に作ってくれていた、新井家の家紋付きのもので、「晴れ舞台で着て欲しい」という祖母と母親のリクエストに応える思いで着用することにしたという。

この三年後、第二十一代・位田雅章団長が自前の羽織袴を着用して演技発表会で「川高節」を演じると、これ以降、羽織袴を着用する団長がしばしば現れるようになった。羽織袴は自宅にあったものを着用したり、どこからか借用して来たりした。そして昭和六十年度の第二十六代・佐藤武史団長も自費で仕立てた羽織袴を着用して「川高節」を演じたが、後輩のためにとの思いから、この羽織袴を部に寄贈して引退したため、歴代の後輩団長らに受け継がれ、「川高節」のスタイルが定着していった。現在の団長が着用している羽織袴も佐藤団長が遺したものである。（袴は平成三十年度に同じ色のものに買い替えている。）

第1回演技発表会
井口部長による「川高節」

## 応援歌物語⑦

### 団歌

四十数年前の「団歌」誕生のきっかけですが、国に国歌、都道府県には都道府県民歌、会社には社歌、学校には校歌があるのに、応援団に団歌がないのはどうか・・・なんて話が、同期部員の間での四方山話のひとつとして話題に上がったような気もします。

結果として「団歌」を作ろうかという冗談めいた話が事の発端となり、具体的に煮詰まってきたような気がします。代々継承されてきた演目に新たなものを加える行動はハードルの高いものではありましたが、徐々に話し合いが現実味を帯びてきました。

「川高節」はミディアムテンポながら威勢のいい度胸一つの川高生の替え歌だから、「団歌」もミディアムテンポの替え歌でいこうといった話になったのかもしれません。

「団歌」のメロディは、当時の団長の新井康之氏が好んで口ずさんでいた「歩兵の本領」という軍歌です。これを好んで口ずさむとは流石団長です。このメロディが自然に部員の大脳皮質に刷り込まれてしまったために「団歌」が誕生したのかもしれません。

「歩兵の本領」の歌詞は「万朶の桜か襟の色　花は吉野に嵐吹く　大和男子と生まれなば　散兵戦の花と散れ」というもので、明治末期の歌とのことです。戦地に赴く一兵卒を鼓舞する歌で、長調で勢いのあるメロディーラインと短い楽曲が、団歌のイメージメロディにうまくハマり、この件で異論は全くなかったように記憶しています。

軍歌の替え歌の選択に関しては、戦争賛美とか、右とか左とか、保守とか革新とかの政治的思想的意図があったわけでは全くありません。何故なら当時の私自身が右も左もわからないノンポリ（nonpolitical ではなく nonpolicy のほう）だったからです。作詩者にポリシーがないのですから政治的思想的意図があるはずもありません（笑）。当時顧問だった高木先生にもこの点は強調して理解を得たのを覚えています。

強いて言えば「歩兵の本領」から感じられた万難に立ち向かう当時の大和魂的気概が、学生時代の苦楽を共にする「仲間」意識と共通するところがあったのかもしれません。応援団の団歌にもピッタリじゃないですか！

メロディーラインが決まったならあとはアテレコだけです。「歩兵の本領」のメロディーラインにはやっぱり文語体の歌詞がしっくりきます。この「団歌」の詩は夏の風物詩だった高校野球のテレビ中継冒頭に、必ず流れる校歌も影響したと思います。百戦錬磨の強者チームの、歴史を感じる古風な言い回しの校歌にも魅力を感じたのかもしれません。勿論、川高の校歌も例外ではありません。

また、小学校時代に、よく理解せずに口ずさんだ「甍（いらか）の波と雲の波」という文語体の「こいのぼり」の歌詞。今は「屋根より高いこいのぼり」という「こいのぼり」の歌詞のほうが歌われているようですが、昔習った文語体の歌詞の韻の踏み方が、妙に心に残りませんでしたか？深みというか趣というか、何とも言えない文語体の表現で書かれた「こいのぼり」は、意味をしっかり理解できなかった当時の小学生も暗唱していた文部省唱歌でした。

ということで、「団歌」の歌詞は文語体にあいなりました。問題は詩にちりばめる単語ですが、これは当時理系志望の私には相当なハードルの高さでした。古文が好きなわけでも得意なわけでもありません。正直申しあげると古典の辞書を読んだのです。単語から意味を探すのではなく、意味から単語を探して骨組を作ったのです。「古城の甍（いらか）煌めきて」は先の「こいのぼり」に出てくる「いらか」の引用です。

古文の苦手な学生が作った「団歌」の文語体の詩ですから、当事の顧問の先生（高木先生）と、古文の先生（たぶん小柳先生）にも相談し推敲してもらったことを覚えています。結構褒めていただいた記憶はありますが、その割に古文の成績は散々だったような。（古文以外も散々でしたが）

部員は私より成績優秀な面子ばかりでしたからあれこれと相談もしたと思います。なんせ当時の団長、副団長は今や高校生に日本史を教えるプロ教員でもありますし、他の部員も有名私立で教壇に立って活躍しているくらいですから、当時から知識も豊富でした。我々部員たちの四方山話からはじまった冗談話を、皆で煮詰めて形にしたのが「団歌」です。

「規律・礼節・団結」が応援団の三原則でしたよね。

滾り流るる瀧波も
焦がるる如き崖路さえ

このフレーズは私の一番のお気に入りで、当事の団員の熱き心の団結心を込めたものです。卒業してずいぶん経ちますが、拙い歌詞をあてはめた「団歌」を受け継いでくれている川高応援団の優秀な後輩たちに感謝申し上げます。

第十八代・関　孝史
（昭和五十三年三月卒）

舩山団長による「団歌」口上
（第51回演技発表会　平成27年9月）

## 応援歌物語⑧

### ファイティングマーチ

二十九代幹部では次の三十代を記念して何かできないかと考えていましたが、ファイティングマーチ誕生はひとえに赤塚（第十一代統制）の功績と思います。当初から新たな応援歌、新たなマーチ作りに意気込みを抱いていた彼は、吹奏楽部に熱い思いをぶつけ、忙しいなか全面的な協力を獲得してきました。振付にあわせ何回もの手直しを経て完成したマーチは心躍る軽快なリズムから始まる新曲にふさわしいものであり、徐々にテンションが上がり自然と観客が一体となって盛り上がってくる曲調はこれまでにないスタイルでした。

振りも同期からみてもかっこよく、応援団と客席が一緒に腕を振り上げる「カワコー！」のアレンジは良かったと思います。あれから三十年を経て今も野球応援、演技発表会で披露されていることは感慨深い思いです。当時のメンバー、海野、大室、赤塚、池田、そして三十代の田中、松本、振り返るととてもいいメンバーに恵まれました。赤塚の熱意と吹奏楽部の協力があって出来たファイティングマーチですが、当時のメンバー皆の結束力の産物であり、この曲にはそれぞれのたくさんの思い出が詰まっているといえます。

汗臭い部室、塩噴いた学ラン、尖がりエナメルシューズ、揃いのハッピ、屋上、体育館ステージ、竹刀、仙台屋のカップラーメン、余興の練習、校歌。

当時は部員が少なく後輩たちは苦労をしましたが、今では現役の活躍ぶりが素晴らしくこれからも応援団が盛り上がっていくと嬉しいです。これから三十年後もファイティングマーチが披露されていると最高です。

第二十九代・石丸　敬人
（平成元年三月卒）

川高勝利の旋風！
ファイティングマーチで
盛り上がる野球応援
（於　初雁球場　平成26年7月14日）

## 応援歌物語⑨

### 川高応援メドレー

第五十三代の何か新しいものを作りたいという気持ちは幹部になる前から皆持っていたと思います。さらに言うと当時二年生だった五十二代の先輩方が後の第五応援歌完成に繋がる公募を行う最中に、一年生の私達の心の中で芽生えていたのかもしれません。

私達は幹部になるとすぐに自分達の代で何か新しいものを作らないかという話し合いを行い、新応援歌とマーチ（応援曲）を一つずつ作ろうという事になりました。我々の代は「日輪の下に」が自校での開催だった為、それに合わせてそれぞれを作り上げ最高の自校開催にしよう、というような気持ちでした。また、二十四代の菅野真二先輩が新しいマーチを作って下さっている、とのことだった為、その曲もうまく取り入れようということになりました。しかし、当時はまだ従来の早稲田大学のマーチを一掃しようという気はなく、新しい曲と早稲田の曲を混ぜて行う

のが妥当だろうと考えていました。

まず私達は新しいマーチを作るために川高のOBで吹奏楽部顧問であった長島一樹先生にマーチの作曲をお願いしました。お願いする段階で我々の求める曲のコンセプト(チャンス時に使う等)を伝え、また曲名などもあると作りやすいとのことだったので副団長の宮本が「ライトニングマーチ」という案を伝えました。

そして十一月に菅野先輩の作られた「ファンファーレ」「Winner川高」「BLAGING」が私達に渡され、長島先生の「ライトニングマーチ」が完成しました。これを受け、私達で日輪の演技の構成を考えました。その際、それぞれの曲がそれなりの長さを持った曲だった為、早稲田の曲を一切使わなくても十分な演技ができるのではないかという事になり、以前から使用していたオリジナル曲の「ファイティングマーチ」「間接コール」にそれらの新曲を加えるという形で、完全オリジナルのメドレーを行うことに決めました。これに際してメドレーの名称も従来の「野球応援メドレー」から「川高応援メドレー」に変えました。これはただ野球部の為だけでなく、当時応援にメドレーを使っていたラグビー部、水泳部などほかの部活、そして全ての川高生全体を応援するメドレーだという思いを込めて行いました。ただ、ファンファーレについては、曲が短く入場が間に合わないということで、別の新しいものを自分達で作曲しようとしたのですが、うまくいかず、日輪では従来の早稲田のものを使用することになりました。

そして私達は菅野先輩から頂いた「Winner川高」「BLAZING」のリーダーと掛け声の案を自分たちなりに練り直し、また、「ライトニングマーチ」のそれを一から考える為に、毎日練習後や放課後に教室に集まって話し合いました。最初こそかなり楽しく行えましたが、意見がぶつかることも多かった為、日輪までの時間が迫り、毎日集まることで皆もだんだん疲れ、アイデアも行き詰まり、最後は辛かったです。それでも出来上がったときは本当に嬉しかったです。

また、私達は前の年に五十二代の先輩方が始めた野球部の踊りをこのマーチにも作りました。そして、名称を「川高応援メドレー」に変えた理由が全ての川高生へということだったので、日輪では野球部だけでなく、我々が応援に駆け付けていた陸上部、ラグビー部、サッカー部、水泳部にも有志を募って踊ってもらうことにしました。ラグビー部は都合で来られなかったのですが、ある部員が半ば冗談で水泳部に水着でやってもらわないかと提案し、なかなか面白そうだったので頼んでみました。水泳部はそれを快諾してくれて、当日のメドレーの際に上裸の男たちがステージ前に集まり、会場が大いにどよめいたのを覚えています。

第43回「日輪の下に」で初披露した川高応援メドレー
(平成30年2月11日)

新応援歌の披露は制作する都合と吹奏楽部の負担の為に日輪では出来なくなってしまったのですが、自校開催、そして自分達で作った全く新しいオリジナルのメドレーを披露するという事で皆の意気込みはすごいものでした。練習から熱があり、日輪前最後の練習の反省会では幹部の何人かは感極まっており、まるで引退を控えているかの様でした。

当日は非常に楽しく、舞台裏では皆で肩を叩いて鼓舞し合いながら演技をした事が印象的です。またこの年のメドレー前の吹奏楽部の曲目は「シンクロ BOM-BA-YE」であり、まさに川高開催にふさわしく、川高応援メドレーを控える中で感動的であった事が今でも思い出されます。

日輪後はしばらく何もありませんでした。しかし、皆も思っていたと思うのですが、私はオリジナル曲だけにしたことによってまだ曲数が少ないという状況がかなり気になっていました。野球応援の際だけ早稲田のマーチも使うという案もあったのですが、今回早稲田の曲を使ってしまうと、そのほうが不自由がない為今後のオリジナル曲の進展がなくなり、早稲田の曲からもずっと抜け出せなくなるだろうと考え、その案はなくなりました。そこでまた長島先生に頼もうとしたのですが、長島先生が忙しくなってしまい、作りたいけど今は難しいとの事だったので頭を悩ませていました。

そんな中ある日、ふと川高のOBで作曲家をやっている人はいないのかと考え、インターネットで調べ始めました。するといろいろな方が出てきて、この中の人の誰かしらはOKしてくれるのではと思い、連絡をとることにしました。

まず最初に思い立ったのは荻久保和明さんでした。この方は「IN TERRA PAX」や「OH MY SOLDIER」などの非常に有名な曲も手掛けた合唱界を代表する方で吹奏楽の作品もあるということで、もしこの方に作曲してもらえたら、これ以上光栄なことはないだろうと思い、所属する大学に何度も電話をしました。しかし、非常に忙しい方で電話での連絡は出来ないだろうから手紙を書いてはどうかと言われ、手書きの手紙を送りました。しかしやはり返事は来ず、待っているうちに夏が近づいてきてしまったので、他の方に頼むことにしました。

そこで頼んだのが山田隆広さんでした。この方は一般向けにも作曲を行っている方だったので間違いはなかったのですが、仕事の為お金を取られる可能性が高いだろうと後回しにしていました。

いざメールで頼んでみるとすぐにお返事が来て、自分はオーケストラの作曲が専門の為吹奏楽の作曲は出来ない。それか自分が作曲して他の人に編曲をしてもらうという手もあるが、それだと母校割引をしても十万円くらいかかるだろうという事だったのでたじろぎましたが、交渉を進めていくうちに、一分ほどの非常に短い曲ならそこまでお金はかからないだろうという事と、ユニゾン(注)なら自分だけでも作れるだろうという事になったので、お願いすることにしました。お金は当時度々お金の援助をして下さった二十一代の松本朗先輩から頂いたお金の残りを充てました。

今回の新マーチ制作に向けて一応は我々の中でコンセプト等を考えていたのですが、山田さんと話していくうちにこの方にコンセプトを伝えて型にはめてしまうよりは、この方に全て任せてしまった方が良いだろうと勝手に判断し、マーチというものの使い方や、新旧の川高のマーチ、六大学の有名なマーチを紹介する事にとどめ、他は何も伝えずにやってもらいました。すると東京大学の「不死鳥の如く」が印象的だった様で、山田さんの学生時代の苦難を乗り越えた経験を交え、これからも苦境に立ち向かう川高生の青春を共にする曲となればと、とても情熱的な曲を作って頂きました。しかも作曲するにあたり自分で吹奏楽について勉強し、さらに専門家にアドバイスをもらいながら作られたとの事だったので、本当に感謝に堪えませんでした。曲名は部員達で決めてほしいとの事だったので、これもかなり意見が分かれたのですが、最終的に「スパイラル」という名前にしました。また、日輪では早稲田のものを使ったファンファーレも、合わせて山田さんに新しく作って頂きました。

左から小松団長、「スパイラル」作曲者・山田隆広氏、新マーチ制作に奔走した郡山総務（第54回演技発表会　平成30年9月2日）

四つ目の新マーチを作るのはすでに皆のアイデアも尽き欠けていた為、正直ただ辛かったです。こうなる事は分かっていたものの、野球応援にマーチ四曲ではとても足りないと考えていた為、そこは妥協出来ないと思い作りあげました。

その年に我々が取り組もうとしていた野球応援は、マーチを一新させたことにより今までの野球応援とはかなりの部分で異なり、我々次第で今まで先輩方が積み上げてきたものをゼロからにしてしまう可能性がありました。また今年の取り組みがこれからの野球応援の基礎となるだろうと思い、非常に責任を感じました。その為事前の話し合いはとことん突き詰め抜き、絶対に最高の応援を作り野球部を勝たせるんだという意気込みで応援に臨みました。そして実際の野球応援ではどの曲も初めてとは思えないほど皆盛り上がってくれました。

私は野球部が今まで親しんできたマーチを一掃し、川高オリジナルとはいえ馴染みの無い曲に応援されるのは野球部からするとどうなのだろうかという葛藤をそれまで抱いていました。しかし、最後の試合の後、野球部の部長から感謝の言葉をもら

った時、本当にやってきてよかったと思いました。

その後は特に何か新しいことをする訳でもなく、ただひたすらくすのき祭での演技発表会に向けて練習を重ねました。

演技発表会での演技については特に何も書くことはありません。ただ五十三代の十三人全員が何の迷いもなく自分の気持ちをぶつけ、全力の演技を目一杯やり切っただけです。特に言うのであればメドレーの前の「シンクロ BOM-BA-YE」が自分達のいままでを想起させ、最後に相応しい響きを持っていたことと、団長の小松が学生注目の中で、私のおかげで川高応援メドレーができたと言ってくれたサプライズが密かに嬉しかったことくらいです。

これから書こうとするのは後夜祭です。今まで中後夜祭等で野球応援メドレーを行ったことはなかったのですが、今回私から後夜祭で川高応援メドレーをやろうという提案を行いました。最初は知らない人がほとんどなのだから出来ないだろうとすぐに却下されたのですが、顧問の坂東先生のバックアップもあり皆でやろうという事になりました。

楽しみな気持ちはもちろんあったものの、今まで全くやったことのない取り組みだった為かなり不安でした。とにかく野球部だけでも何とか盛り上がってもらおうと野球部に呼びかけたところ、最前列に並んでくれ、それが他の生徒をリードするというような形を作ってくれました。

学生注目は私が行ったのですが、この最初の学注次第でその後のメドレー本編が決まり、さらにそれによって来年以降この取り組みをやるかやらないかも決まると思っていた為、とにかく勢いだけでもやってやろうと、全身全霊で学注に臨みました。

その結果生徒も乗っかってきてくれて、学注、四股ともに今までにないくらい楽しくできました。そして本題のメドレーは心配をよそに想像を大きく超えた盛り上がりを見せました。私はステージ上でマイクを使って誘導をしていたのですが、そこから見える光景は今まで見てきた中で最高の眺めでした。こんなに多くの人が飛び跳ね、間違えることはあってもマーチの掛け声を皆で叫び楽しんでいるというのは全く想像していませんでした。川高をもっと盛り上げられればと、辛くても毎日の様に集まり、また自分の時間を削り奔走してきた全てがここで報われた気がしました。本当に幸福な時間でした。色々な人からまたやりたいというような声を聞き、これを一回きりで終わらす訳にはいかないと思うとともに、これをもとにさらに川高が盛り上がってくれればと強く思いました。

最後に、今回川高応援メドレーについての文を私が書いた訳ですが、この川高応援メドレーは私の力だけでどうこうしたのではなく、本当に様々な人に無理を言って、迷惑をかけ、協力してもらい、支えてもらう事によって生まれ、進歩したのです。吹奏楽部にはいままで必死に練習してきてもらった旧マーチを捨て、全く新しい曲を三曲も日輪の直前に詰め込んでもらい、さらに野球応援の直前には彼らのコンクールの練習もある中、新曲を覚えてもらいました。野球部にも掛け声や踊りを覚え直してもらい、菅野先輩、長島先生、山田さんにはそれぞれ大変な苦労をして頂いてまで曲を作ってもらいました。そして何より応援部の同期全員で作ったものです。それぞれの曲に担当を決め、特定の人に任せて掛け声やリーダーを作ってしまえば、効率もよく簡単に済むところを、わざわざ全員で意見を戦わせて作ったからこそ、最終的に皆から親しんでもらえるような曲になったと思います。本当に感謝の念に尽きません。

川高応援メドレーで盛り上がる「くすのき祭」の後夜祭
（於 体育館アリーナ 平成30年9月2日）

しかし、私達は川高応援メドレーを完成させた訳ではなく、これから更に進化する基盤を作ったまでだと思っています。これからこのメドレーがどうなっていくのかは分かりませんが、良くするも悪くするも今後の後輩次第だと思うので、彼らにはどうしたらより良い川高を築けるのかを考え、頑張っていってほしいです。

第五十三代・郡山 結人
（平成三十一年三月卒）

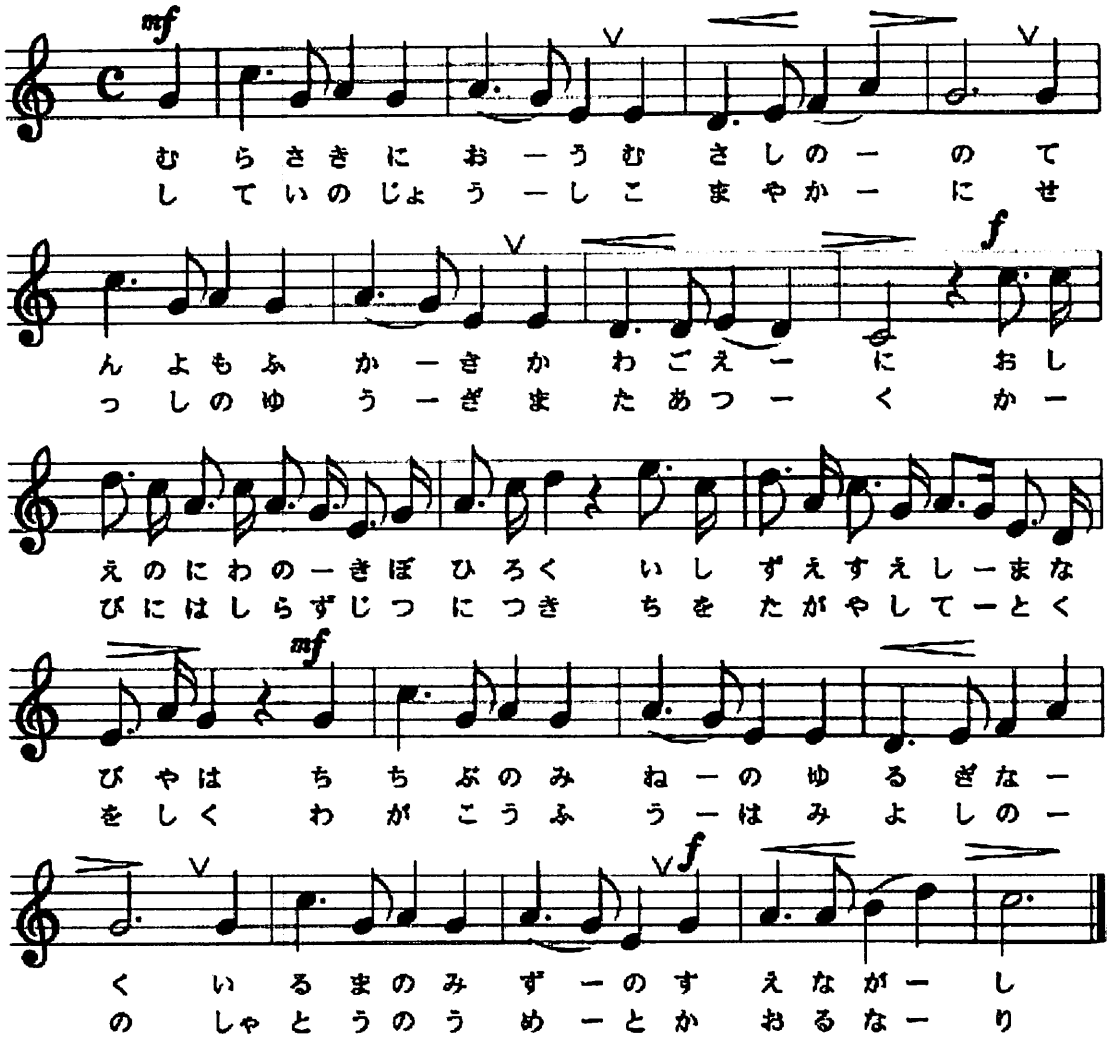
（注）ユニゾン／違うパートのメンバーがリズム・音程など全く同じ演奏をすること

# 川越高等学校の歌

# 校　　歌

古谷喜十郎　作詞
内田粂太郎　作曲

Moderato




一、
紫匂う武蔵野の
天与も深き川越に
教えの庭の規模広く
礎据えし学舎は
秩父の嶺の揺るぎなく
入間の水の末長し

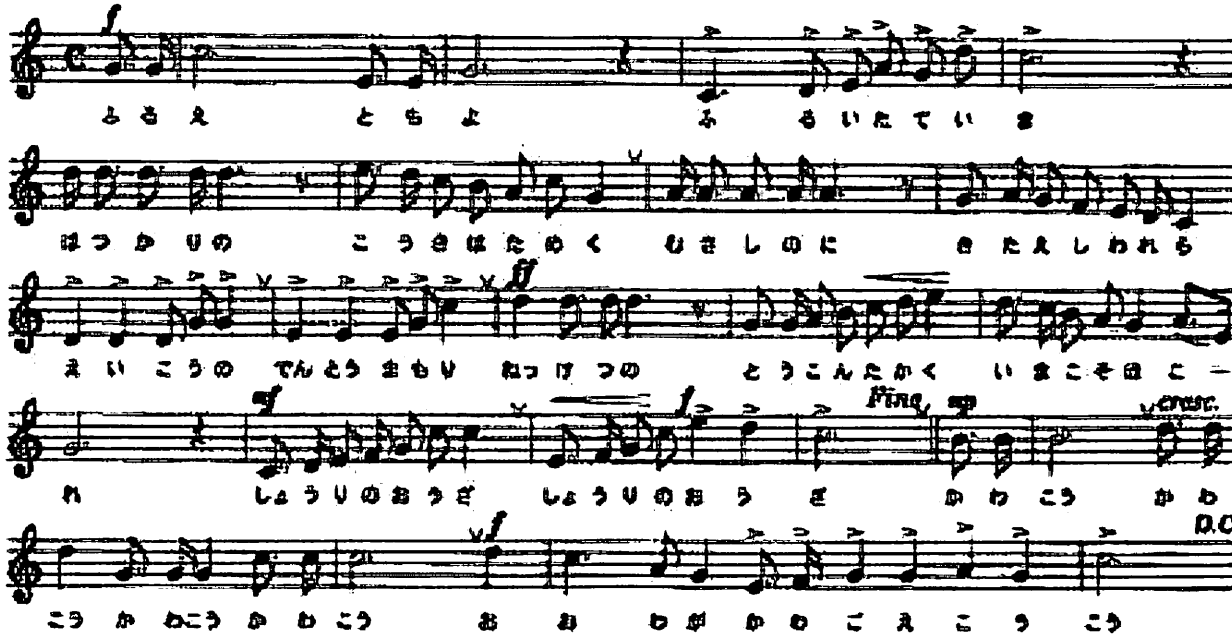
二、
師弟の情思濃やかに
切偲の友誼亦厚く
華美にはしらず実に著き
智を耕して徳をしく
我校風は三芳野の
社頭の梅と薫るなり

三、
螢に捜る鳥の跡
雪に尋ぬる文の道
大和心に西の才
雄飛の翼養いて
高き誉を初雁の
城址の月と輝かせ

# 第一応援歌「奮え友よ」

力強くおおらかに

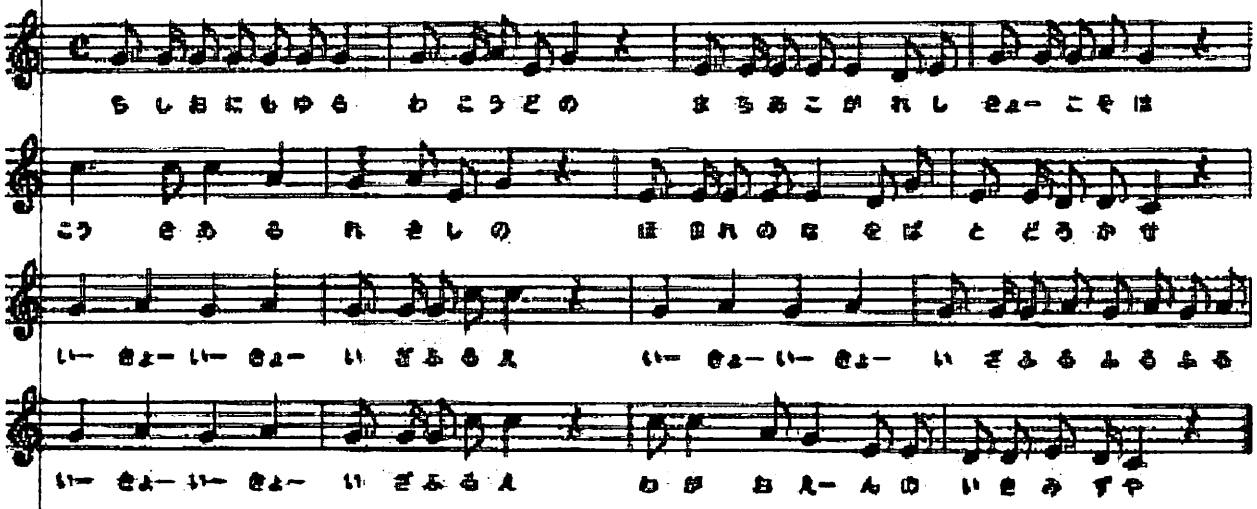
山本　明　作詞
牧野　統　作曲




奮え　友よ
奮い立て今
初雁の
校旗はためく
武蔵野に
鍛えし我等
栄光の伝統守り
熱血の闘魂高く
今こそ誇れ
勝利の王座
勝利の王座
川高　川高
川高　川高
おお我が川越高校

# 第二応援歌

（不詳）作詞
（不詳）作曲




一、血潮に燃ゆる若人の
待ち憧れし今日こそは
光輝ある歴史の
誉の名をば轟かせ

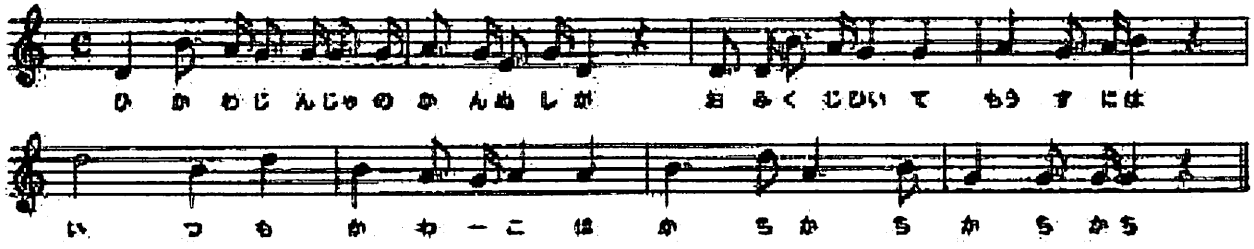
※
一挙、一挙、いざ奮え
一挙、一挙
いざふるふるふる
一挙、一挙、いざ奮え
我が応援の意気見ずや

二、熱球飛んで土を噛み
凱歌は上がる我が軍に
見よや若人の
赤き血潮の高鳴るを

※
くり返し

# 第三応援歌

（不祥）作詞
田村虎蔵 作曲




一、氷川神社の神主が
おみくじ引いて申すには
いつも川高は
勝ち勝ち勝ち勝ち

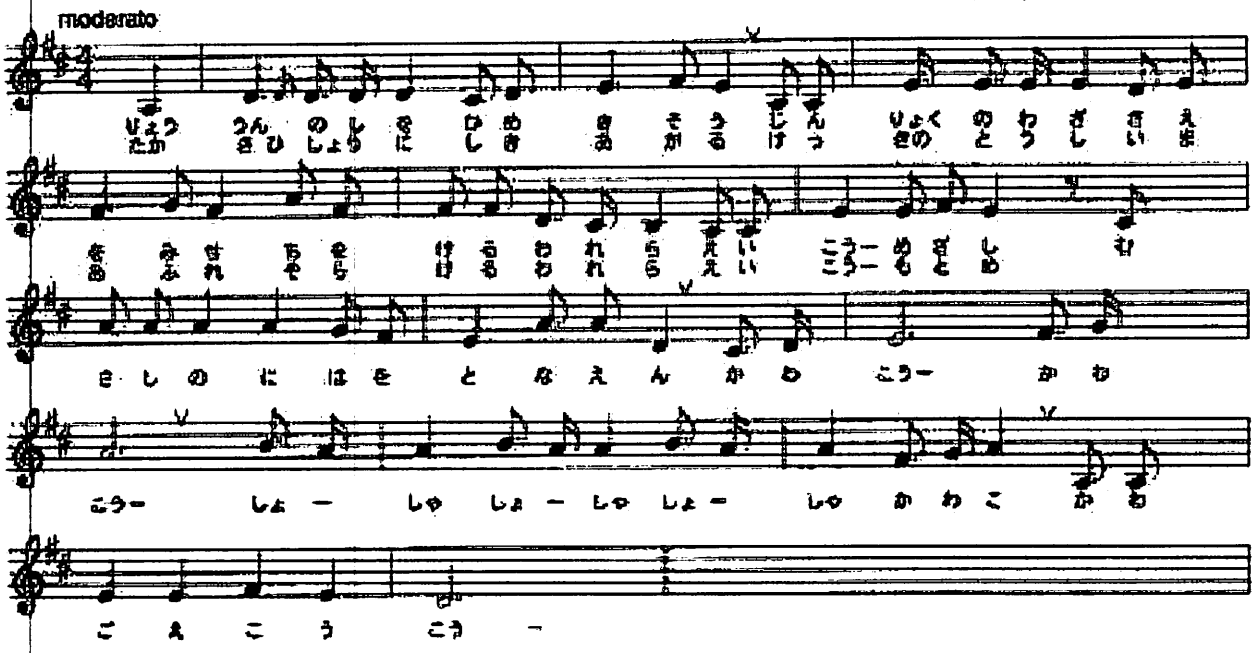
二、天にのさばる神様が
雲の上におんぶして
眺める様子は
川高の勝ち勝ち

三、川高健児の心意気
今日のこの場で見せましょう
それ打て　やれ打て
今日も川高勝ち勝ち

四、もしも川高が負けたなら
電信柱に花が咲き
焼いた魚が
泳ぎ出す　泳ぎ出す

# 第四応援歌「凌雲の志」

菅野真二 作詞
小高秀一 作曲

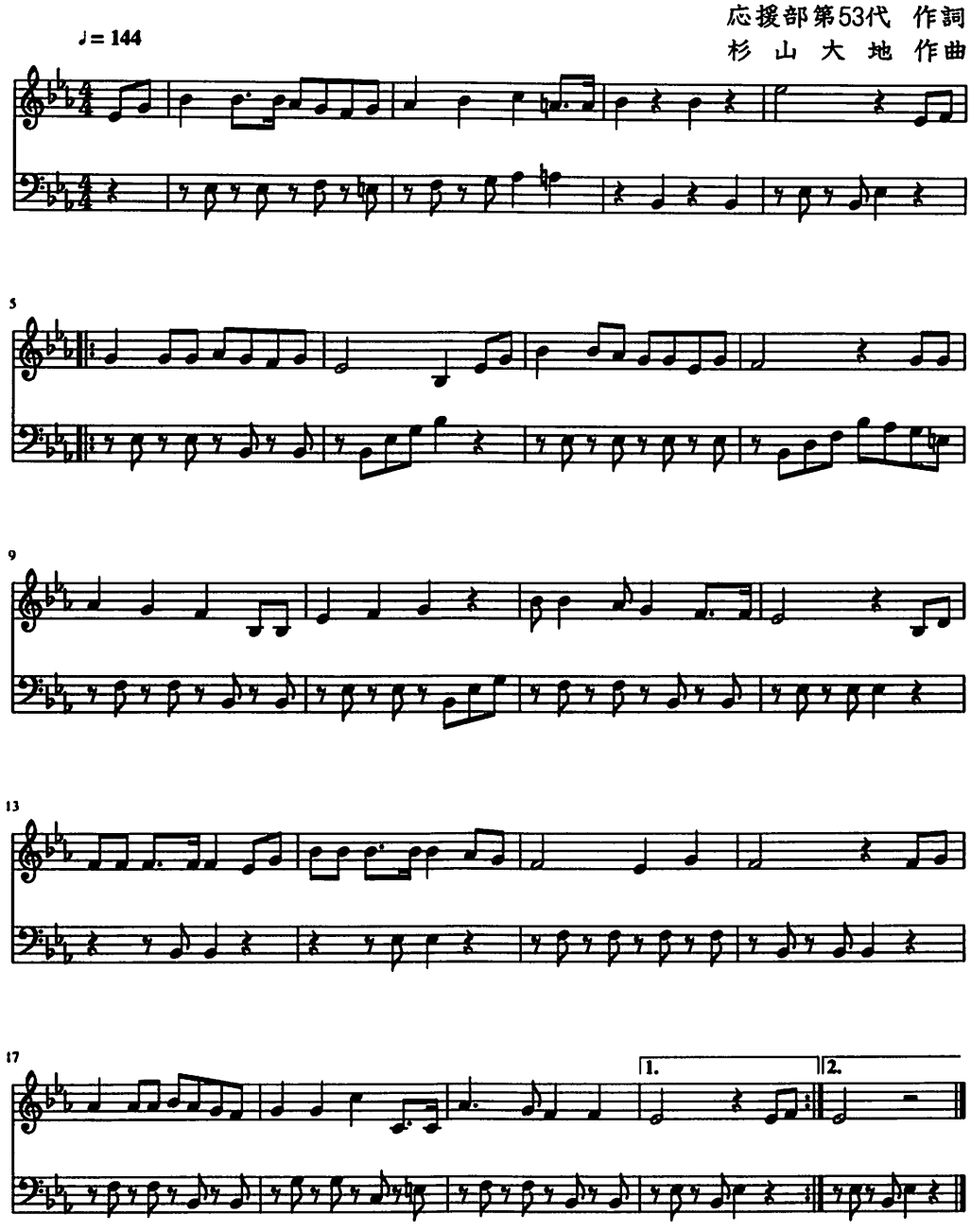



一、
凌雲の志を　秘め競う
尽力の技　冴えを見せ
地を蹴る我等　栄光目指し
武蔵野に　覇を唱えん
川高　川高
勝者　勝者　勝者　川高
川越高校

二、
高き飛翔に　士気上がる
血気の闘志　今溢れ
空駆ける我等　栄光求め
武蔵野に　覇を唱えん
川高　川高
勝者　勝者　勝者　川高
川越高校

# 第五応援歌「雄志の一閃」

応援部第53代　作詞
杉　山　大　地　作曲

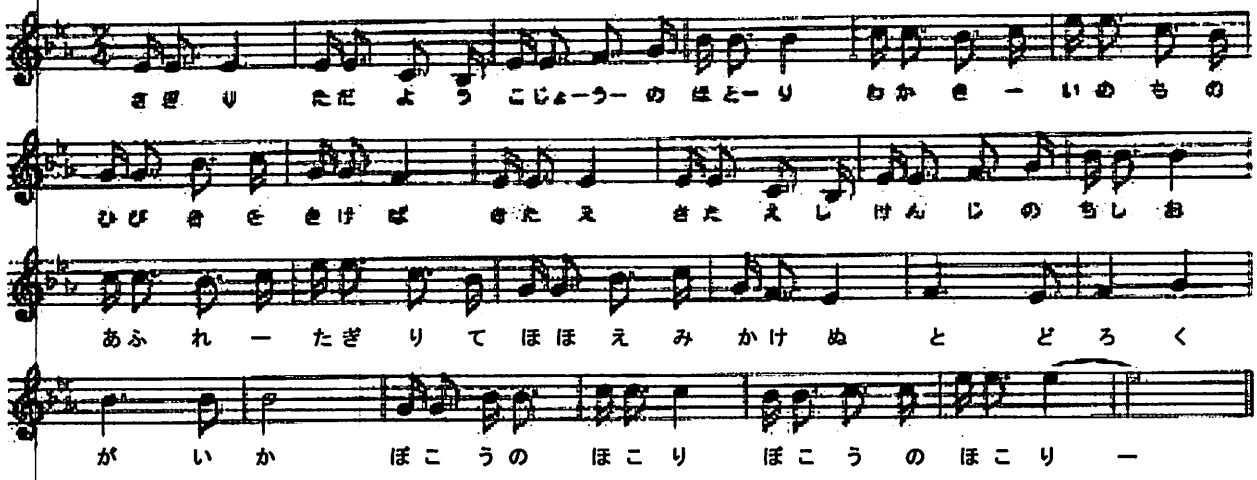



一、
天の才腕輝き
進み行く道照らす
宿願は其処にあり
今こそ果たせ
川高　川高　川高　掴め
勝利の光
誉れ高き我等川高
川越高校

二、
くすのきに集える者に
流れ行く血潮こそ
母校の猛き矜持
燃えたる闘志
川高　川高　川高　刻め
勝利の轍（わだち）
誇り高き我等川高
川越高校

# 凱　　歌

近藤鉄城　作詞
牧野　統　作曲




染むる母校の旗の色
胸に溢れる感激に
涙は我等の頬濡らす
いざ　祝勝の勝関をあげん
今　ここに
歌い狂わん　諸共に

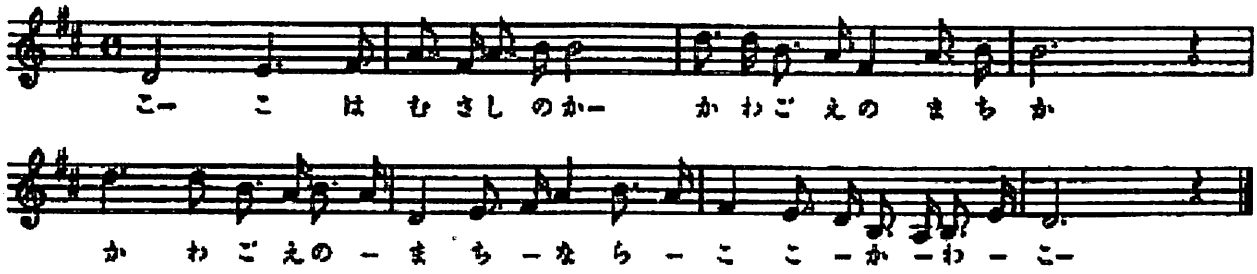
一、狭霧ただよう古城のほとり
若き命の響きをきけば
鍛え　鍛えし　健児の血潮
あふれたぎりて　微笑みかけぬ
轟く凱歌　母校の誇り　母校の誇り

二、ああ青春のうれいぞ夢に
湧きつ流れて意気高らかに
競え　競えし　健児の胸に
躍り高鳴り　脈うつところ
雲紫の　旗翻る　旗翻る

＊歌詞の出典　「川高応援歌について」
（作詞者・近藤鉄城先生寄稿／創立七十周年記念誌　昭和四十五年四月三十日発行）

# 川　高　節

井口　敏　作詞
（不詳）作曲

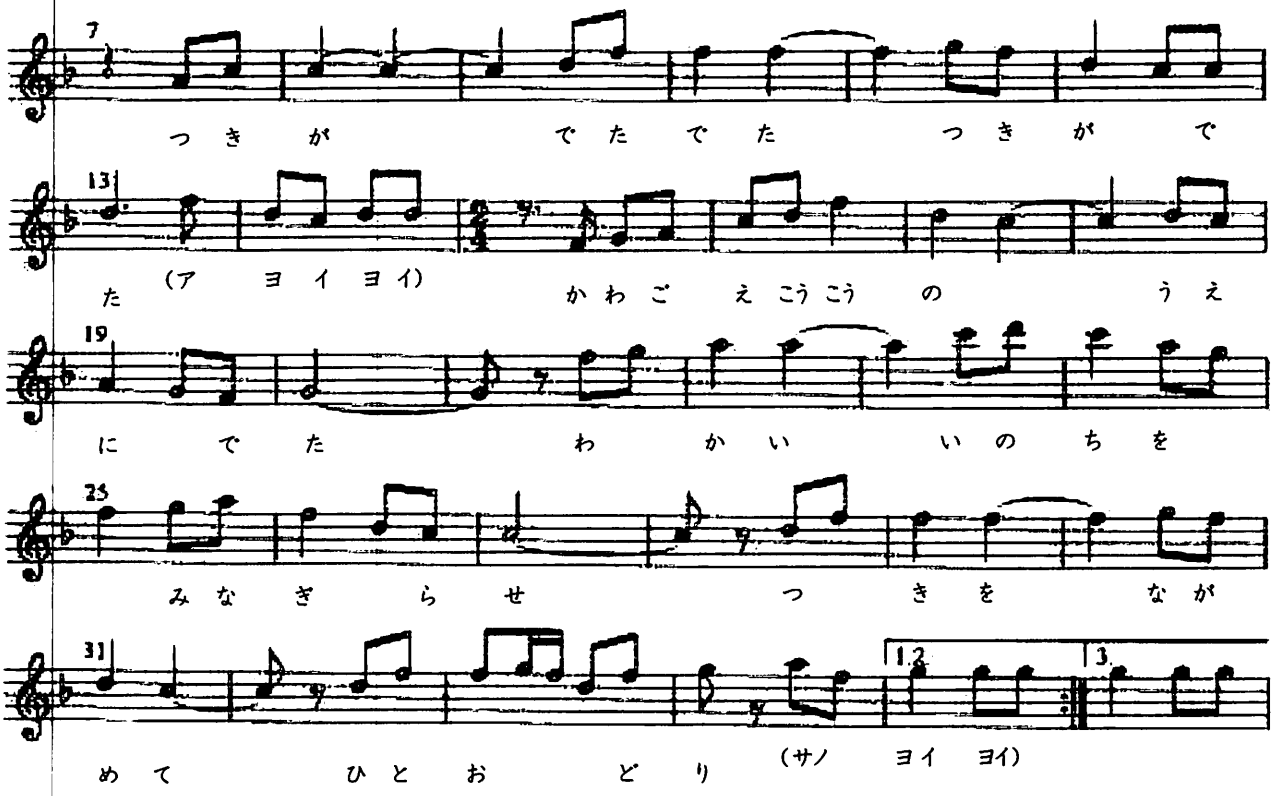



東　東に
坂東太郎大利根の清流を望む
西　西に
気高き秩父連峰を仰ぐ
そしてここ　関東平野の一角
ひと際聳えるは
我らが母校　川越高等学校である
エッサ見てくれ　この俺を
川高一の暴れん坊
エッサ見てくれ　この俺を
川高一の色男
エッサ見てくれ　この体
柔道で鍛えしこの体
エッサ見てくれ　この腕（かいな）
空手で鍛えしこの腕
エッサ見てくれ　川高の
川高名物数あれど
数々あれど数あれど
数ある中のその中の
川高節の一節を
いざ　歌わんかな　賜わんかな
囃さんかな　踊らんかな
エッサ皆が揃ったら
川高節は一拍子

一、ここは武蔵野か川越の町か
　川越の町なら高校川高
二、高校川越の学生さんは
　度胸ひとつの男だて
三、度胸ひとつで川越の町を
　歩いてゆきます初雁ボタン
四、初雁ボタンは川高育ち
　ボロはまとえど心はにしき
五、ボロはまとえど心はにしき
　どんなものにも恐れはせぬぞ
六、どんなものにも恐れはせぬが
　かわいいあの娘にゃ勝てはせぬ
七、かわいいあの娘はいつでも捨てる
　母校のためなら命まで
八、命捨ててもその名は残る
　母校川高のその名も残る

# 初　雁　節

本橋　孝之 2番作詞
（1番作詞者・作曲者不詳）



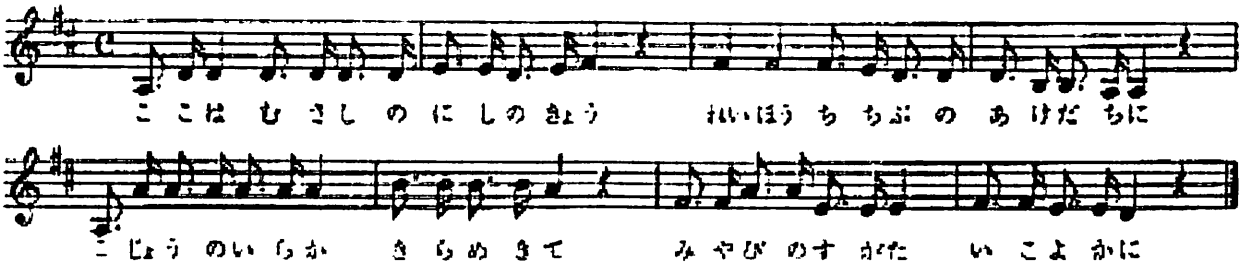

月が出た出た
月が出た
初雁城址の上に出た
今宵月に照らされて
エッサ皆で踊ろうぜ

一、月が出た出た　月が出た
アヨイヨイ
川越高校の上に出た
若い命を漲（みなぎ）らせ
月を眺めてひと踊り
サノヨイヨイ

二、ひと山ふた山　み山越え
エヨイヨイ
やって来ました川高へ
初雁城址のその上に
ひときわ冴える月の色
サノヨイヨイ

# 団　　歌

関　　孝史　作詞
永井建子　作曲




湧き立つ血潮を
胸に秘め
永久の流れを思う時
意気に感ずる涙あり
憂いを被る若人の
炎の如き情熱に
思いぞ行かん
深からん
錬成練磨し我が団の
激つ血潮は満ちからば
我等 凱誉に熱励せり

一、
此處は武蔵野西の京
霊峰秩父の明け立ちに
古城の甍煌めきて
雅の風姿岐嶷に

二、
滾り流るる滝波も
焦がるる如き崖路さえ
精兵率いる我が団の
激つ血潮は負けはせぬ

三、
城址の月に照り映ゆる
我等が母校川高に
晴嵐漂い剰え
獅子奮迅の団の虎

四、
幾星霜の流れしも
我等が精魂永久に生く
一度契りし友の情
長五百秋に無尽なり

# 川高応援メドレー

※歌詞は令和元年7月作成の歌詞カードによる
応援で使用する場合は、「川高」の部分は選手名となる

## 「ファイティングマーチ」

川高　川高
チャンスを逃すな狙い打ち！
川高　川高

## 「Winner川高」

Winner Winner 川高
Winner Winner 川高
ゴーゴーゴー
ゴーゴーゴー
ゴーゴーゴー
俺らこそ天下無双　We are No.1
勝つぞ　川高！！
Fight　Fight　川高
Fight　Fight　川高

## 「BLAZING」

燃えろ　燃えろ　川高
燃えろ　燃えろ　川高
オイ　オイ　オイ　オイ
炎の嵐起こせ！！
K・A・W・A・G・O・E
K・A・W・A・G・O・E

## 「ライトニングマーチ」

チャンス　チャンス　チャンス　チャンス　川高

チャンス　チャンス　チャンス　チャンス　川高

川高　川高

オイ　オイ　オイ　オイ　オイ　オイ　川高

オイ　オイ　オイ　オイ　オイ　オイ　川高

今だ！　打て！　川高！

勝つぞ！　勝つぞ！　川高！

## 「スパイラル」

川高！

川高　オーかっとばせ！

川高　チャンスを掴め！

オーFuFu

オーFuFu

ここで一発 川高！

オーFuFu

オーFuFu

行け 力の限り

タオルを振って「スパイラル」で
盛り上がる応援席（令和元年夏　野球応援）

## 年表（前史）

| 年度 | 顧問 | 団長（※） | 卒業アルバム等における名称 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|
| 大正十一年 | （不詳） | （不詳） | （掲載なし） | 応援団誕生 |
| 大正十二年 | （不詳） | （不詳） | （掲載なし） | |
| 大正十三年 | 高野　泰四郎 | 峯岸　久治 | 応援団幹部 | 生徒から歌詞を募集して野球応援歌を三曲制作 |
| 大正十四年 | 高野　泰四郎 | 寺田　市郎 | 応援部 | |
| 大正十五年 | 高野　泰四郎 | （不詳） | 応援部員 | |
| 昭和二年 | 高野　泰四郎 | （不詳） | 応援団 | |
| 昭和三年 | 高野　泰四郎 | 金子　良雄 | 応援部 | |
| 昭和四年 | （不詳） | （不詳） | （掲載なし） | |
| 昭和五年 | （不詳） | （不詳） | （掲載なし） | |
| 昭和六年 | （不詳） | （不詳） | 応援団幹部 | 野球部が第八回全国中等学校選抜野球大会へ初出場（四月） |

※団長・部長の呼称は「団長」に統一した。

# 年表

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和三十年（一九五五年） | | | 大嶋　吉康 | 九人 | 応援団発足。十名のメンバーが校友会部長会議で推薦決定される（四月二十日） |
| 昭和三十一年（一九五六年） | | | 内山　太 | 四人 | 応援団のシンボルとして団旗を製作<br>この年より卒業アルバムに写真が掲載されるようになる |
| 昭和三十二年（一九五七年） | | | 森田　稔郎 | （不詳） | |
| 昭和三十三年（一九五八年） | 近藤　鉄城 | | 宇津木忠征 | 三人 | 生徒会担当の近藤鉄城先生が初代顧問となる<br>卒業アルバムにおける名称が「応援部」となる |
| 昭和三十四年（一九五九年） | 近藤　鉄城<br>小川　禎三 | | 鈴木　実 | 三人 | 野球部が第四十一回全国高等学校野球選手権大会へ出場し、応援部も甲子園球場のアルプススタンドで応援（八月） |
| 昭和三十五年（一九六〇年） | 近藤　鉄城<br>小川　禎三 | 一代 | 大山　暉夫 | 八人 | 第一回対熊谷高校交歓会（交歓定期戦）が開催される（九月十二日）<br>ＯＢの森田稔郎（明治大学応援団）より指導を受ける |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和三十六年（一九六一年） | 近藤 鉄城<br>小川 禎三 | 二代 | 内河 好博 | 十三人 | 第一代ＯＢ大山暉夫（日本大学応援団）より指導を受ける |
| 昭和三十七年（一九六二年） | 近藤 鉄城<br>松本 成二<br> | 三代 | 桑原 優人 | 五人 | 吹奏楽部が結成される（十月三日） |
| 昭和三十八年（一九六三年） | 近藤 鉄城<br>松本 成二 | 四代 | 高橋好次郎 | 五人 | 生徒会総務から独立し、文化部のクラブの一つとなる（春）<br>クラブ化に伴い、従来の「団長・副団長」の呼称を「部長・副部長」へ改める<br>前年十一月に完成した理科棟屋上での練習を開始 |
| 昭和三十九年（一九六四年） | 近藤 鉄城<br>松本 成二 | 五代 | 豊田 辰夫 | 九人 | 部員バッヂと長袖Ｔシャツのユニフォームを作成<br>第二代ＯＢ内河好博が和太鼓を寄贈<br>本校卒業生の粟生田弘明氏（早稲田大学応援部）より指導を受ける |
| 昭和四十年（一九六五年） | 松本 成二<br>高木 宏<br> | 六代 | 井口 敏 | 五人 | 総務部所属のクラブとなる　二代目大団旗を製作　腕章のデザインと色を変更<br>「礼儀・節度・団結」の団則を制定　「凱歌」を歌うようになる<br>乾杯の拍手、撃滅の拍手、紫紺の拍手、打倒の拍手、「川高勝つ」「川高節」を制作<br>飯能市の竹寺にて初合宿を実施。早大の粟生田氏より再び指導を受ける（八月）<br>文化祭において第一回の演技発表会を市民会館で開催（九月十九日） |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和四十一年（一九六六年） | 松本 成二<br>高木 宏 | 七代 | 長 勇 | 五人 | 川越松山地区応援団協議会が発足（六月）<br>水月一拍子を制作<br>本校卒業生の専修大学応援団員と中央大学応援団員より指導を受ける |
| 昭和四十二年（一九六七年） | 松本 成二<br>高木 宏 | 八代 | 田中 真多 | 十一人 | 新部室棟が完成し、応援部は二階の一室を使用（昭和四十一年十月八日）<br>従来の団則「礼儀・節度・団結」を「規律・礼節・団結」へ変更 |
| 昭和四十三年（一九六八年） | 松本 成二<br>高木 宏 | 九代 | 石井 信行 | 六人 | 川越工業高の文化祭で演技発表を行なう（昭和四十二年十月）<br>和太鼓の張替え修理を実施 |
| 昭和四十四年（一九六九年） | 高木 宏<br>安野 昇 | 十代 | 葩島 武義 | 七人 | 対熊高交歓会の終了に伴い、本校の「撃滅の拍手」と熊高の第二応援歌を交換<br>「初雁節」を制作<br>唱歌「花咲爺」の替え歌を応援歌として採り入れ、演技発表会で披露 |
| 昭和四十五年（一九七〇年） | 高木 宏<br>安野 昇 | 十一代 | 岡部 秀雄 | 六人 | 川越商業高と川越工業高の文化祭で演技発表を行なう（昭和四十四年十月）<br>川越農業高の文化祭で演技発表を行なう（昭和四十四年十一月） |
| 昭和四十六年（一九七一年） | 高木 宏<br>大久原 秀雄 | 十二代 | 宮崎 年之 | 六人 | 予餞会（二月十日）と川越女子高との合同新入生歓迎会（四月二十四日）で初めて演技を発表<br>「初雁節」の二番の歌詞を作成 |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和四十七年（一九七二年） | 高木 宏<br>大久原 秀雄 | 十三代 | 青野 博 | 六人 | 一年生部員が全員退部していなくなる<br>炎の拍手を制作 |
| 昭和四十八年（一九七三年） | 高木 宏<br>大久原 秀雄 | 十四代 | 新井 武利 | 七人 | 部員不足のため、夏合宿を中止（八月） |
| 昭和四十九年（一九七四年） | 高木 宏<br>大久原 秀雄 | 十五代 | 新井 克哉（二年生） | （不在） | 三年生不在のため、二年生の新井克哉が団長、松井哲が副団長となる<br>演技発表会を初めて体育館で開催 |
| 昭和五十年（一九七五年） | 高木 宏<br>大久原 秀雄 | 十六代 | 新井 克哉 | 三人 | 腕章を二本線入りのデザインへ変更<br>「凱歌」と「水月一拍子」を三年ぶりに復活させる<br>野球応援で「ＫＯパンチ」（ダッシュＫＥＩＯ）を使用開始<br>野球応援のここぞという場面で学生注目を行うようになる<br>中止していた夏合宿を三年ぶりに実施。生徒ホールに初めて宿泊（八月） |
| 昭和五十一年（一九七六年） | 高木 宏<br>大久原 秀雄 | 十七代 | 大川 博史 | 二人 | 従来の「部長・副部長」の呼称を「団長・副団長」へ改める<br>バレーボールの応援に向けて洋太鼓を購入 |
| 昭和五十二年（一九七七年） | 高木 宏<br>石田 弘夫 | 十八代 | 新井 康之 | 六人 | 「団歌」を制作（昭和五十一年十月）　「団歌」と「凱歌」の口上を作成<br>三年生が自分たちの学年を第十八代と定め、この年から「第〇代」の代呼称を使用し始める　洋太鼓に書道部の牛窪先生より「誠」の字を揮毫頂く<br>第一回「日輪の下に」を開催（九月十一日）<br>演技発表会で新井団長が初めて羽織袴を着用して「川高節」を演じる |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和五十三年（一九七八年） | 石田 弘夫<br>梅沢 正寿 | 十九代 | 神山 正人 | 三人 | 統制の役職を新設（昭和五十二年九月）<br>第二回「日輪の下に」を本校体育館にて開催 |
| 昭和五十四年（一九七九年） | 石田 弘夫<br>梅沢 正寿 | 二十代 | 石井 和宏 | 三人 | 部員バッヂのデザインを変更<br>「日輪の下に」へ不動岡高が新たに参加 |
| 昭和五十五年（一九八〇年） | 石田 弘夫<br>梅沢 正寿 | 二十一代 | 位田 雅章 | 六人 | 演技発表会のパンフレットに矢嶋統制による「私の主張」を掲載 |
| 昭和五十六年（一九八一年） | 石田 弘夫<br>梅沢 正寿 | 二十二代 | 相田 浩伸 | 三人 | 予餞会の幕間に下級生による余興（演芸）を初めて実施（三月七日）<br>三代目大団旗を製作 |
| 昭和五十七年（一九八二年） | 石田 弘夫<br>梅沢 正寿 | 二十三代 | 平井 俊行 | 四人 | 第七回「日輪の下に」を本校体育館にて開催<br>野球応援で「コンバットマーチ」を使用開始<br>「川越高校応援団」トレーナーを作成し、野球応援で着用 |
| 昭和五十八年（一九八三年） | 石田 弘夫<br>梅沢 正寿 | 二十四代 | 神田 隆 | 十人 | 第二応援歌のリーダーテクニックを大幅に改良<br>第四応援歌「凌雲の志」を制作 |
| 昭和五十九年（一九八四年） | 石田 弘夫<br>梅沢 正寿 | 二十五代 | 大澤 一隆 | 八人 | 超大型の洋太鼓を購入<br>校章入りの大型ヤカン（通称「初雁ヤカン」）を作成 |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 昭和六十年（一九八五年） | 梅沢 正寿<br>丸山 哲夫 | 二十六代 | 佐藤 武史 | 七人 | 五校応援団連盟に松山高校が新たに加盟<br>校章入りの「川越高校応援団」トレーナーを新たに作成し、野球応援で着用<br>佐藤団長が自前の羽織袴を部に寄贈 |
| 昭和六十一年（一九八六年） | 梅沢 正寿<br>丸山 哲夫 | 二十七代 | 福沢 正勝 | 二人 | 水泳大会で激励応援を初めて実施（九月） |
| 昭和六十二年（一九八七年） | 梅沢 正寿<br>丸山 哲夫 | 二十八代 | 岩本 憲治 | 十一人 | 渉外、旗手長、鼓手長、総務、新人監督の役職を新設（昭和六十一年九月）<br>第十二回「日輪の下に」を本校体育館にて開催 |
| 昭和六十三年（一九八八年） | 梅沢 正寿<br>丸山 哲夫 | 二十九代 | 海野 和也 | 五人 | 本校初のオリジナル応援曲「ファイティングマーチ」を制作 |
| 平成元年（一九八九年） | 梅沢 正寿<br>丸山 哲夫 | 三十代 | 田中 英治 | 二人 | 「ファイティングマーチ」を野球応援で初めて実施 |
| 平成二年（一九九〇年） | 丸山 哲夫<br>川田万里子 | 三十一代 | 太田 昌平 | 四人 | 女性の先生が顧問となる |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平成三年（一九九一年） | 加藤 光昭<br>石井 啓之 | | 青野 直樹（二年生） | （不在） | 三年生不在のため、二年生の青野直樹が団長、山下誠が副団長となる |
| 平成四年（一九九二年） | 加藤 光昭<br>石井 啓之 | 三十二代 | 青野 直樹 | 四人 | 川越女子高校吹奏楽部有志の演奏で野球応援を実施 |
| 平成五年（一九九三年） | 春日 敬行<br>西野 博 | 三十三代 | 長野 真 | 五人 | 第十八回「日輪の下に」を本校体育館にて開催<br>四代目大団旗を製作 |
| 平成六年（一九九四年） | 春日 敬行<br>西野 博 | 三十四代 | 安達 貴博 | 三人 | 演技発表会のパンフレットを従来の手書きからデジタル化へ変更 |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平成七年（一九九五年） | 春日 敬行<br>杉崎 一彦 | 三十五代 | 東 健太 | 五人 | 早稲田大学の応援曲「大進撃」と「スパークリングマーチ」の使用を開始 |
| 平成八年（一九九六年） | 杉崎 一彦<br>福島 佳克 | 三十六代 | 村田 晃 | 一人 | 応援部史上初の一人幹部が誕生（平成七年九月）<br>改修工事に向けて体育館が使用できず、川越市民会館で演技発表会を開催 |
| 平成九年（一九九七年） | 杉崎 一彦<br>福島 佳克 | 三十七代 | 田辺 仁裕 | 二人 | 体育館が改修工事中のため、川越第一小学校の体育館で演技発表会を開催 |
| 平成十年（一九九八年） | 杉崎 一彦<br>福島 佳克 | 三十八代 | 松井 桂 | 三人 | 前年同様に体育館が使用できず、川越市民会館で演技発表会を開催 |
| 平成十一年（一九九九年） | 杉崎 一彦<br>福島 佳克 | 三十九代 | 石川 康平 | 一人 | 夏合宿と演技発表会を新体育館で実施（合宿は体育館二階の合宿所に宿泊）<br>水泳応援を初めて実施 |
| 平成十二年（二〇〇〇年） | 杉崎 一彦<br>福島 佳克 | 四十代 | 平 和浩 | 七人 | 創立百周年記念式典のアトラクションとして演技を発表（平成十一年十月二十三日）<br>第二十五回「日輪の下に」を本校体育館にて開催 |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平成十三年（二〇〇一年） | 杉崎 一彦<br>福島 佳克 | | 伊藤 文人（二年生） | （不在） | 三年生不在のため、二年生の伊藤文人が団長、迫寛之が副団長となる |
| 平成十四年（二〇〇二年） | 杉崎 一彦<br>福島 佳克 | 四十一代 | 伊藤 文人 | 四人 | 早稲田大学の応援曲「ダイナマイトマーチ」と「F1」の使用を開始<br>理科棟の取り壊しにより、練習場所を管理棟の屋上へ変更 |
| 平成十五年（二〇〇三年） | 杉崎 一彦<br>福島 佳克 | | 松本 健（二年生） | （不在） | 三年生不在のため、二年生の松本健が団長、大芝健太郎が副団長となる |
| 平成十六年（二〇〇四年） | 福島 佳克<br>水野 浩樹 | 四十二代 | 松本 健 | 三人 | 五代目大団旗を製作 |
| 平成十七年（二〇〇五年） | 水野 浩樹<br>内田 憲弘 | 四十三代 | 藤澤 良太 | 四人 | 第三十回「日輪の下に」を本校体育館にて開催 |
| 平成十八年（二〇〇六年） | 水野 浩樹<br>内田 憲弘 | 四十四代 | 木下 裕介 | 二人 | 野球部が夏の大会で五回戦へ進出し、三十九年ぶりにベスト十六となる |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 平成十九年（二〇〇七年） | 水野 浩樹<br>内田 憲弘 | 四十五代 | 宮崎 崇仁 | 一人 | 一人幹部の宮崎団長と二年生一人（後に退部）で演技発表会を実施 |
| 平成二十年（二〇〇八年） | 水野 浩樹<br>内田 憲弘 | | （不在） | （不在） | 三年生不在だが、二年生に役職はつけず、団長空席<br>二年生一人（後に退部）と一年生の清水俊介だけで演技発表会を実施 |
| 平成二十一年（二〇〇九年） | 内田 憲弘<br>峰岸 弘之 | | （不在） | （不在） | 前年に続いて三年生不在だが、二年生に役職はつけず、団長空席<br>唯一の応援部員である二年生の清水俊介が一人で演技発表会を実施 |
| 平成二十二年（二〇一〇年） | 内田 憲弘<br>坂東 正己 | 四十六代 | 清水 俊介 | 一人 | 一人幹部の清水団長の演技を見て、十一名の一年生が入部 |
| 平成二十三年（二〇一一年） | 坂東 正己<br>権田 拓弥 | | 坂本 悠輔（二年生） | （不在） | 三年生不在のため、二年生の坂本悠輔が団長、浅海裕一郎が副団長となる |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 平成二十四年（二〇一二年） | 坂東 正己<br>柳澤有一郎 | 四十七代 | 坂本 悠輔 | 七人 | 第三十七回「日輪の下に」を本校体育館にて開催 |
| 平成二十五年（二〇一三年） | 坂東 正己<br>柳澤有一郎<br>石川 智之 | 四十八代 | 川合 雅樹 | 九人 | 夏の野球大会、初雁球場における朝霞西戦で全校応援を実施（七月十二日）<br>フジテレビ「夏☆1グランプリ 天下一部闘会 高校生キングオブパフォーマー決定戦！」に出演（九月一日放送） |
| 平成二十六年（二〇一四年） | 坂東 正己<br>柳澤有一郎<br>石川 智之 | 四十九代 | 尾崎 拓人 | 七人 | 六代目大団旗を製作<br>野球応援用マーチに「間接コール」を導入<br>昭和五十二年以来、三十七年ぶりに夏合宿を校外（新潟県）で実施 |
| 平成二十七年（二〇一五年） | 坂東 正己<br>柳澤有一郎<br>倉繁 章 | 五十代 | 船山 大睦 | 一人 | 「川高初雁の森」第三回植樹祭に参加し、校歌と第一応援歌の指揮を務める（平成二十六年九月二十八日）<br>小江戸川越マラソン（川越市民マラソン）に応援参加（平成二十六年十一月）<br>夏の野球大会、初雁球場における川越東戦で二年ぶりに全校応援を実施（七月十三日） |

| 年度 | 顧問 | 代 | 団長 | 三年生人数 | 特記事項 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 平成二十八年（二〇一六年） | 坂東 正己<br>柳澤有一郎<br>倉繁 章 | 五十一代 | 北原 大知 | 十二人 | 「アトレの学園祭」「フェスタ勝中」「一一〇番の日」「寺フェス川越ｉｎ蓮馨寺」などで演技を披露<br>静岡県高等学校応援団フェスティバル（第五回記念大会）に六校応援団連盟として演技披露（六月十二日 静岡市民文化会館大ホール） |
| 平成二十九年（二〇一七年） | 坂東 正己<br>倉繁 章<br>伊藤 英治<br> | 五十二代 | 山田 晋平 | 十七人 | ＮＨＫのＥテレ「#ジューダイ ガチ部活 応援部 今なぜ硬派？」に出演（五月十八日放送）<br>テレビ埼玉「高校野球ダイジェスト」へ出演（七月十七日放送）<br>変則的に歌うようになっていた校歌の歌い方を楽譜通りに戻す |
| 平成三十年（二〇一八年） | 坂東 正己<br>倉繁 章<br>小貫 央嗣<br> | 五十三代 | 小松 将大 | 十三人 | オリジナル応援曲「Ｗｉｎｎｅｒ川高」「ＢＬＡＺＩＮＧ」「ライトニングマーチ」「スパイラル」およびファンファーレを制作し、川高応援メドレーが誕生<br>第四十三回「日輪の下に」を本校体育館にて開催<br>オリジナル応援への取り組みがメディアで紹介される。朝日新聞（六月二十六日）、テレビ埼玉「高校野球ダイジェスト」（七月十三日放送）<br>第五応援歌「雄志の一閃」を制作（八月） |

# 川越高等学校応援部小史

本校に初めて応援団が誕生したのは、旧制川越中学校時代の大正 11（1922）年である。我が国における野球人気の高まりを背景に、県大会に出場する野球部を応援するために柔道部や剣道部などに所属する有志らによって組織された。この応援団は後に顧問の先生も存在する公認組織となったが、昭和 6（1931）年度の卒業アルバムに掲載されているのを最後に、その後の存在は確認されていない。

戦争が終わり、昭和 20 年秋に野球部が活動を再開すると、数年後には試合当日の応援をまとめるリーダーが出現するようになった。組織としての応援団は存在していなかったが、毎年応援団長が決まり、その人物が全校生徒を集めて野球応援の練習を行い、試合での応援指揮を務めた。

そして昭和 30 年春、生徒会総務に属する応援団がついに発足した。この応援団こそ現在の川越高等学校応援部のルーツである。応援団役員と呼ばれたメンバーは皆、運動部や文化部に所属する部員であった。昭和 33 年より名称が「応援部」とされた。

部のシンボルである大団旗は、昭和 31 年に初めて製作し、以後老朽化に合わせて新調してきた。現在使用している大団旗は、平成 26（2014）年製作の 6 代目である。

部の発足から 4 年が経過した昭和 34 年夏、野球部が昭和 6 年春の選抜大会以来となる、2 度目の甲子園出場を果たした。応援部はこれを契機に学内における存在感が高まり、大きく躍進することとなった。そして昭和 38 年には生徒会総務から独立し、文化部の 1 つのクラブとなった。昭和 42 年に制定した部のモットー「規律・礼節・団結」の三大原則は今日まで連綿と受け継がれている。

昭和 30 年代から 40 年前半にかけて、明治大学、日本大学、早稲田大学、専修大学、中央大学などの応援団員になっていた、部のＯＢや本校卒業生から個人的に指導を受けたり、また部員が東都の各大学の応援団を見て研究を重ね、川高としてのリーダーテクニックや応援手法が完成されていった。

拍手は草創期に「川高拍手」を制作し、昭和 40 年～47 年の間に「乾杯の拍手」「撃滅の拍手」「紫紺の拍手」「打倒の拍手」「水月一拍子」「炎の拍手」を制作した。これら七つの拍手は、それぞれ異なるリーダーテクニックで独特の調子を刻んでいる。

また部発足前の昭和 26 年、生徒会の提案により歌詞の学内公募が行われて、詞・曲ともにオリジナルの応援歌「奮え友よ」と「凱歌」が誕生した。以後、本校の歌は応援部が創り出し、昭和 40 年に「川高節」、昭和 44 年に第三応援歌と「初雁節」、昭和 52 年に「団歌」を制作した。第二応援歌は昭和 44 年に熊谷高校との交歓定期戦終了にあたり、両校応援部の演技交換として同校から頂いた。この時、本校は「撃滅の拍手」を伝えている。その後、詞・曲ともにオリジナルの応援歌として、昭和 58 年に第四応援歌「凌雲の志」、平成 30 年に第五応援歌「雄志の一閃」を制作した。

昭和 63 年には本校初のオリジナル応援曲「ファイティングマーチ」が誕生し、平成の時代になると、従来の太鼓・かけ声・拍手による応援から、音楽を主体とした応援曲応援手法へと移行していった。平成 7 年に早稲田大学応援部の指導を受けると、以降は同大学の応援曲をメインで使用するようになっていたが、平成 30 年に本校独自のオリジナル応援の確立をめざして「Winner 川高」「BLAZING」「ライトニングマーチ」「スパイラル」の４つのオリジナル応援曲を制作した。これに「ファイティングマーチ」を加えた 5 曲による「川高応援メドレー」は、野球をはじめ様々なスポーツ応援や学内外のイベントなどで行われ、共に応援する者、観る者の心を熱くしてやまない。

# あとがき

川越高校応援部ＯＢ会副会長　松本　朗（高校第三十三回、第二十一代）

母校百二十周年という記念すべき年に「川越高等学校応援部史」を発行できる運びとなり喜びも一入です。

約四十年前、川越高等学校に入学した私は中庭で校歌・応援歌のオリエンテーションを受けたのですが、紫紺の大団旗はためく下、勇壮な太鼓が響き、先輩の切るエールに「これが伝統校の技か」と驚天動地の思いで魅了され応援部に入部いたしました。それから春夏秋冬、屋上で発声・くにく・拍手・すり足・突き・落とし等の基礎練習に励み、校歌・応援歌・拍手等の演技を先輩方から伝授されて心身共に鍛錬されました。やがて上級生になり学校行事の際全校生徒の前で応援歌のリーダーを任された事は栄誉であり自信につながりましたが、この時の経験が今に至るまで私のバックボーンとなっております。

平成三年応援部ＯＢ会が発足した時、私は末席の幹事に名を連ねていましたが十分職責も果たせずに無為の日々が過ぎました。そして平成二十二年母校野球部ＯＢチームが埼玉県代表としてマスターズ甲子園に出場するという知らせを受けてから再びＯＢ会活動に関わるようになったのですが、応援部は部員減少により存続の危機に陥っていました。しかし顧問になられた坂東正己先生のご尽力により風前の灯状態にあった応援部も徐々に復活を遂げ、翌年の東日本大震災の試練の時も練習に励む現役学生の指導にＯＢ有志が母校に駆け付けました。それから幾星霜、母校応援部は全国的にも最大規模の応援部に成長して、母校の生徒を応援し、地域活性化にも活動の幅を広げるようになりましたが、その起源を探求していこうという機運が熟し「川越高等学校応援部史」プロジェクトがスタートした次第です。

まず事務局で年表作成から着手しましたが、古の記憶は忘却し資料も散逸しているという壁に直面しました。そこで松井哲会長の下、事務局スタッフに加え、「ニッポン野球の青春」という名著の執筆者である第二十四代菅野真二氏の協力を仰ぐ事に決し体制を強化しました。そして菅野氏の史実探求にかける不屈の闘志と獅子奮迅の活躍で応援部史関連資料は続々と発見・収集され格調高い文章にまとめあげられていきました。その過程において顧問の坂東先生はじめ同窓会及び図書館スタッフの方々、応援部歴代ＯＢの方々、浦和高校応援団ＯＢ会長及び春日部高校応援指導部ＯＢ等の皆様には多大のご協力をいただき、深く感謝を申し上げます。

最後に本書が母校応援部関係者のみならず埼玉県の応援団文化を愛し関心を持つ方々のご理解の一助になれば幸甚です。時代を越えて母校応援部が益々発展していくことを祈念しております。

# 参考文献


■学内資料

川越中学校卒業記念写真帳／川越高校卒業記念アルバム
川越中学校学友会会報
川越高校新聞
川越高校生徒会会報
「埼玉県立川越高等学校 創立七十周年記念誌」（昭和四十五年四月）
「埼玉県立川越高等学校 創立八十周年記念誌」（昭和五十四年十一月）
川越高等学校同窓会会員名簿（第十七号・平成元年版）
「川越高校野球部七十年史」（埼玉県立川越高等学校野球部ＯＢ会・平成元年五月）
「おーい、楠の木よ」（埼玉県立川越高等学校第三期生還暦の文集刊行委員会・平成六年三月）
「百周年記念誌 くすの木」
「日輪の下に」パンフレット（六校応援団連盟）
川越高校応援部発表会パンフレット

■書籍・雑誌等

「野球界」（野球界社・昭和六年五月号、六月号）
「選抜高校野球大会三十年史」（毎日新聞社・昭和三十三年）
「週刊ベースボール増刊」（ベースボール・マガジン社・昭和三十四年九月十日号）
「選抜高校野球大会三十五年史」（毎日新聞社・昭和三十九年）
「水戸一高百年史」（水戸一高百年史編集委員会・昭和五十三年十一月）
「ふるさとひろしま 第四号」（ひろしま郷土史研究会・昭和五十七年）
「慶応義塾大学応援指導部七十五年史」（慶応義塾大学応援部三田会・平成二十年七月）
「早稲田大学応援部史」（早稲田大学応援部稲門会・平成二十二年五月）

■新聞

東京日日新聞、毎日新聞、朝日新聞、読売新聞、産経新聞、埼玉新聞、東京新聞

## 部史編纂にご協力下さったＯＢの方々

※敬称は略させて頂きました

岡田　勲（第１代）
岡本　元（第２代）
山岸　岩雄（第３代）
相曽　利章（第５代）
豊田　辰夫（第５代）
渡辺　賢（第５代）
井口　敏（第６代）
長　勇（第７代）
長島　経男（第７代）
田中　真多（第８代）
石井　信行（第９代）
金子　肇（第 10 代）
佐藤　真寿夫（第 12 代）
中島　信義（第 12 代）
大久保　正之（第 13 代）
本橋　孝之（第 13 代）
金澤　和春（第 14 代）
平松　宏之（第 14 代）
藤澤　俊行（第 14 代）
松井　哲（第 16 代）
梶野　洋司（第 17 代）
新井　康之（第 18 代）
関　孝史（第 18 代）
根岸　優（第 18 代）
村上　敏之（第 18 代）
岡崎　博次（第 19 代）
神山　正人（第 19 代）
石井　和宏（第 20 代）
常岡　幸夫（第 20 代）
人見　國男（第 20 代）
位田　雅章（第 21 代）
加藤　雅之（第 21 代）
齋藤　浩（第 21 代）
松本　朗（第 21 代）
相田　浩伸（第 22 代）
野村　照久（第 22 代）
廣田　直人（第 22 代）
竹尾　淳（第 23 代）
平井　俊行（第 23 代）
武藤　信二（第 23 代）
山尾　和輝（第 23 代）
大澤　一隆（第 25 代）
村木　隆（第 25 代）
佐藤　武史（第 26 代）
平野　祐明（第 26 代）
吉田　洋泰（第 26 代）
岩本　憲治（第 28 代）
高橋　純（第 28 代）
田村　英紀（第 28 代）
杢保　孝則（第 28 代）
石丸　敬人（第 29 代）
大室　博光（第 29 代）
田中　英治（第 30 代）
松本　和宏（第 30 代）
三枝　真（第 31 代）
青野　直樹（第 32 代）
小林　拓実（第 33 代）
長野　真（第 33 代）
安達　貴博（第 34 代）
関根　盛敏（第 35 代）
東　健太（第 35 代）
伊藤　雅一（第 37 代）
田辺　仁裕（第 37 代）
杉山　一志（第 38 代）
石川　康平（第 39 代）
木下　真介（第 40 代）
吉田　健人（第 41 代）
太田　龍之介（第 43 代）
木下　裕介（第 44 代）
清水　俊介（第 46 代）
坂本　悠輔（第 47 代）
川合　雅樹（第 48 代）
川原　吉広（第 48 代）
星野　航佑（第 48 代）
松本　優一（第 49 代）
舩山　大睦（第 50 代）
北原　大知（第 51 代）
山田　晋平（第 52 代）
郡山　結人（第 53 代）
小松　将大（第 53 代）

光輝と伝統の
母校を
勝利の王座へ
導くために

平成30年夏　野球応援

# 川越高等学校応援部史

令和元(2019)年９月１日
編集責任者　松井　哲
編集・発行　川越高等学校応援部ＯＢ会